



登場人物紹介

否睡(ひすい、インソムニア) 能力 ダンス・マカーブル
能力者ギルド「ドーン」のハンター(始末人)。

ゴシック・パンクのファッションに身を包んでいる。
(他、登場作品、グロテスク&メランコリィ、黒死病の天使など。)

甘名(かんな、フェンリル) 能力 フェンリル
能力者ギルド「ドーン」のハンター(始末人)。
ただし、彼自身は「人を殺せない」という嫌悪感を持っている。

黒白のゴシック・ロリィタの美少女顔の美青年。二刀流の剣士。
(他、登場作品、ヴァンパイア・パロール、セフィロト・ロードなど。)

ライフ 風俗街にてSMの女王をしている。能力者。
マゼンダ AV女優。ライフが娘のように思っている女。

花鬱 (かうつ) 能力 邪魅曼荼羅
能力者組合「ドーン」のハンター。
着物姿の妙齢の女性。

ツイン・スラッシュ 能力 レッド・オア・ブルー
花鬱を崇敬している二十代の女、元キャバクラ嬢。
ドーンのハンター。

ミスティ 能力 ナルコレプシー
浮遊城のメイド。

ズンヴィー 同性愛者。賞金首にランクインされている殺し屋。フォールスとはレズビアン・カップルである。

フォールス・メモリー 同性愛者。賞金首にランクインされている殺し屋。ズンヴィーとコンビを組んでいる。

メビウス・リング 能力 ウロボロス

能力者ギルドである「ドーン」の創設者。

人間サイズの黒いドレスを纏った金色の巻き髪をした球体関節人形。

(他、登場作品、ゴシック・アトミー、ヴァンパイア・パロールなど。)

「ドーン」

能力者組合。一般的にはランキングに入れた犯罪者を「賞金首」にして取り締まるシステム。

「アトミア」 風俗街が広がった都市。天空には謎の浮遊城が存在する。

※本作品はインソムニア、フェンリルなどのキャラクターの過去のエピソードに該当する。

序章 メビウス・リング

自分には感情なんてものは存在しない。

それは、事実として認識している。

だから、生きている人間の感情なんて理解出来ないし、無意味であれば、理解するつもりも無い。ただ、彼女は思考する事は出来た。可能、だった。

彼女は黒いドレスをはためかせる。

夜風だ。

巻いた自らの黄金色の髪も、風に靡いていく。

黒い闇の中に、彼女の金色の顔と、蒼白な顔が浮かび上がる。

彼女の名前は『メビウス・リング』と言った。

自分の意志なんてものは存在しない。

そもそも、心などを有する機能が無いのだから。

メビウスは、自らを単なる“調律する者”なのだと考えている。

ただ、彼女は追いつけていた。

それは、まるで彼女を創った“何者”かによってプログラムされたものだった。

“混沌”“無秩序”。

その片鱗を垣間見せる、何者、か。

そいつは、この世界を凍結させようとしている。ただ、メビウスはそれだけを知っていた。

世界というテーブルがある。広い広いテーブルで、テーブルは幾つも存在している。

その上には、裏向きのトランプのカードが並んでいる、どれがジョーカーなのか分からない。

乱雑に並んだ、カード。

ターゲットは、シャッフルされた部品の中に存在する。

それらのどれかに彼女が倒すべき者が与えた“力”が入り込んでいる。それは、きっとメッセージなのだろう。それは彼女にしか分からないメッセージだった。だから、彼女が始末しようとする基準は、他の者達には分からない。理解される必要も無い。

誰が、倒すべき力を有しているのか？

それは、彼女自身が見つけなければならない。

メビウス。

彼女は人形だった。球体関節人形だ。

そして、異能の力を持つ者達を統率する『組織』の首領であり、創設者だった。彼女はこの組織自体には、それ程、強い興味を有していない。何故ならば、それは“手段”だからだ。ターゲットを炙り出す為の手段、だ。

いつだって、“偽物のジョーカー”だ。

本物のジョーカーに辿り着かなければならない。

これから向かう街から、彼女が倒すべき敵の波動を感じる。今回も、痕跡しか分からないのかもしれない。それでも向かわなければならない。

街の名前は『アナトミア』。歓楽の街だ。資本によって、墮落した街。

彼女は『組織』の統率者だ。

だから、組織に所属する何名かの者達を使おうと思った……。

第一章 ヘルター・スケルター

そこには、沢山の女達が集まっていた。

ズンヴィーは“相方”のフォールス・メモリーの下に行く。

フォールスはかなりの美人で、ズンヴィーは男っぽい骨ばった顔立ちをしている。

ズンヴィーは淡い紫のメッシュを入れて、エナメルドレスにキツイコルセットを身に付けている。それでいて、全身にボディ・ピアスなどの軽い人体改造を施している。穿いた網タイツは所々に孔が開いている。

フォールス・メモリーは色鮮やかな巫女装束のような服を身に纏っている。

「フォールス。待たせたわね」

二人共、飽満な肉体を有していた。

トランス・ミュージックが流れ続けている。社交場に来る人間は、踊りながら、相手をとる者を探していた。カラフルなドリンクがカウンターに用意されていた。

此処は、女の同性愛者達の社交場だった。

各々が、相手となる者を探す女達で溢れている。同性愛者は、何処か匂いで分かる。みな、お互いの相手や相手となる者達を探している。

二人は、社交場の外へと出る。

ホテル街が続いている。

一つ、気に入った場所を見つけた。その中へと入っていく。

プラネタリウムの飾られた部屋だった。

そして、二人は部屋へと入った。

所謂、ズンヴィーの方が“男役”であり、フォールスの方が“女役”だった。

エナメル姿の女の方が、桃色の髪をした女の巫女服を脱がしていく。

巫女服姿の女は、恍惚の表情を浮かべる。

這う指。

もっとも、官能を感じる部分を巧みに探し当てて触れる。

互いに知り合った肉体。

互いの愛撫の仕方も知っている。

ズンヴィーは、巫女の女の下腹部に舌を這わせていく。

フォールスの全身は紅潮する。

二人は、お互いの髪を撫で合う。

そして、肌と肌を合わせる。

お互いの体温が染み渡っていく。

陶酔感。

深い海原に沈んでいくような感覚。

頭の中が真っ白になる。

そして、彼女は恋人の顔を見つめた。

フォールスは彼女を愛していた。彼女の優しい愛撫に全身の力が抜けていく。

フォールスは、カーテンを開け、窓を開いた。

「……………ズンヴィー。あたし達、狙われているよ」

彼女の顔色は真っ青だった。

「『ドーン』のハンターだ。狙っている」

十

「『浮遊城』は落とさないといけないな」

黒い百合は一人、そこに佇んでいた。

ネオン街が輝いている。

光る看板には、人間の欲望を引きずり出すものが秘められている。

思わず、足を踏み入れたくなる何か。

たとえば、電球に、蛍光灯に、羽虫が群がりたくなるように。

そして、その羽虫達は、熱によって焼け爛れていくのだ。

所謂、特殊な性癖を持つ者達を集めた歓楽街『アナトミア』。

此処では、あらゆる嗜好が赦されている。

ソドムの街だ。

あやしげなショップこそ、沢山、存在するが。店の外での異常行動を取り締まるように、あらゆる場所に監視カメラが仕掛けられている。

あらゆる場所が、誰かによって見られているのだ。

彼女はこの街にあるバーの用心棒をしている。

たまに、客の相手もする。

此処は、素晴らしい。このような場所としては、ちゃんとした秩序が保たれているからだ。彼女は色々な世界を巡って、その詳細を観察した事があるが、“グレー・ターム”のように非人道的に隔離された場所や“アイス・エイジ”のように廃棄物的な場所と違って、街ならでの法がしっかりと巡らされている。

しかし、それは表向きは、だ。

十

否睡は『ドーン』のハンターに登録して、数ヶ月が過ぎていた。

彼女は表向き、高校生をしている。

肉体が老いない為、外見年齢は充分にその年頃の人間に溶け込む事が出来た。その高校は、ある特殊な存在を秘密裏に沢山、受け入れている場所だった。

それに、彼女自身、精神が幼かった。

高校に入って、何名か友人も出来た。

そのまま、適当な高校生活を送れるものだとばかり思っていた。

彼女が任命されたのは、本当に偶々だった。

否睡は何気なく入った喫茶店の中にそいつはいた。

人目見て分かった。そいつはヤバイ、と。

.....一つの異界に迷い込んで、異界の人物に遭遇してしまったのだと理解した。

漂っている空間の色は、不思議と金色を帯びているかのようだった。

そいつは。

全身から、得体の知れない何かを発している。その何かとは、何なのだろうかと考えて。それは、ある種の聖性だったのだと。後ほど、気付いた。

そいつは、全身、黒尽くめのドレスを纏っていた。

顔は綺麗というよりも、陶器のようだった。実際、そうなのかもしれない。

髪は金色で、まるで螺旋を描くような形をして、足元まで伸びている。

「あ、.....お前、何者なんだよ？」

思わず、彼女は思った事を口にする。

「お前はドーンの者か」

そいつは、淡白な表情で彼女を吟味していた。

感情の灯らない顔。

無機質な肌。

まるで、非人間じみた何か、空間を支配している。

「お前は運命的な要素が強いのだろう。私が此処にいたのは、花鬱を待っていた為だったのだが。まあ、いい」

気付けば、喫茶店の中には誰もいない。店員さえも。

彼女は置かれていた紅茶を口にする。

とても、美味しそうに飲んだ。

「この肉体は人間のそれではない。しかし、たとえばこのように紅茶の味を楽しんだり。コーヒーの香りを楽しんだりする事だって出来る。私の肉体は空洞であるのにも関わらずな」

「空洞.....？」

「私は、人間と等身大の人形。球体関節人形なのだよ。喋って動く、人形だ」

そう言って、そいつは服の袖をめくった。

すると、セルロイドの肉体が露になる。

不思議な質感をしていた。

怪物？ 化け物？ 悪魔？ いや、どれとも違う。

こいつは。こいつは.....。

「私の名前は、メビウス・リングと言う。円環という意味だな。終わりの無い円環だ。終わりの無い、この世界そのものを秩序立てて動かす為の環なんだ。私自身でさえ、私が何者なのか分からないが。それでも、私の為すべき事は理解している」

どういう事だ？ と否睡は訊ねた。

「システムの維持。それが私の使命だ。それ以外は分からない。けれども、私はこの世界にとってとても重要なのだろうか」

そう言って、そいつは残った紅茶を啜った。

そいつの印象は、一枚の絵画のようだった。

まるで、現実の向こう側にある存在のような。奇妙さ。

まるで、この世界の人物とはとても思えない。この世界に生きているものとは……。

後に、そいつがドーンという組織そのものを統治している存在だと知って、絶句してしまった。

それは、余りにも在り得ない偶然の出会いだった。

否睡はある意味で言えば、凡庸な能力者の中の一人でしかなかった。

しかし、彼女の運命をつねに変え続けたのは、彼女がいつ頃からか手にしていた、一つの才能と呼べる“強運”だった。

メビウス・リングは言った。

「お前は、私に付いてこればいいんじゃないのか？　もしかすると、お前自身の運命を変えるのかもしれないぞ」

否睡の人生。

それがこれまでの可能性とズレていった。

否睡は。

“神”に出会ったのだ。

十

暗い部屋。

TV画面にノイズが走っている。

髪はぼさぼさだった。

彼女は万年布団から這い上がる。

そういえば、もう何週間もお風呂に入っていない。

電話が来るまではいつもこうだ。

他人に会うのが億劫で仕方が無い。どうせ、他人に会わないのなら、どんな格好をしていたって構わない。床には化粧品も散乱していた。コンシーラーはそういえば見つからない。

彼女は寝起きで、鼻に指を入れる。

そして、眼の辺りに溜まった垢を床に落としていく。

テレビの隣にはアダルト・ビデオが積まれている。洋物、アニメも多い。

本棚には、沢山の男同士が絡み合う卑猥な雑誌が並んでいる。その上の棚には、お気に入りの死体写真集が積まれている。

最近、本物と行為に及んでいない。夜の仕事をされていて、男の本音を感じ取って、気味が悪くなったからだ。

彼女は本棚の中に手をやる。

そして、その中から、何冊かのお気に入りの作品を取り出す。

一番の好物は、小さな男の子を監禁する奴だ。支配欲を存分に満たしてくれる。

彼女は左手でページをめくりながら、右手で自分の胸や腹、腿に手を這わせていく。そして、しばらくして下半身へと指先を這わす。

.....

.....

気持ちがいい。生きている実感。

大体、毎日、こんな事ばかりしている。

彼女は吐息を漏らしながら、頭の中にイメージを広げていく。

電話が鳴り響いていた。

苛立ち。

本を持っていた、左手で電話を取る。

「はい.....」

相手は彼女に語り掛ける。

「なによおお。もう、キャバ嬢は止めたの。やる気ない。携帯も解約したし、キモい男からメールを連発されるから。現実の男は嫌いっつってんでしょ。.....ああ、あっちの仕事の方。分かったわ、分かったから。.....そおね、二時間後にまた電話して」

彼女は電話を切る。

そして、煙草の箱を探した。

切らさないように、数カートン買っておいてある。

しかし、見てみると、後、二箱しか無い。また苛立ち。

取り合えず、箱を開けて、火を付ける。ライターを探すのにも数分掛かった。灰皿は昨日飲んだ缶ジュースの空き缶を再利用する事に決める。

「まったく。もう現実の男はいっての、わたしには二次元があるんだから。.....はあ、せっかく、一人でやる事もやれやしない。.....」

溜め息。

再び、頭の中で先ほど思い描いていたイメージを再現しようとするが、どうにも巧くいかない。

。

苛立ち。溜め息。

日にちの感覚がよく分からない。

そういえば、鏡見たの何日前だっけ。

眉毛処理の仕方ってどんなだったっけ。

預金の方は、まだ充分にある。前にやっていた夜の仕事と、.....もう一つの収入の方。

その仕事も仕事で、面倒臭い。それでも、スリルはあって夜の仕事よりも断然、面白いのだが。やはり、外に出て何かをやる以上は面倒臭い事には変わりはない。

ああ、もう本当に何もかもが面倒臭い。

再び、電話が鳴る。

彼女は面倒臭そうに受話器を取る。

「……あれ、ははっ。花鬱さま。自らですか。いや、わたしですね。ちょっと、今すぐには出られなくて。明日でいいですかね？ ……はいはい、支度しますよ。もう……」

あっちの仕事の誘い。

「花鬱さま、面倒臭い仕事を持ってくるんだから……」

そう言いながらも、少し火照った顔になる。思わず、笑みが漏れる。

彼女は花鬱の事が好きだ。尊敬もしている。

少し、同性愛にも似た感情。別にバイとまでは、行かないが、彼女は少しそういうのにも憧れる。

適当に服を探す。

その前に、シャワーも浴びよう。

鏡を見る。

伸ばしに伸ばした黒髪。

少し前までは、茶色に染めていたのだが、すぐに頭頂部が黒づんでくるから止めにした。

ぽりぽり、と頭を搔いていく。

彼女はシャワーを浴びて部屋に戻る。

足元が何かを踏んで、すっ転がした。

……沢山の吸殻の入っていた灰皿だった。

「あー、畜生。何やってんだ、わたし」

床や足が汚れた事よりも、大量に置かれている漫画本に灰が降りかかった事を悔やむ。

ああ、やっぱり、本当に何もかもが面倒臭い。

自分自身でさえも、面倒臭い。

十

「甘名、お前は高校とか行かないの？」

「何、言っているんだ？ オレは一応、高校卒業した事になってるんだぞ」

馴染みの静かな喫茶店。

彼はメイク道具と鏡を熱心に弄っていた。

かなりの美貌の男だ。

ゴシック・ロリィタの服で全身を包んでいる。

今は、所々にブラウンを混ぜた、淡いハニー・ゴールドで染めている。

「この服装倒錯者。オマエ、自分にしか興味無いだろ」

「クロスドレッサーって呼んで欲しいんだけど。腹立つ……」

「私がヴィジュアル系大好きなのに感謝しろ！ オマエみたいなの、友達なれるの、私くらいしかいねーんじゃねえの？」

にやにやと笑う。

「死ね」

と、彼は腹立たしく返す。

甘名はいつも、不貞腐れたような顔をしている。

黙っていれば、美人なのだが。どうも、他人を煙たがっている。

それは、幼馴染の否睡でさえ、例外ではない。

けれども、心の一部だけでも開けるならば。

きっと、それは友人と呼べるもので……………。

「そいえばさあ。甘名、小説とかって書いてんの？ まだ」

「ああ。……今は書いていない」

「気になるんだけどな。“トリーヴァ”と“レイア”と、“マフィーナ”だったっけ？」

「トリーヴァは主人公で弱いオレ自身を克服する為に書いた。レイアってのは魔術師だな。トリーヴァってのはいずれ、英雄になって魔王である荒廃の呪術師マフィーナを倒すんだけど、その途中の成長を書いている」

「ファンタジーだよなあ。剣とか魔法とかの。でも、あんまり背景描写とか巧くなかったぜ。それは、直した方がいいんじゃないの？」

「煩いな。本当は他人に見せる為に書いていたわけじゃない」

「今は、何で悩んでんの？」

「アスモデ、ベルゼビウト。敵の大ボスの作り方かな。世界の色々な魔王に挑んでいく話だから。ああ、天使系のボスも書きたくて……」

そこまで話して、口を噤む。

彼は自分が自らの作品を熱く語っている事に、気付いて恥ずかしくなった。

誰にも読ませるつもりはなく、書き続けていた小説。

込み上げてくる嬉しさに、自己嫌悪を覚える。

「小説家とか目指してんの？」

「ならないよ。小説自体、この世界が嫌いだから書いている。多分、在る。この世界ではない、もう一つの世界が。幾つもの世界がある、きっと」

「ああ、あるぜ。バウンティ・ハンターになって分かった。この世界は幾つもの多重な世界が重なっているんだ」

そうではなくて、オレの思い描いた世界は在るんだ、と彼は言おうとしたが止めた。

代わりに言葉を探す。

強がりに聞こえない言葉。……………。

「たまに自分の“能力”について考えると、思いが巡ってくるんだ。何処まで飛んでいくのだろうか、って。だから、小説とか漫画とかの世界にも飛んでいけるんじゃないかって。つまり、オレは考えている。ひょっとすると、大宇宙の裏側に物語で書かれている世界が実在するんじゃないかって」

「空想癖強いよなあー。私には分からねえ」

否睡は、両手を広げて、肩を竦めた。

「処でさあ。なあ、甘名。老いなくなっていない？」

彼女はまた、外見年齢が十五、六のままで止まっている。本当はもう少しだけ、年齢が高い。「オレの場合は少しずつだな。……お互い能力のせいだろうな。オレの場合は、空間を飛び越える事自体が、何か時間的なものと直結しているのかもしれない」

彼は否睡と違って、外見が成長している。

しかし、何となく分かっている。おそらくは、二十代の半ばくらいで容姿の時間が止まるのではないか、と。

時間から開放されていく。それは、果たして。

良い事なのか、悪い事なのか。

しかし、少なくとも、彼にとっては良い事だった。

それにしても、否睡はガチガチのゴシック・パンク・ブランドに身を包んでいる。

ハンターの仕事をしてから、購入したらしい。

「『デッド・リボーン・コンプレックス』のガーゼTシャツとボンテージ・ズボンだぞ。いいだろ？ それに、アクセサリーは『パンプキン・フレア』だ、格好いいだろ？」

甘名は呆れた顔をする。

「普通にさあ。原宿で売っている、イノセント・ワールドでいいよ。可愛いし。『裏』の方で売っている奴らだろ？ それ、本物の人体を加工して作った服とかもあるらしいじゃないか」

「デッドリーが、まあ、それなんだけど。いいんだぜえー、吸血鬼や暗黒の魔物達を相手に商売してやがるんだ」

本当に、何考えているんだ、こいつは、って思った。

こいつは、昔からそうだ。気味の悪い悪趣味な世界が好きだ大。

ゴス、とかいう奴なのだろうか。

甘名は、ピル・ケースを取り出した。

沢山の錠剤が入っている。

それを口に入れていく。

気分が落ち着いていく。

十

性としての商品であるという事。それによって行われる女という生き物の立場。

女の性欲は嫌と言う程、知っている。……同時に、女の性嫌悪も、だ。

花鬱を慕ってくれる女達は、彼女を姉御のように見ている。

いつしか、彼女の周りには、人生からあぶれて、自らの性を商品として売らざるを得ない女性達ばかりが集まっていた。

夜の仕事の者達。……。モデル関係、映像関係の女達。……。

「花鬱さまあ、本当に花鬱さまって女に好かれる。女っすよねえ」

傍らには、ツイン・スラッシュが立っていた。

彼女は急いで、メイクしてきたのだろう。相変わらず、家にひきこもって寝てばかりいるに違いない。それなりに美人なのだろうが、台無しだ。

「そんなつもりは無いんだけどねえ」

花鬱はパイプ煙草を噴かす。

同時に、ツインも自分のマイルドセブンに火を付ける。

ツインは似合いもしない癖に、やたらと高いブランドである『ティアマット』を身に付けている。前衛的で高級なジャケットがお気に入りらしい。もっとも、どうせオークションか何かで、格安で落札したものだだろうが。

花鬱は、此处で用心棒の仕事をしている。

所謂、良識的なヤクザが行っている事に近いものだ。といっても、そういった組織に所属しているわけではないが。要は、揉め事の仲裁。金銭トラブル。違法な店に対しての追い込み。

何処の業界でも、そういった仲裁役が必要だ。

花鬱は、この街のボスの一人だと言ってもいい。

組織こそ持っていないが、この街では彼女の存在は強大だった。

その理由はたった一つ。

彼女の有する圧倒的な暴力だ。

分かりやすい強さを示す事によって、この街で商売をしている人間は、彼女を恐れ、同時に憧憬の念さえ抱いていた。

彼女といられる時間が、とても好きだ。

一度、暗い部屋を出るのは、楽ではないし、億劫でしかないが、彼女と会った瞬間に、これまでの倦怠感など、何処かへと吹き飛んでしまう。

二人は待ち合わせ場所に、もう二人程の人間が現れるのを待っていた。

十

「こんな可愛い子達とお仕事が出来るとは光栄だなあ！」

そう言って、ぼっさぼっさに伸ばしに伸ばした黒髪を適当に束ねた女性は、二人をしげしげと見つめていた。

彼女が花鬱の相棒。

「ふははっ、可愛いなんて嬉しいなあ？ 甘名」

ゴシック・ロリィタのドレスを身に纏った白晳の美貌の青年は、二人から距離を置くように、腕を組んで不機嫌そうな顔をしている。

「これが、今回、“始末”しなければならない者達だ。この四名の顔をちゃんと覚えておくように」

彼女は淡々とコピーした写真を、三名に配っていく。

倒すべき相手は四名。

そいつらは、死ななくてはならない。

「三名とも聞いて欲しいのだけど。今回はメビウス様、直々の勅命だという事を忘れるなよ。失敗は赦されない」

花鬱は浮かれに浮かれる、否睡とツインを諷める。

「オレはハンターじゃないぞ」

甘名は少し苛立ちながら言った。

四名は、ワゴン車へと乗り込む。

運転するのは、花鬱だった。

『アナトミア』はそれなりに広い。此処から、数キロ先にある『浮遊城』の辺りまでは、数キロ掛かるのだが、人通りの問題もあって、それなりに時間が掛かりそうだ。

まずは、始末するべき四名のうち、メビウスが消したがつている、一番の大物である浮遊城の主を倒す事を念頭に入れる事にした。

残りの三名は正直、オマケみたいなものなのだ。

だが、念の為、始末しておいてくれ、と言われた。

その物言いに対して。

何となく、いい加減さすら感じ取れたが、まあ、それもドーンの特徴なのだろう。

否睡とツイン・スラッシュは出会ってから、すぐに意気投合していた。

「へえ、ヴィジュアル系が好きなの。ひーちゃん」

「ツイン。てめーは何が好きなんよ？」

「ああ。わたしね、わたしはそのなんだ。恥ずかしいよ？ だから、ひーちゃんのヴィジュアル系の中でも好きなタイプ教えなよお」

「そだなあ。私はあれだ、割りと男っぽくてナルシストっぽい奴が好きだな。髪は短くて。でも、ゴテゴテのメイクして。普通だろ？」

「なんか、私が恥ずかしくなって来たじゃないか！」

しばらくすると。

ワゴン車の窓越しに、一人の家族連れが通る。

母親と子供だった。母親の方はいかにも、夜の仕事風といった格好をしている。かなり、若い。彼女の夫の方は、一体、何歳くらいなのだろう？

そんな無粋な思考をしながら、甘名は冷やかに夜の街を見ていた。

「ほら、今、通った母子いるじゃん、子供の方！ 私ね！ あの男の子タイプ。凄い好きで、部屋に入れてさ。出たくないね！」

「出たくないって、それって監禁したいって事かよ？」

「っそそ。それで、私が存分に可愛がる。私好みに育てて、私好みに色々教えて上げる」

「教えて上げるって何をだよ？ キモいな！」

「知ってるかい？ 子供だってさあ、エロい事、考えてるんだぞお？」

「あー、キモい。キモい。甘名、何か言ってやれよ」

「.....あのさ。さっき言おうと思っていただけ。ツイン・スラッシュ。.....お前、眉処理が甘い。眉の書き方も下手。リップ・グロスも似合っていない。それから気持ち悪いから、美

容院に行け。せめてシャンプーが香るくらいの手入れをしろよ」

本当に苛立ちを交えて、彼は言う。

それにしても、と彼は思う。

何で、女ってのは、こうも猥談が多いのだろうか？ 気持ちが悪い。

そんな彼の微細な感性や嫌悪に気付かず、その女は別の話題を、否睡へと振る。

「花鬱さまはねえ、私の憧れなんすよお。そのプロポーション、美貌。私に少しくらい分けてくれませんかねえ」

「ツイン。あなたも充分、可愛いとは思うけどねえ。アタシなんかに憧れても仕方無いぞ。それに下手に豊満な肉体を持っていたら。この街だと食べ物にされやすい」

花鬱は呆れながら、二人のテンションを下げようとする。

「またまたあ、わたしは大丈夫っすよ。客のド頭をかち割って、クビになったくらいっすから！」

屈託無く笑う。

十

小鳥が空を飛んでいた。

ミスティは小鳥が好きだ。

彼女は、この『浮遊城』の王である主人の世話をしている。

この浮遊城に住んでいるのは、主人と彼女の二人だけだ。

後は、“ヘッド・レス”という頭の無い機械人形が雑用をしてくれる。

「ご主人様、朝食が出来ましたよ！」

この城の中には時計が無い。

時間の止まった世界で、二人は生きている。

二人にとって、それが最上の幸福だった。

安息感、安心感。

ミスティは、主人の為に炊事洗濯をするのが大好きだ。

この閉ざされた浮遊城の中で、二人で生きていく事がとても幸福なのだ。

出来ればずっと、このまま二人でいたい。

彼も強くそう思っている。

決して、誰からの干渉も受け付けない世界。

閉じているけれど、広がっている。

大体において、彼女の主人は寝ているか、仕事に打ち込んでいる。

彼の仕事の全貌は、ミスティには分からない。

アナトミアにおいて、何かをしている、という事くらいは分かるのだが、それが一体、どういう役割なのか分からない。

株などで金も稼いでいるらしい。

株などの流れはすぐに把握出来る為、金には困らないそうだ。それで、この浮遊城の維持は割りと楽しい。

時間が、ゆっくりと流れ続ける。

この広い屋敷の中で、生きている人間は主人とミスティだけだ。

ヘッド・レスによって、屋敷の掃除は終わってしまうのだが、料理を作るのは、もっぱら彼女だ。主人の部屋なども、触れていい場所などは、彼女が掃除をする。

勿論、主人の衣服も、ミスティが全て洗濯する。

主人の匂いが残っている。体臭が。それがもうどうしようもなく、愛しい。

ずっと、この幸せが続けばいい。

ここは箱庭。誰にも邪魔されない空間。

幸せの大いなる形。

彼はよく、口癖のように言うのだ。

「ミスティ。好きだよ」

彼は彼女の頬を撫で、指先を優しく髪に絡ませていく。

「私も好きです。ご主人様。……………」

二人は唇を重ね合わせる。

二人だけの楽園。誰にも邪魔されない。……………。

十

ライフは何度も、男に裏切られている。

最初の夫は、彼女に暴力を振るう奴だった。

三年付き合った、いや正確には約四年。

その間にされた事といえば、整形外科に行かなければならない程の顔面損傷だった。

いつも灰皿で頭を殴る。今でも、変形した頭蓋骨のくぼみは治らない。

彼女は夫を愛していたが、夫は彼女を愛してはいなかった。

その癖、愛の無い行為を毎晩、毎晩、強要される。

夫が自分を愛している。そう思い続ける事が救いになると思っていた。

彼はただのサラリーマンだった。

何で、彼女を殴ったのだろう。会社でのストレスなのか、それとも、巧く夫の愛情に応えられなかったからなのか。何処で、コミュニケーションのズレが生まれたのだろう。

何故、他人の感情を逆なでしてしまうのだろう。

そもそも、彼女の母親は彼女を厳しく躾ける人間だった。

今の生き方は、そんな母親に反発した結果と言える。

復讐。

頭の中が真っ赤になる。

もう、どうしようもない程の攻撃性。

それは、受けた傷に強く比例しているのだろう。

傷は、深く、深く、彼女の心の中に刻印されている。

この仕事を選んで、本当に楽になった。……。

支配されていた者から、支配する者への反転。

……まるで、砕け散った自分自身の人格を繋ぎ止めるかのような、自らの否定された人格を修復するかのような行為。リハビリ……。

彼女は自分を慕う男達に、裸の脚を差し出す。

黒い皮の服に包まれた男は、彼女の脚に舌を這わせていく。

今回は脚だけ。脚だけで妄想しろ。屑が。

頭の中で鳴り響く雑音。けれども、強いプロ意識で、決して態度には出さない。

彼女が本当に、行為以上のサディスティックな感情を抱いている事を。

彼女が本当に、心の底から、此処に来る客達の人格も精神も肉体も地位も人生も、何もかもを徹底的に破壊し尽したい事を。顔にも口にも仕草にも、決して出しはしない。

そう、客の要望以上の事は決してしない。……それが、プロとしての立場。

ムチの音が鳴った。

男は歓喜の声を上げる。

此処の男達は、喜んで彼女の排泄物すらも貪り喰らう。

彼女が入ったバスタブの水を、飲料水として与えても歓喜の声を漏らす。洗顔によって化粧品を落とし、バスオイルを大量に注いだ明らかに人体に悪そうな水をだ。

頭の悪い異常者共だ。

こいつらは、美貌で豊満な肉体の女から支配される事を望んでいる。

彼女は、優しく、優しく彼らに接する。

余りにも、憎しみが強過ぎるから。余りにも憎くて、憎くて、優しくする。

それが、彼女の感情の肯定だ。

復讐。男達に対する復讐。

彼女はムチを振るった。

ケロイド状の皮膚の上に、唸る蛇のような物体が飛ぶ。男は歓喜の声を上げた。

携帯が鳴り響く。

マナー・モードにしてあった筈が、迂闊にもメロディーが『ダンジョン』の中に響いていた。バッヘルベルのカノンをロック風にアレンジした曲。

彼女は舌打ちする。

「ワンちゃん、待っていてね。次は放置の時間よ」

彼女は男に優しく言って、携帯を取る。

画面を見る。よく知っている名前。ボタンを押す。

「何？ 今、仕事中なんだけど」

電話の相手の話を聞いて、うんざりする。

「……花鬱が動いている？ それは本当？ 私に応援？ 報酬によるわ。私、ランクインされる

のだけは嫌なのよ。プロの殺し屋を雇ったらどうなのよ。……あなたの命が危ないって。怖い
わよ、私は命惜しいもん。やっと平穏な生活になったってのに……今は動きたくないわ。分かっ
たわよ……いざとなったら、助けに向かうわよ……」

携帯を閉じる。

「ごめんねえ、ワンちゃん。次はサスペンションを使って上げるからあ」

彼女は男の背中に両足を置く。

『セブン・マーチ』のライフ・ウォーカー、それが彼女を現す名前だった。

アナトミアにおいて、密かに処刑人を行っている女。

彼女は裏で、そう言われている。今の電話の主達に。

けれども。

ライフは、今の電話の主達も、物凄く嫌っていた。

生活に入ってくるな、と思う。

やっと手に入れた、安定した生活に。……………。

十

「メビウス様は後から来るらしい」

花鬱はそう言った。

「というよりも、可能ならばあたし達、ハンターに標的を倒して欲しいそうだ」

花鬱はキセルを、また口に咥える。

細長いキセルだ。気に入った骨董品。

浮遊城。

何の原理か知らないが、アナトミアにおいて空中に浮いている小さな大陸。

「どうやって行くかな。飛行船などは撃ち落されるようになっているらしいが」

花鬱は神妙な顔をしていた。

甘名は不機嫌そうだった。

この街自体が気持ち悪いのだと言う。

「情報では、あの浮遊城の主を守る能力者が、二、三名程いると聞く。あんたら、しっかりし
なよ」

着物姿の女は後ろの三名に強く言った。

「誰も死なないのが、理想なのよ。突入したら、それを強く考えな？」

ツイン・スラッシュは嬉しそうに頷いた。

否睡はへらへらと笑っている。

甘名は相変わらず、腕を組んで不機嫌そうな顔をしている。

彼は、少し近付きがたい雰囲気を出している。

「処で、あんたらのうち、どちらかが飛べる能力の持ち主なんだろ？ あたしは先ほどから、そ
れに期待してるんだけど」

否睡は彼女の傍に寄る。

「私だ」

満面の笑み。功名心すら感じ取れる。

にやにやと、口元は歪んでいる。

「もう少し、様子見した方がいいぞ」

黒白の服を纏う、美貌の青年は強く言った。

他の三名はきょとん、とした顔をする。

「確信は無いけれど。何かヤバイ。気を付けた方がいい」

十

マゼンダは沢山の男達に囲まれていた。

今は、髭面の男が彼女を抱いていた。抱く、というよりも押し潰す、といったような感じ。

濁った白ワインのようなものが、体内に吐き出されていく。

彼女の全身は痙攣する。

無感情。

男の眼球は、獣欲を称えていた。

気持ち良いだろ、気持ち良いだろ、と激しく男は叫ぶ。彼女は適当にほぼ反射的に相槌を打っていた。ありとあらゆる、男達の欲情を吸い込んできた人生。

拷問の大洋。

そんな言葉が頭の中で浮かんだ。

全身が深い海原に突き落とされていくかのようだ。感情が深く、深く沈んでいく。それは酷く死の香りがした。

食われる為に生きてきたような人生。

彼女は男達の顔を覚えていない。

全ての男達の顔が、崩れていくかのようだ。どれも同じに見える。視線。吐息。みんな、同じように、彼女を見る。

本能の発露。あるいは、人間性を捨てた、獣性の発露。

やがて、次の男が現れて。同じように彼女を押し潰す。

シーツの上は、体液で汚れていく。

カメラは回り続ける。

カタカタ、カタカタ、と。

撮影の時間は三時間。彼女は重宝されている。人気も高い。

映像の内容は、無修正。それが売り。

男達は彼女の映像によって、彼女の姿形を頭の中に焼き付けて、何度も何度も彼女との行為を妄想し、再生させていく。まるで、何度も流れ続けるミュージックのように。

そう、今はレコーディングの時間なのだ。

彼女の肉体はさながら、管弦楽器。

でたらめな音を、破壊的に奏でられ続ける。

弦が切れようが、そんなものはおかまいなしだ。

心の中はとっくに壊れている。全てが虚構で幻想のように感じる。

最初に彼女を欲望の対象にしたのは、実の父親だった。

彼女は苦しくて、苦しくて、……父親を赦す事にした。

その時から、全てを諦め。そして全てに絶望した。

自分の中の、何か大切な、とても大切な何かを殺してしまったような気分。

その空虚な孔が、どうしても埋まらない。

私は何処にいったのだろうか？

私は一体、誰なのだろうか？

自分がもう、分からない。遠く、遠く、自分が何処かへと行ってしまふ。

レコーディングした音楽は、何度も、何度も、知らない沢山の男達によって再生されていき。

何度も、何度も鑑賞される。視線。視線。視線。顔の無い、視線。

彼女は見知らぬ沢山の男達によって、肉体を食われ続ける。

まるで、死の海溝の中へと深く、深く沈んでいく感覚。

それは決して安らかじゃない。無理やり、溺死させられるような恐怖。

十

ライフとマゼンダは、二人でバーに入っていた。

そこは、静謐なクラシックが流れる。

マスターは無言。

「マゼンダ、仕事どう？」

「どうって……」

「そうね、ごめんね」

片方は、所謂、女王様。

もう片方は、所謂、アダルト・ビデオの女優。

それらの職業を選んで、幸福なのはライフの方だ。

アナトミアには、外からの人間が遊技場として使いに来る。

此処には、性もドラッグもギャンブルも何でもある。

ライフは、自分の財布からお金を引き抜くと、カウンターに置いた。

今日は彼女の奢り。この前も彼女の奢り。その前も。

稼ぎはいい。

……マゼンダは父親の借金を抱えて、この街で働く事になった。彼女の蒸発した母親の方は、逃げたアパートの中で、首を括って腐乱死体で発見されたいらしい。

「ねえ、マゼンダ。この世にはね、沢山のお金がある場所があるの。お金のなる木があって、海

水もお金で出来ている」

ライフは自分でも冗談が下手だなあと思いながらも、何とか彼女を笑わせようとする。
「お金の成る木よりも、果物の方が好きだよ。……今は、お腹が減って。カレーライスが食べたいかなあ」

ライフはマスターに向かって、グリーン・カレーを注文する。

しばらくして、野菜をたっぷりとルーと混ぜたカレーが二人のいるテーブルに置かれる。

レトルトを少し工夫して作り上げたものだが、それでも、十分に美味しい。

この店の料理の美味さは、評判だった。

空間の透明さも好きだ。

ライフはブルー・ハワイのカクテルを口にしながら、陰鬱な顔の美女に言った。

「ねえ、マゼンダ。薬物の仕事だけは絶対に気を付けるのよ。絶対に使わせないように。私の知り合いで廃人になった奴らもう何名も知っているから。それから病気。病気は本当に気を付けて。月に一度くらいは、病院に行った方がいいわよ」

そう言いながら、彼女は向精神薬の錠剤を口にする。

そういえば、今まで付き合った男の一人がヤク中だったなあ、とフラッシュバックを引き起こす。

やはり、過去の事を考えると。暗鬱になる。駄目だ。前を向かなければならない。

「そうだ。マゼンダ、これプレゼント」

そう言って、ライフはバッグの中から一つの花柄の袋を取り出す。

マゼンダはそれを開く。

それは綺麗な十字架だった。鎖が付いている。一緒に、小さな聖書も入っていた。

「本の方は、私、頭悪いから分からないんだけどね。なんか、いいかなって思って」

彼女は何かと、マゼンダの世話を焼きたがる。

何となく、妹が出来た気持ちになるのだろう。

「おそろいよ」

そう言って、彼女は上着を脱いだ。

彼女の背中には、大きな十字架の刺青が彫られている。

そして、十字架の中央にはマリア像の姿。

「客には背中を見せない。大切だから」

彼女は自らの背中を摩る。その後、マゼンダの右手を握り締めた。

マゼンダは両目から、涙が溢れていた。

感情が洪水のように、迸っているのだろう。

何処に、こんなものが眠っていたのだろうと思う。

ライフは青色の甘ったるいカクテルを一気に飲み干す。

そして、ある事に思い至った。……。

……あいつ、花鬱が動いているといったか。……となると、拙い事態が浮き上がってくる。

ライフは目の前の、気弱そうな女を眺める。

今の髪の色は、ブリーチで金髪の上に、ピンクを塗られている。仕事の企画の度に、彼女は髪の色まで変えさせられて、髪がいつも痛んでいる。

親友。

……………彼女は、『ドーン』とかいう得体の知れない組織にも、ランクインされているのだ。そう、何というか、マークされている。

この街では素性を隠して生きてこそいるが、彼女には確かに賞金が付けられていた。

それだけの事を過去にした。

それは消せない事実だ。……。

十

マゼンダはアパートの中に、一体の人形を置いていた。

それは、古物店で買った格安の球体間接人形だった。人形は、赤い着物を着ている少女だ。彼女は毎晩、その少女に口付けをする。

仕事が終わった後、刃物で自らの手首や足首を切り刻む癖が付き始めた。まるで、自分が生きているという事を確認するかの作業のように、肉体に傷を刻印していく。それは、何処までも安らかだった。深い眠りのように。

その後で、すぐに仕事場の監督に怒鳴られた。それでは、商品にならないと。……。

だから、マゼンダはいつもこの少女の手首に傷を付ける。今では、少女の身体はボロボロだ。傷付ければ傷付ける程に愛しくなる。彼女の名前は「アオバ」と言う。アオバはいつも泣いているように見えた。

今日は何だか、心の中が落ち着いている。いつもはざわめき立っているのに。

彼女は大切な親友から貰った、十字架をアオバの首に下げる。可愛い。

部屋には沢山のぬいぐるみが飾ってある。

安物ばかりだが、彼女の心をほんのひと時だけ、満たしてくれる。

現実の苦痛を和らげてくれる。

ああ、体調が今日も悪い。

いつも、避妊薬の飲み過ぎで気分が悪い。

ウチは、最後までちゃんと行っているから人気を集めているんだ、誤魔化す気は無い、と社長は言う。だから、避妊薬をいつもいつも飲む事になる。

薬によっても、肉体を破壊されていく。

仮に、妊娠したって、それはそれでいいのだ。

此処は、アナトミアだ。墮胎児も、生まれたばかりの赤子も。……商売道具になる。

十

ライフは『ハンター』がこの街に徘徊しているという情報を聞いていた。

『ドーン』。主に、能力者による犯罪者を狩る集団。それは実体が無く根っこのように広がっていて、所謂、樹木やピラミッドのような形で、上層部という組織が存在する“ツリー”ではなく、纏まりがなくバラバラな、ムカデの足のような“リゾーム”らしい。中央に何かは存在するのだろうが、全体的に統率は取れていない。

組合と呼ぶ者達も多い。

自分は、ランクインされていない。まだ彼らの標的ではない。しかし、彼女は裏側で、友人達の為に、幾つか自身の能力によって、手を下して来た事があるのも事実だ。

それが、ドーン側に知られたら、すぐに彼女はランキングに入れられて、指名手配犯の一人にされるだろう。

ドーンは警察組織ではない、警察組織はツリーだ。

しかし、ドーンはムカデのようなリゾーム。何がこのドーンというシステムを動かしているのか分からないからこそ、余計に不気味で仕方が無い。

彼女は携帯を開いて、登録してある名前の欄を見ていく。

携帯の画面に、文字が浮き上がる。

二人の名前が眼に止まる。

どちらも頼りになる能力者。……異常者の殺人犯だ。

一人は『制服屋』のシーズンズ・ヒュプノシスという女。こいつからの借りは怖い。

もう一人は。……。

彼女はボタンを押す。

「もしもし。カサネ。今、会える？ 今日じゃないと駄目なのよ」

電話の相手は男の声だ。

以前、付き合っていた彼氏の一人。

一度は、結婚も考えた男。

こいつは、マフィアだ。正直、あんまり付き合いを続けていいのか分からない。しかし、この街、アナトミアは、マフィアによって牛耳られている。外側から入り込んでくる警察組織だってお飾りみたいなものなのだ。

マフィアの連中とは、なるべく適度な距離を保つ。それがこの街で生き残る術だ。

距離を間違えれば、ただただ食べ物にされてしまう。

時間を作る為に、今日は、昼頃に仕事場に向かい、仕事を早めに終わらせて、切り上げてきた。昼に店に来る客は、夜に来る奴よりも遊び人ばかりでろくでもない。……。

カサネと会う事になった。

周りには、ホテル街が並んでいる。彼女は溜め息を吐く。

彼は相変わらず、じゃらじゃらと金色の鎖を腕や首に身に付けている。はだけた胸に、本人では格好いいと思込んでいるブランド物のシャツを身に付けている。

彼は煙草を吹かしながら、ライフを見る。

「いや。一段といい女になったじゃねえか」

「お世辞はいいから。お願いがあるの」

彼は吸い終わった煙草の火を、地面で消す。

「俺はなあ。今、仕事が波に乗っている。ビル建てられる金が溜められそうなんだよ。土地転がしたりしてなあ。お前を抱えて、この街から抜け出す事も考えてるんだぜ」

「お前、もうその詐術はいいから！ どうせ、私の方が稼いでるわよ」

彼はこれ見よがしに、ブランド物の靴を鳴らした。

彼女は鼻で笑う。

「なあ。俺に頼み事ってのは何だ？」

彼女は眼を閉じる。心の中で、怒りの炎のイメージを作り上げる。

「花鬱が動いているらしい。……。もし、私の友達のマゼンダが、彼女の抹殺対象だったら。お願い……。花鬱を殺して欲しい」

強く言った。

彼は顎を摩る。

そして、サングラスの下では、露骨に嫌そうな眼が泳いでいた。

「……………俺、帰っていいかな。そういえば、まだ仕事が残っていたような」

「今晚は、あなたのマンションに行くから」

さり気なく、何処かへと、一人で去ろうとする彼の足は止まった。

……。本当に、情けない。

何で、こいつはずっとこんな奴なのだろうか。

三十分程歩いて、二人は十階建てのマンションに辿り着く。

エレベーターに乗る。

八階にある彼の部屋へと辿り着く。

部屋の中からは、小汚いものが散乱していた。

煙草の灰皿、捨て忘れたゴミ。ゴミは主に、カップ麺の空き容器ばかりだ、何が稼いでいるだ

。

いやそれよりも。

彼女は、幾つも積まれたダンボールに眼をやる。

中身をさり気なく、確認する。

……。ドラッグ。……。……。

「カサネ……。あなた、また危ない物に」

「危なくないって。まだ合法だよ。でも、飛べる。アナトミアに遊びに来るガキ共はこれをクラブで使っている。最高に弾けられるんだよ。夜の共にもな」

「でも。あなたは、使わないんでしょう？」

彼は煙草に火を付けた。

「商品だから、な」

陰気な笑い。

まったく、こいつは何も変わっていない。

部屋の中をまじまじと、見渡した。

彼女は台所に行く。洗い物が溜まっていた。

自然と手が動く。汚れた食器に水を注いでいく。

食器洗いが終わった後、バスルームを見た。やはり、汚い。明日の朝にでも洗おう。

本当に、この男は生活というものがまともに出来ない。

うんざりだ。

ライフは、溢れて散らばった空の容器をゴミ袋に戻して、ゴミ袋をきつく縛った。

「話聞いただけだぞ。相談に乗ってやるだけだ」

「お願い。いざとなったら、頼れるのは、あなたしかいないから」

あなたしか、いない、この言葉に男は弱い。

分かっている、使っている。

二人は電気を消す。

同じ布団に寝た。

少しだけの安息感。そういえば、付き合ってきた男達の中で、彼はまだまだマシな方だったなあ……。

男は自然と手を伸ばす。ライフは横を向く。

死ね、と思った。

コミュニケーションの無い行為。愛の無い行為。そんなものはいらないと思う。

しかし。

何度か、そういうやり取りを繰り返した後。彼女は観念した。

男って嫌いだ。いつも、最後はこればかり。……。

「ちゃんと、避妊してよね」

「あ……分かったよ、仕方ねえな」

カサネは強く、ライフを握り締める。少し、乱暴に。

抱き締める、というよりも、握り締められるという感覚。

彼は愛の言葉を囁かない。

後は、彼の衝動のみが動いていた。

ライフは思うのだ。

愛の無い行為。そんなに気持ちいいの？

仕事先での客達もそうだ。

そんなに愛の無い言葉が好き？

そんなに心を傷付ける言葉が好き？

彼女は客の男達の名前を覚えない。仕事でも、本当の名前では決して呼ばない。男達が、指定してくる卑猥な言葉、蔑みの言葉で、彼らの名を呼ぶ。

彼らの大半は、アナトミアに遊びに来る者達だ。

普通の会社員をしていたり、時には大手企業の重役も来る。

そんなに、懲罰を受けるかのような事を、拷問を受けるかのような事をされて、やり場の無い自己破壊衝動を吐き出したいのか。外の世界も、きっと狂っている。……。

第二章 レゾン・デートル

「花鬱さまっ！ 酷いんですよっ！」

ツイン・スラッシュは、黒衣着物の女に言う。

花鬱は、否睡と相談しながら、浮遊城の周辺を伺っていた。

甘名の言う通り、確かに、何かがヤバイ……。飛んで中へと侵入するという行動には移せる。だが、問題は果たして辿り着けるのか……？

ツインの顔には、大きな星型の痣が出来ていた。

それから、唇が少し腫れている。

「あの子から、DVされました。ちょっと、話し掛けただけなのに」

甘名は腹立たしくなって、ツインの頬に平手打ちを叩き込んだ後、軽く口元を殴ったのだった。

「あのさ。ツイン・スラッシュ、この際、はっきり言う。オレはお前が生理的に嫌いだから、オレの半径5メートル以内に近寄らないで欲しい。一緒に息を吸うのも嫌なんだけど」

花鬱はそんな彼らのやり取りに興味を示さず、街の地図を見ながら悩んでいるみたいだった。

「あああー、何、言われたんだよお？」

否睡は楽しげに聞く。

「セクシャルハラスメント」

白皙の美貌の男は、憎憎しげに黒髪のを睨み付けていた。

「わたしはですねえー。あの子に、どんな女の子がタイプで。どんな女の子で抜……」

ツインは、もう一度、同じ場所に平手打ちを食らう。

勢いよく音が鳴り響いた。

いつの間にか、距離を詰めて、長い金色の髪をした青年は、彼女の頬を打ったのだった。

ツインは今度は、勢いよく転倒する。

「なあ、花鬱さん。否睡。こいつ、殺していいのかな？ 今、オレが一番、こいつを始末したいんだけど」

花鬱は、やはり興味を示さずに言った。

「リスクはなるべく減らしたい。あたし達の生き残る確率を高めたい」

彼女は天空を仰ぎ見る。

「あの浮遊城、何か違和感があるのよねえ。あたしも思っていたんだけど」

「昼にまた、あそこを見てみた方がいい、否睡」

甘名も、花鬱と一緒に分析していた。

ゴシック・パンクの少女は呼ばれて振り返る。

「昼に、お前が飛んで近付いてくれないか？ ヤバそうだったら、すぐに戻れ」

「昼まで待つのかよ。夜明け前じゃ駄目かな」

「確かに。じゃあ、夜明け頃に向かってくれないかな」

ライフは剥き出しの背中を夜闇に晒す。

背中中の十字架が露になる。

満月の光を吸って、それは煌々と輝いていた。

何件も何件も、彫師を探して、綿密に、納得が行くまで丁寧に決めた十字架。

部屋の中では、カサネが眠っている。

仕事で疲れていたのか、彼の欲望は長くは続かなかった。

彼の部屋に来たのは、十二時を過ぎた頃だったか。

時計を見ると、まだ夜中の三時過ぎ。彼の部屋は落ち着かないから、眠れないのだ。

いや、それよりも。

もし、花鬱が動いているとすれば、早めに他にも、手を打っておいた方がいい。

カサネはカサネで、あの体たらくだ。

……いざとなったら、私が花鬱を倒さないといけないの？

彼女は一瞬、脚が竦む。

しかし、それにしてもだ。

このビルから見える夜景はとても綺麗だ。

アナトミアは眠らない街だ。一面が煌々と輝いている。

そして、その中の一角に、空高く舞い上がっている得体の知れない大陸が浮かんでいた。

あそこに人が住んでいるのだろうか。

アナトミアで暮らしている者、アナトミアを訪れる者なら、誰もがそう思う。

あれが、何なのか、と。

アナトミアには、幾つかのマフィアン・コミュニティが存在する。それぞれが、それぞれの縄張り争いで必死だ。そして、あの浮遊城を管理している主も、マフィアのボスの一人らしい。それくらいしか、耳に入ってこない。

……くだらない男同士の争い事に乱入するかのような女。

それが、花鬱。

支配する女。男を支配する女。彼女はこの街の秩序を、暴力によって守っている。

しかし、守りきれていないという実状もあるのだろう。

欲と搾取の街は終わらない。

でも、あの浮遊大陸を見ていると、こう思う者もいるのだ。

退廃したソドムとゴモラの街を監視している、神の住まう天界のようだ、と。

いつか、アナトミアは聖書のように、硫黄の渦で焼き尽くされる。

……………。

……それだけ、この街はもうどうしようもない程に、醜いのだろう。

彼女は眼を閉じる。恐怖に震える自分を諫める。

そして、もう一つの頼りの番号。

『制服屋』の番号。

それを押す。

「もしもし、以前、名刺交換した。『アーテリー』のライフよ。四季さん、お願い、今から向かっていいかしら？」

十

シーズンズは鏡を見ながら、恍惚の表情を浮かべていた。

深い青色の髪をした女が、鏡には映っている。自らを食べてしまいたい。……。自分自身が、まるで、皿に載ったショート・ケーキのように見える。とても美味しそう。

今、お気に入りの学校の制服を身に付けている。彼女がずっと着たかった服。それが、今日、手に入ったのだ。

舌なめずり。涎が床に垂れる。

彼女は自らの腹から下を愛撫する。

彼女は声を上げ続けた。隣にはテープ・レコーダー。自分の声も大好きだ。

自分の声が、とてもエロティックで。それがとても愛らしい。

自らの肉体が開放されていくかのような感覚。

ほぼ、トランスに近い状態になっている。

彼女はよく友人達から、男の倒錯者も引くんじゃないかと冗談を言われる。

部屋中には、自分の写真が大量に貼られていた。軽く数百枚はあるだろう。

彼女の息遣いは激しくなる。

精神が、解放されていくかのようなようだった。

たっぷり、二時間以上も掛けて、彼女は行為を楽しんだ。

シーズンズは自分が好きで好きで溜まらない。

気に入った男女も、自分と近い顔立ちの者達ばかりになる。そういった男女達と、いつも付き合ってきた。本音を言えば、彼らの顔の皮膚を削いで、ホルマリンに漬けたい。

そして、それらをいつまでもいつまでも、愛でていたい。

……………。

シーズンズは所謂、『制服屋』というものを営んでいた。

下着を売りにくる女性も多い。稀に美貌の男性の下着も売れる。

彼女は思う。

一般論では、女は搾取される側なのだろうか。……？

彼女は女だが、搾取する側。

男からも搾取するし、女からも搾取する。両性具有体の者からも。

みんな変態。人間はみんな異常者だ。

だから、境目なんて存在しない。正常だというのは虚構なんだ。

彼女には、自身のナルシズムに、何の美学もなかった。

そこには、何の哲学もなかった。

ただ、倒錯的な欲望を満たす行為だけがあった。……………。

彼女の部屋にはコレクションが並んでいる。

……………。

それは、剥製だったり、ホルマリンに漬けられていたりする。

腕。脚。眼球。舌。耳。胸。指。

……………。

全てが愛しい。全部、全部、私自身。……………。

私の一部になるべき存在。

彼女は怪物だった。他人という存在を解体対象としてしか見ていなかった。全てはどいつもこいつも、記号のようなものなのだと。

ドーンによって、ランキングされているシリアル・キラーのシーズンズ・ヒュプノシスは、店を隠れ蓑にして表世界から身を隠し、ひっそりと、自らの人体に似た部分を持つ男女のパーツを集めていた。

……………。

夜中の三時過ぎ。携帯電話が鳴る。

手に取って見る、見知らぬ番号。

彼女は電話に出た。……………。

十

繁華街から少し離れた場所にある店。

『制服屋』。所謂、そのままの意味だ。

様々な、コスチューム・プレイ用の道具が置かれ、他にも、女性達が顔写真付きで自らの身に付けた物などを売りに来る。それを高値で売り捌く。

それだけでも、悪趣味な店なのだが、この制服屋には裏の顔もある。

これは、嫌でも情報が入ってくる。

いわく、制服屋はアトミア内の『情報』も売っている。

いわく、制服屋は異常快樂殺人犯で、能力者で、殺し屋も兼ねている、と。

そして、裏の顔での仕事は、夜に電話を掛ければ承ってくれると。

制服屋の明かりが、煌々と点いている。

しばらく、待っていると。

青い髪の女が現れた。

彼女の眼は、とろんとしていた。どこか陶酔しているようにも見える。

ドラッグをキメているのか、それともこいつの場合は脳内麻薬がつねに出続けているのか。ライフは少し、嫌悪感を催しながら、その女を見ていた。

化粧っ気が無い。それなのに、自らを売る事も出来るくらいの上玉だ。

彼女はうっとりとした顔で言う。

「夜、遅く。私に何の用？ 何を買いに来たの？」

「え、えと……」

「ねーえ、そうそう、この制服、可愛いでしょ？ やっと手に入ったんだよ、ちょっと遠い場所にある学園のものだから。オークションで頑張って落札してえ」

反応に困った。

というか。

ああ、何かもう色々と駄目だ、こいつ。……………。

ライフは此処に来た事を激しく後悔した。

店の主人である、シーズンズ・ヒュプノシスは幼女のように嬌声を上げている。

美人なのだろうが、いい年して、十代が義務教育で身に付ける服を纏って、恥ずかしげもなく、本気で喜んでいる女。

ライフは店内を見回して、この女、本当に気持ち悪いなと思った。

こういう人間は、どういう生育履歴と人格構造をしているのだろう。理解不可能な倒錯性は分析せずにいられない。癖になっている。

「何か、私に聞きたい事があるとか？」

生きていて、恥ずかしくないんですか？ と思わず、本音を言いそうになったが。頑張って、それを飲み込む。

「……………え、えと、花鬱が動き回っているらしくて……………」

「二十万」

彼女は指を二本立てる。

「それが、情報代。どうかしら？」

「いいけど、……………私がすでに知っている情報はいらないわ。それに、シーズンズさん、あなたって、本当に情報屋なんですか？」

「アナトミア内の情報は掻き集められるだけ、掻き集めているわ」

青色の髪の女は、にやにやと笑う。

ひょっとして。……それが、彼女の能力なのか？

いや、ならばもう一つ、気になる。

「……………お訊ねして、間違っていたら失礼します。シーズンズさん、あなたって、殺しの依頼も引き受けるって、お耳にしているのですが……………」

「するよ」

無邪気な、そして不気味な笑顔。

「誰だって、依頼されれば殺す。相場は標的次第だねえ」

「相場って。じゃあ、たとえば、此処の近くのアパートありますよね。そこの住民の誰か一人殺すとすれば、幾らくらい？」

「人によるけれど、大体、五十万。高くても、百三十万から百五十万くらいで手を打つ。私は良心的でしょう？」

にやにやと下卑た笑い。

料金を示すのは口実。その方が、体裁がいいからで。こいつは、単に人殺しが好きなだけで、殺しも出来て、金も稼げれば重畳ものなんだろうなあと感じた。

この街で仕事をしている人間ならば、誰でも知っている名前を出す。

「じゃあ、花鬱、殺してくれませんか？」

「……………、五億でどうかしら？」

彼女はウィンクする。

明らかに、ライフの貯金を突出して超えていた。

絶対に払えないのが、分かっていると言っている。

試しに、他にいるマフィアのボスの相場も聞いてみた。すると、良心的な値段が返ってくる。

臆病で、下衆。どうしようもない女。

本当に、こんな奴が嫌いだ。赦せないとさえ思う。

ああ、それにしても。

やはり、時間の無駄だった。

大体、この女、本気で気持ち悪い。

仮にこの世界に造物主がいたとするのならば、この女のような存在を創って、さぞ後悔している処だろう。この女のような人間は、一体、何の為に生きているのだろうか。こいつは、明らかに、この世界にとって害にしかならない。反吐が出る。

間違っ生まれてきたのね、きっと。

ライフは携帯を見て、もう時間が五時を過ぎている事に気付いて溜め息を吐いた。

日が昇り始めている。

結局、カサネのマンションには戻らず、自分のアパートへと帰った。

大きめのピルケースの中に大量に入っている、向精神薬を取り出して、口に入れる。

そして、水無しで、掻き込むように薬の錠剤を次々と口に入れていく。

花鬱のせいだ。

あのシーズンズとかいう女のせいだ。ああいう女の癖に、女を食べ物にする奴の思考って一体、何なのだろう？ ああ、分かっている。……中学校、高校の時の同級生。一人か二人いた、みんなのまとめ役みたいな女。男癖が悪く、強い圧力で気の弱い他の女達を支配していた女。居場所が無い空間。仕方なく、夜の街にでも放浪せざるを得なくなったストレス。シーズンズは毛色こそ全然違うけど、あいつらときっと同類だ。優越感を保ちたいのか？ 同性相手に、歪んだ優越感を。

ふいに、結論に至った。ただの直感なのだが。

分かった、シーズンズは嫉妬しているのだ。

この街で生きない外の人間達に。普通のOLや主婦に。女子学生に。ああいう商売を営んで、買われた制服や下着が、どのように男達に使われるかを知り尽くしておいて。その優越感に浸っている。

そんな事実を知れば知る程。人間の欲とは何なのかについて、思考の袋小路に陥ってしまう。

ああ。

マゼンダに早く会いたい。

マゼンダは、彼女の天使だ。

汚されれば汚される程、その輝きが余りにも美しくなっていく。……。

破壊して、破壊し尽くして、壊れれば、壊れる程に愛しくなる。

サディズム的な愛。

倒錯的な愛。

……………。

ライフは、はっと、なる。

自分は彼女の境遇に対して、密かな愉悅に浸っているんじゃないか、と。

男達が、彼女を凌辱して楽しむように。

ライフもまた、男達同様、彼女を見て楽しんでいる。……。

最低だ。どうしようもないくらいに。

十

ぐいーん、ぐいーん、とDVDが回転している。

ノイズ掛かったTV。ゲーム機の上には埃が溜まっている。

いつからだろう。マトモに掃除をする事が出来なくなったのは。携帯を解約する前、いや、それ以前からだ。誰もマンションの部屋の中に入れなくなった時から。

ツイン・スラッシュは、液晶画面を見続けていた。

パソコンもつねに電源をオンにして、休止モードにしている。

けれども、今持っているパソコンでは、DVDを観れないので、もっぱらTVばかりを点けている。裏ショップで買った、沢山のDVD。

今、お気に入りなのは、貧困国の酷い映像。

ある種のスナッフ・フィルムとして、ツインはそれを鑑賞している。

死体写真。強制収容所での囚人達の写真。

全部、食欲をそそる。

空虚な時間の中に、強い安息感を与えてくれる。

鑑賞している眼球は、とても空ろ。

堪能している感情は、とても歪だ。

ガリガリに痩せた沢山の子供達。彼らの顔に虫達が飛び回っている。子供達は痩せ衰えて、虫を払う力も無い。虫達は彼らの顔に卵を産み付ける。彼らの顔は膿んでいき、失明などを余儀なくされる。

それを観ながら、ぺきい、ぺきい、と買って来た菓子を食べるのが趣味だ。

彼らが決して口に出来ない、肉や野菜の詰まった弁当を、コンビニで買ってきて、味もよく分からず食べ続ける。味などよく分からない癖に、美味しいと思ったりする。

他人の不幸は最高のエンター・テイメントだ。

これ以上の娯楽って無いんじゃないのだろうか。

こいつらよりも、私は幸福。こいつらは可哀相な憐れむべき存在、こいつらが存在している事を確認する事によって、現在の幸福を確かめる。

唐菓子を噛み砕く音が、部屋の中に響く。

映像は進んでいき、痩せ細った青年達が、配給される食べ物を奪い合っている。

彼らは米粒やパン屑、野菜屑の一欠片ですら、とても美味しそうに口にしていた。

ツインは、味もよく分からない、巧いのか不味いのかよく分からない塩分をたっぷりと含んだ、コンビニの唐揚げを口の中に放り込む。そして、コーラでそれを咀嚼する。

明らかに高カロリーの食事。

絶無のような空虚が、狭い室内には満たされていた。

だが、どんな奴も。あるいは、何処の家庭もこんなもんなんだろ。

家族と団欒しながら、時折、TVで流されるこのような映像を見て、みんな悲しそうに、しみみりとしながら、夕食をありがたがって口にする。

そう。そんな奴らの言葉を考える度に、怨嗟ばかりがこみ上げてきた。

彼らはとても、可哀相な人達。だから、私達は彼らのような人達がいる事を沢山、沢山、嘆いて、今ある幸福にとっても感謝しましょう。

そうやって、親は嫌いな夕飯の具を残す子供達を躱けるのだ。

つまり、彼らは教育の道具。

豊かな国が、豊かな国として維持し続ける為の教育の道具。

.....そんなに可哀相なら、この国を同じ貧困国にしろよ。可哀相なんだろ？ 変わって上げたいくらいに、可哀相なんだろ？ なら、お前らも餓死すればいいじゃねえかよ。

嘲笑が漏れる。

みんな奢り高ぶりたいんだろ。と考えながら、気付いた。

.....国が国として、維持する為に必要な道具。

弱い者の存在が、国を国として存続させる。社会を社会として維持させる。

アナトミアがそうだ。

この街では、弱い奴から食べ物にされていく。

借金を作らされて、病気を移されて、惨めに死んでいった知り合いは何名もいる。

そういう者達を思い出す度に、虚無が大きく深まっていく。

.....人間という可能性の限界。

もし仮に、人間という生物種の行動を塗り替える存在がいるならば.....。

そこで、思考が止まる。

.....そして、結論を下すのだ。

どうでも、いいな、と思った。そう、結論付ける。

彼女は残った唐菓子を口にする。少しだけ、味がした。

花鬱の存在。

ツインは花鬱に出会って、ほんの少しだけ、生きている、といえる刻限を与えられたような気がする。

十

明け方頃だろうか、少しずつ日の光が差し込んできている。

否睡は『スキゾ・フレニア』を発動させる。

彼女の身体の一部にあるドラゴンのタトゥーが剥がされていき、それが怪物の姿へと変わっていく。それは、三つの首を持った、ぐしゃぐしゃに身体中が崩れ落ちて、所々、骨が剥き出しになった、ドラゴンのゾンビだった。

「目立つねえ。……」

花鬱が愚痴った。

「仕方ないだろ」

ドラゴンは翼を広げる。

彼女は、ドラゴンにまたがり、浮遊城へと向かった。

他の三名は、下の辺りで待機する。

ドラゴンは翼を広げて、上昇していった。

浮遊城へと近付いていく。

すると、突然。全身が少しずつ重くなっていく。

ドラゴンの翼の羽ばたきが遅くなっている。

翼が徐々に動かなくなっていく。否睡は冷や汗をかき始める。

もう飛べない。

巨大な重圧となって、浮遊城へ近付けば近づく程、全身が押し潰されそう。

全身が、砕け散りそうだった。

そのまま、否睡は落下していく。

そして、地面に激突する。

彼女の肉体は激しく損傷していた。

「大丈夫か？」

甘名は涼しい顔で、彼女に問う。

「ああ。脳に損傷は無い。だけど、お前が言った通りだったな。全員で行かなくてよかったって処だ」

彼女はよろよろと立ち上がろうとする。

骨などが、部分部分で露出していたが、それが少しずつ治癒していく。

花鬱とツイン・スラッシュは彼女のそんな姿を見て、唸っていた。

「本当に不死身なのね」

花鬱が言った。

「いや。そうでもない。……脳を潰されるとヤバイ。しかし、花鬱さん、一緒に行かなくてよか

ったな。甘名に感謝しろよ」

彼女は頷いた。

そして、キセルに火を付ける。

「一体、あれは何なんだろうねえ」

花鬱は首を傾げた。

「重力波なんじゃないかな？」

甘名は言った。

他のメンバーは頭を抱える。

どうやっても、侵入者が入れないような仕組みになっている。

浮遊城があのような構造になっているのは、街の誰も知らない事実だった。

そもそも、浮遊城が何なのか。誰も分からないのだが。

誰もが、ただの一風景として認識している。

「浮遊城に侵入する手段は、もう一つある。一週間か、二週間に一度くらいの割合で、浮遊城を
行き来しているヘリが下りてくる。それを襲って、乗車すればいい。その手段を取ろう」

「マジかよ。まだ、アナトミアにいるのかよ」

否睡はげんなりとしたような顔をした。

「そう捨てたものじゃないぞ、この街も」

花鬱は言った。

ツインはとてども、楽しそうに笑った。身体を踊るように、回転させる。

「じゃあ、ひーちゃん、私と一緒に遊ぼう！」

ツインは嬌声を上げる。

甘名は溜め息を吐いた。

「一人になれる場所は無いか。花鬱」

彼は相変わらず、腕を組んで、三名を睨んでいた。

「そうね。カプセルホテルとかあったかしら」

「痛い出費だ」

そう言いながら、彼は三名の下から去っていく。

「出来れば、なるべく一緒にいたいんだけどねえ」

花鬱は言う。

「止めてくれ。携帯あるだろう。近くにいるから、出撃の時は連絡して欲しい。オレは一人で
いる」

そう言った。

花鬱は困ったような顔をする。

「そうかい、みんなと一緒にいるのは嫌かい？」

「ああ。本当にストレスが溜まる。飲む薬の量が増えるから、勘弁してくれないかな？」

ツインも何か言おうとしたが、否睡に小突かれた。

心の底から嫌われている。

いい加減、鈍感なツインもようやく、それを理解したみたいだった。

「じゃあ、三人一緒にいましょうよー」

「……うーん、あたしは他の仕事もしなくちゃならない。あんたら、手伝ってくれる？ ああ、でも、パチンコ屋の不正客の説教とかだから、いても困るしねえ」

彼女は小さく溜め息を吐いた。

「出撃までは、自由行動。ただし、この辺りにいて欲しい。ヘリが下りてきたら、すぐにみんな駆け付けるようにね。ヘリの着陸時間は大体、数十分くらいらしい。充分、携帯電話の連絡で間に合う」

十

「ねえ、花鬱さまって、何でこんな事してるんですか？」

ツイン・スラッシュは、臨時的にスナックの仕事をしている花鬱に訊ねた。

今日はいつものドギツイ色と模様をした着物姿ではなく、落ち着いた紺色のスーツにベージュのインナーを身に付けている。

「こんな事って。どの事よ」

今は客がない。

後、数十分ほどすると店を開けるのだが、その前にツインが遊びに来ていた。

花鬱は丁寧に、酒瓶の数と種類を確認したり、店内の掃き掃除をしていた。

ツインはこの頃、シフト制の仕事をしていた為、仕事先に向かう前に頻りに花鬱に会っていた。

。

「そうですね……………色々、ですかね。何で、こんな人生を選んだのか、とか」

時間はまだ一時間弱ある。

最近のツインの興味は、もっぱら彼女の事だ。

花鬱は少し困った顔をした。

「それは困るわね。すぐに言葉に出来ないわ」

「じゃあ、何で、今の立場にいるんですか？」

彼女は少し寂しそうに言った。

「単純に私が強過ぎるから。私よりも暴力を振るえる力を持つ奴が、アナトミアにはいないから。だろうね」

彼女はほうじ茶の袋を取り出して、湯を沸かし、ツインの前に湯のみを置いた。

「そういえば、この前、作ってくれた寿司美味しかったっすよ」

「一応、板前の免許もあるから」

ツインは湯飲みに口を付ける。美味しい。

「すげえーじゃないですか。何でも出来るじゃないですか！」

「今の私って、定職にも付かずに、ぶらぶら歩いている遊び人だぞ？」

ツインは苦笑する。その癖、みんなから色々な仕事の依頼を受けて、毎日、忙しそうだ。

ツインは考えた、彼女のやっている事とは何なのだろうか。

傍から見ると、何でも屋。そして、怖れられる理由は、ひとえに、その強さ故によく用心棒の依頼を受けているのと。ドーンとかいう謎の組織に登録して犯罪者を狩っている事。それから、アナトミアで生きていると頻りに耳に入ってくる、彼女の数々の伝説だった。

何でも、数年前に、街のマフィア組織の一つに殴り込みにいったとか。

しかも、何百名と構成員のいるマフィア組織が、花鬱一人にまるで勝負になっていなかったのだと。

何故、殴り込みにいったのか本人に聞いた処、未成年へのドラッグ流布が余りにも酷かったかららしい。

更に、花鬱をキレさせたのは、その組織がカモにした者の一人で、金を払えない者への見せしめも含めて、一人の少年の四肢を切り落としたからだった。

その少年は、今でも病院で生きている。彼女はたまに、彼の見舞いにも行くらしい。

「あの事件、やばかったっすよ。花鬱さま、幹部のうち四人の手足を、それぞれ落とし前として、切り落としたらしいじゃないですか。お前は、右腕、お前は左腕、お前は右足、お前は左足、あの少年の為に差し出せ、ってね」

「ああ、あれは……やり過ぎた。……反省してる」

彼女は溜め息を吐いた。

「あれは、キレてしまった。あの後、友人達に報復がいかないか、しばらくの間、ずっと悩まされた。あの組織は今でも警戒している」

「いや、でも格好よいですよ！」

「ツイン……」

花鬱は呆れた声を出す。

「暴力でしか問題を解決出来ない、私に憧れるのは、どうなのかなあって。暴力に対して暴力を行使して、その結果、残ったものって。終わらない怨恨の連鎖だったからねえ」

彼女はお茶を啜る。

「しかし、私みたいなのがきっと街には必要なのかな。どうやら秩序としての役割、均衡としての役割を果たしている、っていうか。巧く言えないけど」

その言葉に、どう答えればいいのか分からなかった。

十

ライフは数時間ほどして、目を覚ます。

時計を見ると、もうすぐ十一時に差し掛かっていた。四時間ほどしか眠れていない。

彼女は携帯電話の番号を押す。

「マゼンダ、元気？」

電話相手は嬉しそうな声をする。

今日、一日、使って戦略を練り上げるしかない。

花鬱を倒す。このアナトミアを牛耳るボスの一人を。
考えるのは簡単だ。……実行に移せるのだろうか。
それにしても、昨日会った二人、本当にろくでなしばかりだ。
彼らはあくまで保険として考えておこう。
彼女一人でマゼンダを守るしかない。それは、もはや使命感へと変わりつつあった。
鏡を見る。
程よくブラウンに染めて、程よく切り揃えた髪の女が映っている。
何だか、自分自身の顔ですら、見慣れない。
あんまり、自分が好きじゃないからなのだろうか。
それにしても、一段と、荒んだ顔になったな、と思う。
年齢故なのか、それとも経験故なのか。
彼女は小さなタンスを開く。
今まで、バーなどで貰った、沢山の名刺。
その中から、目当てのものを探し出す。
電話番号が書かれていた。
カサネの上司。アナトミアで稼いでいるマフィアの一人。

十

ちょうど昼飯時なので、高級中華店での待ち合わせとなった。
その男は明らかに市民社会で生きている人間じゃない。
灰色のスーツ。はだけたワインレッドのシャツ。
撫で付けた髪。
カサネのように、みっともなく付けたサングラス。
一体、こういう男達は、何でこんな虚勢の張り方しか出来ないのだろうか。憐れだ。
「花鬱、倒したいんです……」
男はぎこちなく右腕を動かしながら、ブランド物の時計を眺めていた。
「正気かよ？ お前。なあ、姉さん。冗談は他で言ってくれないかな」
「ルーザーさん」
ライフは強く言う。
そして、彼の右腕を眺める。義手だ。
「憎いですよね？ 花鬱が。ケジメとか言って、あなたの右腕を肘から切り落として」
「黙れよ……」
男は凄んで見せた。
「お前、風俗街の女だろ？ 俺達のような組織の人間を舐めるとどうなるか分かっているのか？」
「分かっているのは、あなたですよ。私、アナトミアにいる数少ない能力者の一人である、『

セブン・マーチ』です。聞き覚えは？」

サングラスの奥にある、男の眼がたじろいだ。

こういう男の虚勢ってのは、本当に恥ずかしい。

「嘘付くなよ」

男の心臓は突然、鳴り響く。

全身から、冷や汗が流れ始めた。

どンドン、息をするのも辛くなっていく。

明らかに、身体がおかしい。今、一体、何をされている……？

どくん、と激しく心臓が鳴った。

「花鬱ってのは、トカレフを撃ち込んでも無傷でいる奴なんだぞ？」

「暗殺」

それだけ言った。

「私の能力じゃ、花鬱は無理です。だから、昨日、カサネと制服屋に会いました。いざとなったら、彼らにも強力して貰う。どうでしょう？ 出来れば、あなた達の組織も協力してくれませんか？ アナトミアを仕切っているマフィアン・コミュニティの中で、花鬱に対する恨みが強いのは、私はあなた達の組織しか知りません」

男は鳴り響く心臓を抑えていた。

男は組織の幹部だった。女に完全にやり込められている、面目が丸潰れだった。

強い心臓の動悸は鳴り止まない。それどころか、一層、強くなっていく。

「き、聞いていいか？」

「なんですか」

「い、今、一体、何をしてるんだ？ お、俺に……」

声がしどろもどろになる。舌がもつれて、巧く喋れない。

「……なんでしょうね。私がこれまでの人生の中で受けてきた、恐怖を分けて上げているというか。もっと昔から発現していたら、違った人生を歩んでいたのかも。でも、散々、辛い目にあったから、この能力を天から授けられたのかもしれないね」

彼女はコップの水を飲み干す。

「セブン・マーチ……。七つの行進。これ、どういう意味か分かります？」

「し、知らん」

男の胸の鼓動は一層激しくなる。眩暈に襲われる。空間全体がもやもや、とじてくる。

「一週間、って意味です。死への階段は一週間。本当は、その途中で死んじゃう人も多いんですけど。生きている事がストレスになるんです。とにかく。相手が同じ能力者でも無い限り、大抵の人、折れますよ。これ受けて。その方が、どんな生き方をしてきても、恐怖に勝てなくなる」

彼女は極めて、淡々と言う。平静そのものだ。

「正直に言いますね。私、あなた怖かったです。あなたのバックにいる組織も。それでも勇気を振り絞って、会いました。……今、私はとても落ち着いています。何故だか分かりますか？ ……私の中にある恐怖を、全部、あなたにプレゼントしているからです」

虐げられるだけの被害者でしか無かった自分。

その苦痛を、虐げてきた者達に味わって欲しい。

その強い願いから発現した能力。

弱者と強者の位置を、一転してひっくり返してしまう力。

彼女の信念と願望の中から、生まれた力。

男は思わず、服の中に仕舞いこんだ拳銃を握り締めていた。

ライフはそれに気付く。

男はさらに、朦朧としていく。

自分自身が撃たれるのではないかという恐怖。

「こ、これえ、か、花鬱に使えるばいいじゃねえ、かあ……」

男は口から泡を吹いていた。

「無理です。近付かないといけない。殺されます。だから、戦略を練らないと」

「な、何故、花鬱を殺したい？」

「私も恨みがあるじゃ駄目ですか？」

脳の奥底までに響くような、情念。

「やるんですか？ やらないんですか？」

「い、今は、む、無理だあ。ボ、ボスさええ、あ、ああ、ああ、あいつを怖がって、いいいいい、いる……」

「そうですか」

一瞬、男の頭の中が真っ白になる。

気付くと、目の前には事前に注文していたチャーハンと餃子、中華そばが置かれていた。

先ほどまで感じていた不整脈やら眩暈やらは、何処かへと消えていた。

代わりに、とてつもなく強い疲労感が残っている。

ライフは目の前に、何枚かの写真を翳していた。

それは、男の恐怖と苦痛に歪んだ表情だった。

「ポラロイドで取りました。まだありますよ。焼き増しされたいですか？」

「お、俺を脅迫しようってのか？」

「どうでもいいです。いざとなったら、駆け付けて下さい。あなたのボスにも伝えておいて」

十

心臓の鼓動が胸を打っている。

ああ、駄目だ。

ルーザー……あの男は、ライフに暴力を振るった男の一人に似ていた。

だから、使わざるを得なかった。……。

缶ジュースを口に入れて、一気に飲み干す。

普段の仕事の模範なのか、いい役者になれたかな、と思った。自分でも、言葉が驚くように溢

れていた。

ルーザーが自分を恐怖してくれればいい。復讐される危険性も高いが、それでもやるだけの意味はある。

それが、覚悟を持って戦うという事。

しかし、不思議と花鬱に対しての恐怖は無い。

何故だろう。

それを考えて、思い至った。

死はきっと、怖くない。

けれども、怖いのは、男性に蹂躪されて殺される事。自分自身の恐怖を抉られ続ける事。

それだけは、避けなければならない。

花鬱は基本的に、一人だ。

組織を持っていない。

けれども、彼女単体で一個の組織一つの武力を有していると考えていい。

取り巻きが何名かいるらしいが、その戦力は不明だ。

彼女の事に関して、調べられるだけ、調べなければならない。

癪だが、シーズンズも頼らなければならなくなるだろう。

他の情報屋などもあたる必要がある。

自分の貯金の残高はどのくらいだったっけ。

思わず、頭を握り締める。

もし、下手を打てば、骨の髄まで搾取されるかもしれない。

けれども、今、やっている事は全て無意味なんじゃないか、と。

マゼンダを守る事。

それを本当に願う事が何を意味するのか。

.....

彼女をこの泥の中、地獄の中から救い出す事。

頭の中にあるものは、巨大な満月だ。暗闇の中に咲くような大きな、一番、整った形の満月。丸い円。

ライフは月がとても好きだ。

暗闇の中に咲く花のようで。

そう、此処は地獄。地獄の亡者ばかりが蠢いている。マトモな人間なんて一人もいない、自分自身だってそうだ。過去の亡霊に蝕まれ続け、何度も何度も、トラウマを反復させ続けて、堂々巡りの思考を続け、男のマゾヒスティックな喜びを提供する商品として、存在している。.....

大体、マゼンダを守るって何なんだ？ 彼女を救い出して、彼女の心の傷が癒える事なんてあるのだろうか？ 自分自身でさえもまるで救えない癖に。

此処には邪悪な性欲と、暴力と、搾取しかない。

みんな、醜悪な餓鬼なんだ。

そんな泥の中にあってもなお。

なお。

マゼンダは醜くない。

そう信じ続ける事によって、ライフは救われている。

そうだ。思い付いた。

花、空、星、虹、……………。

今度、それらの写真が載っている本を買って、彼女の下へと持っていこう。

押し付けがましい愛情。分かっている。

年齢的には、妹の方が近い。

……彼女に投影しているもの。

それは、産みたかった、自分の我が子だった。……………。

……涙が流れ出す。

二人目の男。彼との付き合いの時に、妊娠した。

夫では無い、彼氏。

最終的に追い詰めて、暴力を振るわれて、流産した子供。……………。

十八だったっけ。いや、十九だったか。

育てられない、と言われた。相手は一つか二つ、年下だった。

私だけで育てる、と言った。殴られた。

本当の自分を出すと、いつも相手を追い詰めてしまう。

私は、どうすればいいのだろうか？ ライフは悩む。頭を抱える。

まともな生き方をすればいいのだろうか。でも、まともな生き方ってのは何なんだ。

まともに生きている奴が、この街に遊びに来て、日頃の鬱憤を晴らしていく。

十

「ライフさん、動いてくれるかなあ」

フォールスは不安そうに言った。

ズンヴィーは慰めるように、彼女の髪の毛を撫でる。

「さあね。でも、花鬱。間違いなく、俺達を狙っているのは確かだね」

二人は抱き締めあった。

「あいつの雰囲気。マフィアを潰した時と同じだ。俺達は、ドーンの賞金首だ。狙われているのは確か」

ズンヴィー。

彼女は、かりかり、と自分の爪を噛んだ。

二人は、危険察知能力が強い。

そうやって、これまで危険を回避してきたから。

「ねえ、ズンヴィー。あなたの『ネック、ネック、ネック』で、花鬱、倒せないかなあ？」

フォールスは、ズンヴィーの唇と、唇のピアスを撫でる。

「考えているんだけど。花鬱の攻撃に耐えられるかどうか……」

彼女は俯いた。

二人は地下武器屋へと向かっていた。

そこは会員制だ。会員でなければ、入れない。

ビルとビルの間の中にあり、一度、ビルの中を入らないと、地下へは迎えない構造だった。偽装しているビルは、株式会社の体裁を保っている。

二人はそこで、係員に申し付けて、地下武器屋のカード・キーを渡される。

そこで、エレベーターで地下三階へと向かい、地下三階の使っていない倉庫らしき場所に、カード・キーを差し込む。

中は、多少の広さがあった。

店員は仏頂面で、漫画雑誌を読んでいる。

二人は武器を眺めていく。

拳銃一式や、ショットガンが揃っていた。それから、手榴弾やライフル・スコープ。勿論、マシンガン、防弾ジャケットなどもある。それから、一通りのナイフ、スタンガン、ダイナマイト

。

「あんたら、ズンヴィーとフォールス・メモリーか」

武器屋の主人は驚いた顔をする。

「また、誰か殺すのか？」

二人は真剣な眼差しで、武器を手にとっていた。

「大きな抗争にはならないと思うけど。でも、まあ人は何名か死ぬかもね？」

主人は陰鬱な笑いを返した。

此処は、マフィアや殺し屋御用足しの場所だ。

会員制で、主人の趣味はスナッフ・フィルムの収集。

ダビングしたフィルムのDVDなども、積まれて売られていた。マフィアは裏切り者などの処刑の際にフィルムを取り、此処の主人に売りつけたりする習慣が多かった。

主人が何者なのかは、誰も探らない。ひょっとすると、何処かの組織から抜けてきた者なのかもしれないが、その正体は謎だ。

「銃身を切り詰めたショットガンと。それから、爆弾が幾つか欲しいかな」

「誰を殺すんだい？」

主人はにやにやと笑う。

「拳銃じゃ殺せない相手」

ズンヴィーは淡々と返す。

「そりゃ、結構、やばそうで」

くっくっ、と主人は笑った。

花鬱は、パチンコ店に居ついていた。

店の主人から、不正を働く客がいたら、注意して欲しいとの依頼だった。

それにしてもだ。

パチンコというシステム自体が酷いと思う。

あるいは、ギャンブルというシステム自体というべきか。

どうやっても、店が客に余り勝たせないように、コントロールしている。

客は熱心に、パチンコ台やスロット・マシンに金を注ぎ込んで、どんどん無一文になっていく。まともな客だったら、適度に使って適度に損をするのだが、破滅的に使う奴だって多い。花鬱はそういうのを見つけたら、さりげなく忠告を入れる。もっとも、聞き入れてくれた者は少ないが。

彼女はいつもの黒い着物を纏って、休憩席で、パイプ煙草を吹かしていた。

休憩席からは、特殊な機械などの発する磁力で、台を弄っている客がいないか、よく観る事が出来る。

がたがた、と一人の男がスロット・マシンを叩き続けた。

男の眼は血走っている。

少し、浮浪者に近い身なりだ。おそらく、多額の借金を抱えているのだろう。

花鬱はキセルの先に、新たな刻み煙草を入れる。

そして、火を点ける。

ぷかぷか、と煙が舞う。

どん、と音がした。

先ほどの、スロット・マシンを叩いていた男が呆然としていた。

スロットがどうも、動かなくなっているらしい。彼は焦り始めた。

ばん、とスロットの内部が弾け飛ぶような音が聞こえた。男はますます焦る。

ああ、あれは弁償物だな、と花鬱は思う。

男が逃げないように、監視しなければならない。

しかし。

信じられない事態が起こった。

男がいきなり、呻き声を上げると、地面へと倒れた。

がくがく、と痙攣した後、男は口から、そして、眼や鼻から大量の血を流す。

花鬱は男の下まで、走った。

そして、男に触れようとする。

.....

直感。

花鬱は、男から離れた。

代わりに、店員の一人が、男へと触れる。

死んでます。店員は呟く。

だが、直後、店員の全身がめりめり、という音を立て始めた。

すぐに、店員の顔の穴という穴から、血が流れ始める。

花鬱は叫んだ。

「あんたら、誰もこいつらに近寄るなよっ！」

そして、野次馬達を制していく。

そのまま、外へと走った。辺りを見回す。

暗殺だろうか。

この男を殺したかったのか？ だが、妙だ。妙なのは分かる。

しかし。

花鬱は事態の全容を、把握出来なかった。

一体、何が起こったのか分からない。

花鬱の性格は、極めて単純だった。

目の前に理不尽なものがあれば、怒り出す。

表面上は冷静に振舞っているが、頭の中では、余り物事を深く考えるタイプではなかった。だから、もし彼女を狙う何者かが、策略を練っていたとしても、彼女にはそれを見抜くだけの力が無い。

昨日も、甘名が忠告してくれなければ、危うくあの浮遊城へと、否睡の能力で一緒に向かって、地面に叩きつけられる処だった。

ただ、確実に分かった事がある。

この現象を引き起こしている相手は、能力者だ。

一体、何を目的としているのか分からない。

彼女は少し、焦りながら、取り合えず、携帯電話を取り出す。

十

「あちゃ、駄目だったか」

ライフル・スコープを片手に、ズンヴィーは舌打ちした。

「フォールス、あんたの能力、あれで見抜かれたかもよ？」

「うーん、はまると思ったんだけどなあ」

二人は、武器屋で必要最低限の武器を揃えていた。

しばらく観察していて分かった事がある。

花鬱は、二人を狙っている気配は無い。

どうやら、浮遊城へと向かいたいみたいだ。

仲間が他に三名いる。

「ひょっとして、浮遊城の主があいつ殺してくれるかも」

フォールスはくすくすと笑った。

「いや、率先して仕掛けよう。あいつがいるせいで、実際、俺達の仕事がやりづらくなったってのは、事実だからな」

二人はマフィアの用心棒を渡り歩いていた。

しかし、花鬱が目立っていくにつれて、彼女達は次第に動き辛くなっていった。

「俺達が殺すんだよ。フォールス、奴にこれ以上、いい顔されて溜まるかよ」

ズンヴィーは紫に染め上げた短い髪を掻き耑りながら、自らの唇ピアスを噛み締めていた。

そして、両眼を剥き出しにした後、ふいに自身の恋人の顔を見つめる。

「ねええ、フォールス。愛しい、フォールス。一緒に倒そうね？」

髪を桃色に染めた女は、自身の恋人である女を抱き締める。

「勿論、ねえ。どうやってやっちゃおうかな？　すごい死体に変えたいよねえ。彼女は死んだら、街の覇権は確実に変わる。あたし達もかなり大きな顔が出来るんじゃないかな？」

十

「貴方を狙ったんじゃないのかな」

白と黒のドレスに身を包んだ青年は言う。

花鬱は首を傾げた。

「あたしを？」

確かに、その疑問もあった。

「敵の方が、もう見抜いているんじゃないか？　貴方がドーンからの指令で。四人の能力者を始末する事を実行に移しているって」

「そうか……もう、敵さんにバレているわよねえ」

携帯で連絡して、甘名は驚く程早く、このパチンコ店の前へとやってきた。

そして、周囲を見渡している。

「四人のうちの誰かだろう。花鬱さん、多分、貴方は目立ち過ぎなんだ。この街で。だから、敵の方は貴方の態度から異変に気付いたんだろう。始末されるんじゃないか、って察したんじゃないだろうか」

彼は冷静に、持論を述べていく。

「ツインと否睡も呼んだ方がいいかねえ？」

「いや、オレ達二人だけで戦おう。下手に四人固まるのも拙い気がする」

彼は花鬱から渡された写真を眺める。

「この中の誰かか。もしくは、彼らを守りたい誰かか。……」

彼は周囲を熱心に見渡していた。

どうやら、ビル群を見渡しているみたいだった。

「此処を監視出来る位置にあるのは、……少し多いな。困った。敵は何処からか、此方を覗いているのだろうか」

「あんた、戦闘のプロなの？　確か、ハンターでも無かったんじゃない」

「昔、……暗殺者の訓練を少し……」

彼は少し、陰鬱そうに笑った。

二人は、少しの間、押し黙った。

花鬱は顎に手をやる。そして、キセルを取り出そうかどうか迷う。

「敵は何をしたと思う？ 店の機械がいきなり壊れて、客が死んで。店員が死んで……」

「分からないな。……能力者同士の戦いは、これまで生きてきた経験、パターンの応用じゃなくて。お互いの想像力の戦いなんじゃないだろうか。だから、相手もオレ達有能力、攻撃方法について考察し続けている筈だ」

「マニュアルは通じないって奴かしら。やっぱり、骨の折れる仕事よねえ」

「経験論が役に立たないって聞くな。パターンに嵌め込んで、戦いに挑む奴ほど、あっさりとして死んでいくって聞か。……花鬱さん、オレよりも、貴方の方が実戦経験が多いんじゃないのか？」

「……………まるで、役に立たないわ。街の治安やら何やらで培ってきたものが役に立たない。これまでの戦いもそうね。正面切ったの戦いが多かったかしら。分かりやすかった」

「そう。能力者ってのは、人間が作り出そうとしている、秩序やルール、常識をまず破壊しようとする。これまで培ってきた、法や心理学、科学がまったく役に立たない。逆に、理解不可能な攻撃の能力に対して、何も分からない無邪気な子供や、知的障害者が見抜いた、という例も聞いた事がある。……」

「改めて考えると……凄いわね……」

「ただ、大体は……能力者は能力を一つしか持っていない。その応用で攻撃している。……否睡のような複数の能力を持っている例外もいるから、また困るんだけど。だから、敵の攻撃の謎を解く事が出来れば、有利になるかも……」

甘名は考えているみたいだった。

渡された四枚の写真を眺めている。

「この中の奴らは、全員、知っているか？」

「詳しくは知らない。ただ、この中のうち、ズンヴィーとフォールスは、以前、会った事がある。確か、同性愛者のカップルだったような……」

甘名は写真を眺める。

「浮遊城の主は、多分、あの重力の攻撃による防御膜があるから。率先して、オレ達を倒したいと思っているとは考えにくい。……この子は？」

一枚の写真を花鬱に差し出す。

「ああ、何で。メビウス様はこの子も始末したがつているか分からないわね。でも、仕方無いのかもね。こういう子だって、裏で何やっているか分からないし」

彼はしげしげと、写真を眺めていた。

「この同性愛者のカップル。……何だろう、……薄気味悪い。どう言えばいいのだろう」

「そうねえ」

花鬱は言った。

「こいつらかもね。もし、一番、先に動くとしたら。噂では、あたしを嫌っているらしいし。あたしが、この街で有名になり始めてから、仕事がやり辛くなった連中が多いって聞くけど。きっ

かけは、やっぱり、数年前の事件なのかねえ」

彼女は思い切って、服の中に閉まっていたキセルを取り出して、火を付ける。

ヤニが全身に浸透し、肺の中へと収束されていく。

甘名は煙草の副流煙を嫌って、少し彼女から距離を置いた。

「多分、最初に狙ってくるとしたら、こいつらなのかしら。取り合えず、当たりを付けておいていいのかも」

「そうか。……さて、どうしようか。取り合えず、やはり、否睡達にも連絡しておこう」

「ええ」

ふと、花鬱は訊ねる。

「そういえば、あんたってかなりの修練を積んでいるみたいねえ。こういう状況に慣れているかのような」

「……………大して無いよ。全部、読書してイメージを広げたり。小説書くときの構成力とかで他人の行動を想像しているだけだ。でも、実際、それがいつも役に立っている」

彼はそう返した。

十

「ツイン、お前、幾つだよ」

「ひーちゃんこそ、幾つ？」

「さあてね、まだ十代だと言っておく」

「じゃあ、私はまだ二十代だと言っておく」

ツイン・スラッシュは、否睡を、自分の部屋の中に招き入れていた。

まだ、会ってまもない。けれども、二人共、まるで数年来の親友のように、あるいはまるで同族を見つけたかのように、意気投合していた。

否睡は、彼女の部屋の中を見て、最初驚いたが、すぐに慣れた。

ただ、入って、まずトイレを借りてみて。余りの酷さにゲンナリする。

それでも、何とか用を足した。トイレット・ペーパーの代わりに、沢山のティッシュ・ペーパーが積まれていた。詰まらないのだろうか……。

「しかし、甘名ちゃん、面倒くせーっての、私は普通に話しかけているだけなのにさ」

「まあ、仕方無いだろ。あいつはあいつで色々あんだよ」

はあっ、と彼女は溜め息を吐いた後、置かれている炭酸の入ったオレンジ・ジュースを口に入れる。

「あ、……虫歯が結構、出来ていたんだ。どうしよう、歯医者。めんどくせーな」

「お前、面倒臭いが口癖だろ？」

「バレたか」

彼女はゲラゲラと笑う。

否睡は、プレステの上に溜まった埃を指で拭き取りながら、ゲーム・ソフトを探す。

「何か、いいゲーム無い？」

「あー、何処に閉まっていたかなあ。そだ。エロビデオの中に適当に沈んでいる。適当に探してくれ」

どうにか、有名なソフトを探し当てる。

「メモリー・カードってある？」

「知らない」

卑猥なパッケージと、映像の入ったDVDの中から、まるで宝探しでもするかのように、掘り進んでいく。

否睡は、メモリー・カードのケースを見つけた。ケースは、所々がヒビ割れていた。そして、カードの差し込み口にも埃が沢山溜まっている。動作不良を起こしそうだ。

ポケット・ゲーム機と違ってある？ と訊ねようと思ったが止めた。

面倒臭い。

「なあ、ツイン、お前さあ。本当に下品だよなあ」

「煩い。これでも、男受けはよかったんだぞ」

そう言いながら、ツインは自分の尻をぼりぼりと搔く。下着が少しだけ、ズボンからはみ出していた。

「ああ、掃除してー。ここ、本当に汚いな」

「だから、人招き入れたくないんだってば。でも、ひーちゃんの場合、気にしなさそうだったからさ」

「まあな」

二人とも笑った。

カップメンの容器やスナック菓子の袋が、空になって沢山、散らばっていて、中からは異様な臭いを放っている。そういえば、フローリングの床が所々、黒づんでいる。彼女の片付けられない癖は何処から来るのだろうか。何か精神病質的なものも、原因なのかもしれない。

クローゼットを開ける。香水の束が置かれて、ジャケットやカットソー、キャミソールやワンピース、ドレスなどが、雑然と積まれている。羽虫が、クローゼットの中を這っていた。

もう、どうしようもないな、こいつ。……。

「ひーちゃんさあ。彼氏作らないの？」

ツインは寝転がって、テレビのリモコンを押していた。

どうでもいい、お笑い番組が流れている。

「んん、分からんなあ。私は女なのかなあ？ それも分からん」

「いいねー。何か、中性っぽいもんねえ。ひーちゃん。じゃあ、彼女でも作ればいいじゃん」

「それは考えた事、無かったなあ。彼女かあ。つまり、私は同性愛者って事？」

「わかんない、でも、ちょっと性同一性障害っぽい処とかない？」

「あー、どうだろうなあ。言われてみれば、そうかも、でも、それもわかんねー、意識した事無いから」

ううむ、と彼女は考える。

「そういえば、私って性欲無いんだよな。肉体の構造的なものかもしれん」

「またまたー」

「本当だってば」

ゲラゲラと、ツインは笑う。

「興味もあんまり無いしな」

くくっ、と笑う。

「じゃあ、ひーちゃん。エロビデオ見よう、エロビデオ。あっ、ビデオじゃないのか。DVDしか無いし」

「いや、いいって」

「なァー、普通のとアニメと。ボーイズ・ラブどれにする？ 割かし、ボーイズ・ラブの割合の方が多いんだけどね」

「お前の趣味、もう分かったから」

否睡は、大量に積まれている小さな男の子のパッケージを見て、苦笑する。

こいつは、本当に好きなものが、とことん好きなのだろう。

携帯に電話が掛かってくる。

花鬱からだ。

「ああ、花鬱さんからだぞ。はい、もしもしー」

否睡は半分面倒臭そうな声で言う。

「えっ。敵からの襲撃があった？」

第三章 ケージ

毎日、特にやる事は無い。ご主人様の世話をしているだけでいい。
単調な人生。けれども、それはとても幸福だった。

時間が止まった世界。

それが、どれ程、安息を与えるのか、彼女は肌で感じていた。
そういえば、自分はいつ頃からご主人様の屋敷にいるのだろう。

記憶が全然、定かではない。

彼の秘密を知りたいな、と思った。

そうすれば、彼女自身の秘密も知る事が出来るんじゃないかって。
自分自身が何者なのか。答えが知りたい。

ミスティは炊事洗濯の合間に、広い屋敷をくまなく調べる事にした。

特に変な場所など無い。

庭を見れば、噴水が水を出してきらきらと光っている。

煌く大理石の敷き詰められた庭。

この浮遊城から見える景色はとても壮観で、アナトミアという街を見渡す事が出来る。

まるで、月から地球を見ているみたいだった。

此処は、空気もとても美味しい。

食材はどうしているかという、ヘッド・レス達に農業や畜産をさせている。城の敷地の中には釣堀もあるので、そこで魚も買っている。

服の生地などの開発にも力を入れている。

たまに傷んだり、壊れた屋敷の塗装なども頭の無い機械人形達が行っている。

このヘッド・レスという物を開発した奴は誰なのだろう。相当、天才なんだろうなあと思った。

でも、やっぱり愛する人の世話は自分でやりたい。

ご主人様の洗濯物を物干し竿に干す。彼の生活は出来るだけミスティが支えたい。

何年後も、何十年後も、ずっとずっと彼と共に生活したい。

時間の止まった世界。

誰にも邪魔されない。

たまに、小型のヘリで最低限必要なものを、比較的、複雑な動きがプログラミングされているヘッド・レスに命令を与えて、買いに行かせる。彼女の化粧品だとか、服だとか、ネットで見て、気に入ったものだとか。

外部に繋がっているのは、それくらいだ。

主人は仕事が一通り終わると、ミスティにお酒を勧めたりなどする。

いつも色取り取りのカクテルだ。

甘ったるい。何だか不思議な気分になる。

今が、どうしようもなく幸せ。

ずっと、二人だけの世界で生きていたい。

二人は、強く。愛し合っていた。

十

「ライフさんにでも電話してみる？」

フォールスは言う。

「いや、あの人が、なんか協力的じゃなさそうだねえ」

ズンヴィーは言った。

二人は戦略を練る事にした。

花鬱の下にやってきたゴシック・ロリィタ服の少女。遠目でよく分からなかったが、どうやら、花鬱に色々とアドバイスをしているみたいだった。

直感が言っている。

あれには、気を付けた方がいい、と。

フォールスが口を開いた。

「そういえば、花鬱とつるんでいる女、なんだっけ？」

「ツイン・スラッシュとかいったのかな？」

「彼女とか、どう思う？」

「大した事無いんじゃない？ 花鬱殺せば、後は有象無象だと思うけど」

しかし、ズンヴィーは眉を顰めた。

「でも、殺せるものなら、殺しておいた方がいいかも。小さくっても、毒蛇は毒蛇だからね」

十

夕方頃だ。

一応、今日は仕事に出た。

いつにも増して、仕事の時間が長く感じられた。

休憩の時に、不在着信だった番号に掛け直す。

花鬱の奴が、パチンコ店で、一騒動起こしたんじゃないのか、という情報が入ってきた。

ルーザーの部下からだ。

ライフは携帯を閉じる。

詳しくは分からないが、花鬱はパチンコ店にて、違反客の監視の依頼を受けていて、その店で、死人が出たらしい。

花鬱を監視していた者からの情報だ。

ひょっとして、花鬱は別の奴からも、今、狙われているんじゃないのか、というのが、ルーザーの見解らしかった。

その事実が本当なら、それを利用しない手は無い。

この前の、ズンヴィーからの電話。黒い噂の絶えないズンヴィーとフォールスのコンビ。彼女達との距離感は、微妙な処だった。

そういえば、何ていって、彼女達に返信したんだっただか。

あんまり、覚えていない。マゼンダを守るきっかけは、ズンヴィーからの電話だった。

それが、三日ばかりですでに、事態が進展している。

この三日間の間、脳味噌を可能な限り、フル稼働している。

カサネや制服屋、カサネのバックの組織。

彼らに応援を頼んでおいてもなお、何となく、あの二人との協力を拒んでいた。

それは、何と言うか、勝手な直感なのだが。……。

……あの二人と合流してしまったら、マゼンダを余計、巻き込むような気がするからだ。

ひょっとすると、自分はその二人の掌の上で踊らされているのかもしれない。

あの二人は、マゼンダの“能力”を知っている。

それを利用されるのだけは、どうしても避けたい。

情報が欲しい。

今は、ただひたすら。

制服屋。

癪だが、奴を頼るしかないか。……。

溜めている貯金の金額は、今回の件で、半分くらい減るかもしれないなあ、と思った。

別にいい。それで、守るべきものを守れるなら。安いものだ。

金の事は今はいい。

情報屋を頼ろう。それも、花鬱が何か動く度にだ。

そう考えながら、気付いた。

……少なくとも、ズンヴィーとフォールスの二人は、花鬱を狙っている。じゃあ、先ほどのパチンコ店での騒動は、彼女達が引き起こした可能性が高い。なら、しばらくは、あの二人に注意が向くだろう。

もどかしいが、しばらくの間は、ただただ時間の経過に任せるしかない。

でも、やはり、先手を打っておきたいのも事実。

問題は、誰に頼るかだ。

カサネか、カサネのバックの組織か。

制服屋か。

ズンヴィーとフォールスの二人か。

頭の中が混乱し、渦巻いている。誰を信じればいいのか分からない。

また、電話が掛かってきた。

それは、名前を見て、少し冷や汗が出る。

部下を通さずにかかってきた、ルーザーからの電話。

「もしもし？」

「ボスが直接、会いたいんだとよ」

心臓の鼓動が、脈打つ。

「なるべく、目立つ場所じゃ駄目ですか？」

相手からの舌打ちが聞こえた。

拙いな。……こいつらを頼ったのは、明らかに失策だったかもしれない。

完全に、怯え切ってしまうている自分がいる。

「一ついいですか？」

ライフはなるべく、冷静を装って言った。

「何だ？」

「私の能力。さっき、あなたに使ったものだけじゃないですからね。その気になれば。分かりますね。もし、私に何か暴力を働いた場合、あなた達の……その、保障は出来かねます」

電話相手は無言だった。

それから、また更に舌打ちが聞こえた。

十

仕事が終わったのは、夜中の二時だった。

待ち合わせの時間は、相手の方が合わせてくれた。

指定した場所は、高めの料亭。明け方くらいまで開いている店だ。

彼女はその場所まで来る。

駐車場には、沢山の高そうな車が止められていた。

彼女は、注意深く、周囲を観察した後、中に入る。

一人のいかつい男が現れて、ライフを席まで案内する。

沢山の男達。

卓の上には、大量の寿司が並んでいた。

ライフは能力を使い、少しずつ、巧妙に“自身の中の弱さ”を、男達へと振り撒いていく。感情に抑揚が無くなる。代わりに、男達からは得体の知れないものを見るような視線が集まる。

席には、幹部らしき男達が集まっていた。

それぞれが、好き勝手な格好をしているが、人目見て、組織の幹部なのだろうという事が分かった。彼らの何名かは、腕や足が義手や義足だ。ルーザーもいる。

中央には、ボスらしき男。帽子を目深く被った老人だった。

「ライフさん。だろ？」

幹部の一人がいった。彼はどうやら、右足が義足のようだった。

彼の隣には、カサネがいた。

「花鬱を倒す、と。あんた、言っていたそうじゃないですか」

「ええ」

ライフは言う。

「俺達を頼ったのは、何で？」

「恨みがあると聞いてましたから」

「その通り」

男は自分の右足を見る。

「こいつのせいで、俺は前よりも仕事が出来なくなった。足でろくに好きな場所にも行けない。女にも愛想付かされた。もう何年も花鬱を殺す事ばかり考えている」

剥き出しの情念。

今にも、何かにそれをぶつけそうだ。

「お前は何がしたいのかなあ？」

男は呟く。

「お前は能力者なんだろう？ ルーザーが言っていた。すごいじゃねえか。俺達の仕事を手伝ってくれるんだってな」

「ええ」

屹然と言う。

「今日は祝賀会だ。姉さん、お前を呼んだのは、今日はずのうちの組織のボスの誕生祝と重なっちゃまってな。そんなに怖がらせようってのは無いぜ。なあ、カサネ？」

近くにいたカサネは、明らかにビビった顔をして、その男を見ていた。

男は他の手下の男に、酒を注がせる。

「姉さん、あんたの仕事、手伝ってやるよ」

「でも、必ず殺せるか、分かりませんよ……」

「そうだなあ。うちのファミリーの奴ら、無駄にやられて死ぬのは困るもんなあ」

男はどうやら、幹部達全員の代弁者として、彼女に話し掛けているみたいだった。

「姉さん、協力し合おう。失敗はこの際、赦す。何せ、相手が相手、花鬱だからな。だが、裏切りは赦さない。いいか？」

「ええ、分かりました」

男は自分の掌に、ナイフで傷を入れる。

血が溢れ出す。

そして、それをライフにも渡す。

同じ場所を切れ、と示している。

ライフは、自らの掌を切った。灼熱する。

男は凄む、もっと深く切れ、と。ようやく、血が溢れ始める。

男とライフは、手と手を合わせた。

「じゃあな、これは契りだ」

二人の重なる両手から、血が流れ出して、それが大盛りを持った刺身と、わさび醤油の中へと落とされていく。二人の血に濡れた刺身は、ファミリー全員の血肉へとなくなっていくのだ。

「今日は祝賀会だ。存分に楽しもうじゃねえか？ ここの刺身はいいぞ。新鮮だ。それから、蟹や海老を蒸した料理もある、それも持ってこさせよう」

四十、五十名くらいだろうか。料亭にいたマフィア達は。

そうやって、一夜は明けた。

長い、長い夜だった。

彼女は家に着くと、ぐったりと横たわる。

やはり、あの連中といると、かなり消耗する。

男性的な暴力性を纏う集団。

ある意味で言えば、彼らは、女である花鬱に去勢されたようなものだ。

その事に対しても、きっと、憎しみを倍増させている。

十

三日ぶりくらいに、マゼンダに会った。

彼女はぼんやりとした顔をしながら、笑い掛けてくれた。

少し、キャミソールがはだけている。スカートもよれよれだ。

空ろな眼。

考える事を拒絶している眼。

思わず、抱き締めたくなる衝動に襲われる。

彼女は今、幾つくらいなのだろう。まだ、二十歳かそこらの筈だ。二十五にはなっていないかった筈。

何かしてあげたくなる。彼女を見る度に。

そうだ、病院で貰っている薬を分けて上げよう。少しくらいなら、それで感情が落ち着いてくれる筈。

「元気してる？ マゼンダ」

「うん」

彼女は笑い掛ける。

「ライフ、って優しいよね」

彼女は何だか、申し訳なさそうに言う。

私は、優しいか。.....彼女は困惑する。

何だか、過剰なまでの愛情が、かえって彼女を傷付けてしまいそうで、怖い。

「私って押し付けがましくないかな？」

思わず、訊ねていた。

マゼンダは、更に困惑したような顔になる。

「そんな事、.....そんな事無いよ」

優しく、抱き締めた。

聖なるものとは何なのだろうか。

多分、ライフはその存在を信じたい。

それを見つけなければ、これまでの人生の意味を見出す事が出来ないのだ。

ライフの神聖なもの。マゼンダ。

彼女にだって、醜い部分があるかもしれない。むしろ、それをライフの前では、決して出さずにいるだけなのかも。分かっている、自分が救われたいだけ。これは、彼女のエゴでしかない。けれども、だ。守りたい。それはもうどうしようもない、衝動。ライフは誓った。この子の為ならば。誰であろうと。全員、殺してやる、と。……。

十

本棚を整理している時、幾つも折り重なっているファイルを見つけた。女性のグラビアのピンナップを発見する。彼女は頭の中で、血の気が失せた。そして、主人の下へと詰め寄った。「これ何ですか？ ……」憤り。嫉妬心。「仕事で必要なんだよ。駄目かなあ」「処分していいですか？」「……そうだね、もうそれは使わないから、いいよ」ミスティは本棚で見つけたアイドルのピンナップを全て、庭の一角で、灯油を付けて燃やした。次第に炎の赤が薄い髪に浸食していく。女の顔が焼け爛れていく。彼女は愉悦の笑みを浮かべた。それから、後で、彼に断って、女の写真や水着の絵が載っているものは、全部、黒マジックで塗り潰していいか訪ねようと思った。嫉妬心の炎に焼かれそうだ。少しの猜疑心。考えたくはないが、グラビア写真だけでなく、大人の見るとエッチな本やDVDだってあるかもしれない。赦せない、と思った。全部、廃棄してやる。それから、彼女の屋敷中の探索は始まった。屋敷中にある本棚、書庫にある本を調べてまわった。恋愛小説も沢山あって、ひょっとすると、主人が彼女以外の女性に、小説の中とはいえ、恋をしているんじゃないか、という疑問も出てきた。しかし、さすがにそれは考え過ぎ、思い込み過ぎだと思って止めた。思っていたのだが。……。それは、書庫の天井裏に隠されていた。念入りに隠したのだろうが、天井の一部と一部に違和感を感じ取り。天井を強く押してみると、天井の一部が外れた。直感。狭い天井裏を這って行って、あるものを見つけた。それは、沢山の記録用紙だった。

それはダンボールに入れられて、大きなトランクの中に鍵を掛けられていた。鍵は経年劣化で簡単に壊れてしまった。

彼女は記録用紙をめくっていく。

物凄く歪んで、神経症的なカクカク、とした文字だった。

どうも、読んでいく限り。

それは、女性の話だった。

.....主人の昔の女。

はらわたが煮えくり返った。

怒りが頭の中で、反復していく。

どうも、それは彼が熱心に恋心を抱いていたみたいだった。

頭の中で、その女を殺害したい衝動に襲われる。

溢れんばかりの嫉妬の洪水。

.....今日、彼女に会った。僕の名前を覚えていてくれるだろうか。でも、僕ごときじゃ彼女に釣り合わない。苦しい。僕は一体、どうしたら彼女に想いを伝えられるのだろうか。何故、僕はこれ程までに他人と分かり合えないんだ。いつも、そうだった。いつだって、そうだった。でも、彼女の事を思うと苦しい。何故、分かり合えないのだろうか、人と。

散文的な内容だ。少し、支離滅裂。

ミスティは嘲笑った。想いなんて伝わらなければいい。

この恋は失恋に終わればいい。

.....僕は友達が少ない。女性との接し方も分からない。どうすればいい？ ああ、彼女の髪に触りたい。頭の中が妄想でいっぱいだ。醜悪な妄想でだ。何で。何で、自分はこんなに自分勝手なのだろうか。分かっている、でも、壊さずにはられない。

次のページを開く。

.....どうすれば、彼女が僕のものになるのだろうか。それよりも、僕は病気だ。そんな僕を彼女が好きになってくれるわけが無い。僕じゃ、駄目だ。僕じゃ、駄目だ。僕じゃ、駄目だ。マトモな解答で、彼女と分かり合わなくてはならない。けれども、選択は同じ。いや、みんな同じ選択を行うのかもしれない。

ぱらり、とページをめくる。

.....今日、彼女に告白した。一体、どれくらいの月日が過ぎたのだろうか。彼女はあまり僕に印象が無かったみたいだった。結果は失恋。悔しい。憎い。何故、僕を好きになってくれない？

僕はこれ程、彼女を愛しているのに。

こんなに好きなのに、何故だろう。赦せない、赦せない、赦せない。どうしようもないんだ。

僕は病気なんだ。病気だから、彼女に偏執する。早く忘れなければ。早く消さなければ、けれども、何をやっても思考の隅に彼女がいる。夢の中にも出てくる、夢の中の彼女はいつも僕に笑いかけてくれる。僕はストーカーなのだ。僕は異常だ。苦しい。自分を殺すしかない。そうやって、別れは誰だって経験するんだろう。それでいいと思っている。それがいい、それこそが。

.....

それから、途切れていた。

ミスティはその日誌を憎憎しげに叩き付ける。

そして、数十分ほどした頃だろうか。

他のファイルも開く。

奥底に、別の日記帳が入っていた。

.....ついに待った。僕は彼女を忘れられなかった。一体、どれ程の歳月が流れたのだろうか。

四年？ 五年？ 彼女の男の遍歴。考えたくない、胸の中をほじくるような気持ち。僕は痩せた。髪型も服装も頑張った。気になっていた頬骨やえらも削った。告白はしないだろう。彼女に男がいるのは知っている。男に罪は無い。でも、彼女だけは.....する。

何をやるのだろうか。その箇所だけは黒く墨で塗り潰されていた。

ページをめくる。汗でページが滲む。

.....「部屋」の中に彼女を押し込めた。薬で眠らせた。彼女は搜索されるだろう。けれども、僕はもう誰にも辿り着けない場所に行く。誰も僕を探すな。彼女と僕との庭園。僕は、病気だ。何故、僕は此処までやってしまったのか。僕は病気だからだ。間違えている事を平気でしてしまえる病気だ。

他に女がいたのか？ ミスティは、はらわたが煮えくり返る。

問い詰めてやろう。

.....道具は全て揃った。彼女は僕に罵声を浴びせていた。死ね、豚。クズ野郎。こんなの僕の彼女じゃない。僕は彼女に口枷をする。歪んだ眼。拘束されてもなお、彼女は僕を苦しめる。分かったよ。僕は彼女を二日間、放置した。

.....彼女は汚物に塗れている。憎しみと屈辱の籠る眼。余りにも反抗的だから、四日間、そのままにしていた。僕は彼女の口に栄養ドリンクを注入する。点滴を買おう。口枷を外すと、彼女は僕に向かって唾を吐きかけた。血で汚れた唾だ。手が痛いと言った。

.....僕は彼女の服を全て脱がした。彼女は随分、抵抗した。僕はズボンを下す。思わず、泣き叫ぶ彼女。僕の頭は真っ赤な破壊衝動ばかりに支配されていた。

.....彼女は殺してやる。と僕に言う。お前は人間のクズだ、と叫ぶ。僕の方も彼女に感化されて、憎しみが募る。今日は沢山の道具を買ってきた。拷問道具。拘束道具。それから、ビデオカメラ。ビデオを上映し、流し続ける、彼女が時折、僕に優しくなる瞬間を何度も何度も再生して、彼女が僕に屈服した日の事を何度も何度も、再生する。そして、彼女の真正面には鏡を取り付けた、今の自分をまざまざと見せ付ける為に。

.....大体、彼女を閉じ込めてから、どれくらいの日がちが経過した事だろうか。気付けば、三ヶ月が経過していた。彼女が少しずつ、壊れていっている事を知る。

.....彼女の名前はミスティ。僕の最愛の人。

はらり、と写真が落ちる。

それは、自分と同じ顔の女だった。

ミスティは茫然自失で、その日記帳を読み返した。

全身、汗でびっしょりと濡れていた。

十

ミスティはいつものように、主人の服を綺麗に洗って。いつものように、彼に夕食を作る。ただ、今日は髪を撫でられる事は止めた。

何も変わらない日常。

彼女は自分の部屋の中に閉じ籠る。

どうやら、自分は彼によって、一度、人格を破壊され尽して、新しく彼の理想の女性としての人生を続けているらしい。その事実を頭の中で反復する。

彼女は部屋にある鏡を見た。

見ると、不気味な顔が映っているかのようだった。

夜風が部屋に沁み込んでくる。

幸福の時間を自分で壊してしまった。知らなくてもいい事を知った。

ミスティは鏡を見続ける。知らない女が映っているかのようだった。

お前は誰？ 自問自答。

それから、強い激情が込み上げてくる。

彼女は今の感情を、メモ用紙にペンで記して、まとめていく。

憎い.....。

憎い……。

殺してやりたい。……。

彼女は再び、鏡を見た。顔が崩れていくかのようにだった。

そう、彼女の中で憎しみが膨れ上がっていった。

……過去のミスティとかいう、どうやら自分であって、自分らしい見知らぬ女に対してだ。こいつの、ミスティの最愛の人に対する侮蔑、嘲笑が赦せない。殺してやりたい。

それが、自分自身なのだという事が理解不可能だ。

記憶を幾らほじくり返そうとしても、昔の記憶を思い出せない。此処で生活する上で、謎のフラッシュバックさえ起きた事が無い。ストックホルム症候群とも違う。

じゃあ、自分は一体、何なのか、同姓同名の別人？ 顔も同じなのに？

衝動。

全身が弾け飛びそうだ。

ぶるぶる、とどうしようもない感情に襲われる。

一体、何に怒りの矛先を向けていいのか。分からない。

その晩、ミスティは面倒臭そうにしていた主人を押し倒した。

哀願し、一緒に寝るように言った。

そして、全身全霊を掛けての激しい行為に及んだ。彼はとても優しい笑みを返す。

ご主人様は私のモノだ。その言葉ばかりが頭の中で反復する。

十

「浮遊城の主よりも先に、花鬱さんを襲った敵を倒すべきだと思う」

甘名は断言した。

喫茶店で、四人で固まっていた。

それぞれ、思い思いのメニューを注文している。

否睡とツインは困惑していた。

「何すかねえ、花鬱さま。私達がターゲットを倒そうとしていった事、もう相手側にバレちゃっているって事ですよ」

「そういう事ね。でも、あたしは目立つのだろうね。何となく、違和感を感じたからなんだろう。相手もプロなんだろうね」

花鬱はキセルをふかしながら、少し苛立ちを覚えていた。

無関係な人間を巻き込んできた。

戦いが長引けば、それだけ死者の数が増える、という事だ。

「ま、敵はどんな手段も使ってくるって事だろうな。私達もどんな手段だって使っちゃえば、いいじゃねーの？ その方が、私は戦いやすいし」

否睡は楽しそうに言う。

彼女は他人の死が、とても楽しそうだった。

ツインは、マイルドセブンに火を点ける。

「浮遊城の主はしばらくは、放っておいてもいいかもしれないな。残りの三名を先に始末する、というのはどうだろう？」

甘名は言う。

彼は、色々と分析しているみたいだった。

「簡潔に言おう。あたしは二手に分かれて、仕事をこなすべきだと考えている」

花鬱はキセルの火を消した。

「メビウス様の勅命だ。これは、ドーン側のあたしの役割。あんた達には関係が無い。だから、どうしても、浮遊城の主だけは倒さなければならない。他の三名は、ついでだ、とメビウス様はきっぱりおっしゃっていた」

「ついでね……はっ、メビウスってのは、本当に傲慢な奴だな」

否睡は悪態を付く。

「浮遊城の主の始末、オレと否睡に任せてくれないかな」

甘名は言った。

「お互いに、その方がいいんじゃないかな。花鬱さん、貴方の相棒、知己の友人との方が連携プレーが出来るだろう。オレ達も同じだ」

「浮遊城の主は、あんたらが倒すの？」

「ああ。それに、パチンコ店を襲った敵は貴方を狙っている。だったら、貴方は応戦するべきだ」

他の組み合わせでもいいんじゃないか、と花鬱は思った。

浮遊城はやはり、何とか自分が乗り込んでおきたい。

だが、彼の言っているのも理に適っている。

だが、別の側面も感じる。

「お前、本当にツインが嫌いなんだな」

くくっ、と否睡は笑う。

「私と花鬱が浮遊城に乗り込んで、お前らが花鬱を狙う奴を追跡しても良かったんじゃないのか？ 追跡はお前の方が得意そうに見えるけどな」

「逆に、オレと花鬱が浮遊城に乗り込んで、お前らが花鬱を狙う敵を倒しに行くってのも、ありだったんだけど。駄目だな。それだと、奴らは動いてくれそうにない」

彼は色々と自分の出来る限りで、策略を巡らせているみたいだった。

「何にしる、犠牲者が増える前に叩いて起きたいな。浮遊城からヘリが降りてくるのは、後、四日くらいか。それまでに、浮遊城とは別件の敵を倒してしまえるかもしれない」

十

「コシュマールさん、ですか？ はい、はい。わたし達です」

フォールスは電話相手に頭を下げる。

「暗殺の依頼をしたいんですよ。ってか、助っ人に来て欲しいっていうか。わたし達、狙われていて。ちょっと、花鬱、キツイかなって」

電話相手は無言だった。

携帯を切られる。

……………

コシュマール。

ドーンにはランキングされていない、密かに暗殺を行っている殺し屋だ。

彼女の強さを、二人はよく知っている。

以前、些細な事で、彼女の怒りを買って、危うく二人共、殺されそうになった。

花鬱に対抗出来そうな、数少ない能力者だ。

それなりに、腕が立つと聞く。

勿論、花鬱を含めた四名が、喫茶店で話し合っているのも、二人によって見られていた。

花鬱は用心棒のプロなのだろうが、二人は暗殺のプロだ。

標的の尾行や動向を探る事など、わけもない。

普通なら、とっくに始末出来ている。

だが、花鬱のやっかいな能力のせいで、中々、近付く事が出来ない。

彼女のテリトリーに入ってしまう事は、そのまま死を意味している。

とにかく、どうにかして、罠に陥れるしかない。

コシュマール。

彼女の能力なら、花鬱のテリトリーに入ろうが何だろうが、攻撃出来るのだろうが。どうも、動いてくれそうにない。

「花鬱達は、わたし達の動きを知らない。それはかなり有利なのよね」

フォールスは言う。

ズンヴィーは頷く。

二人は、同じように歪んだ笑みを浮かべる。

「うーん」

フォールスはライフル・スコープを手にしていた。

数キロ先の病院を眺めている。

「確か、花鬱の奴、あそこで数年前の事件で知り合った友人が暮らしている筈なんだけどなあ」

ガリガリ、とズンヴィーは爪を噛む。

「彼女の希望を一つ、一つ断っていかないと、ね」

「しかしまあ、その計画だと。俺達、ますます、ドーンから付け狙われるんじゃないかねえの？ 無差別に大量虐殺しまくって、花鬱も殺しちゃうんだからな？」

ズンヴィーはくっくっ、と笑い続ける。

「そしたら、ランキングが上がって。私達に賭けられている。賞金も上がるんだよねえ」

とても楽しそうだった。ドーンというものを嘲笑している。

「しかしさあ」

ズンヴィーは笑った。

「そろそろ、俺にも殺させろよな？ フォールス、お前ばかりじゃ何か俺が楽しめないじゃないか？」

ぺろぺろ、と自分の唇のピアスを舐める。

唾液が口許から漏れる。

「花鬱の心を追い詰めていくのは、いい作戦だと思うけれど。どうするかなのよねえ」

フォールスは悩む。

「問題の花鬱本人に、どうやっても近付けない。……」

そう。

実の処、どちらも攻めあぐねていた。

二人は快樂殺人者だ。だから、花鬱の心を砕く為ならば。簡単に彼女の前に死体を置いて見せる事も出来る。

花鬱の苦しむ顔が、とても見てみたい。

しかし、花鬱を殺せない状況は変わらないだろう。

花鬱を怒り狂わせ、罪悪感に押し潰す事が出来ても、彼女を殺害するまでには至れない。

油断させる、必要がある。

どう、油断させるべきか。

相手は、圧倒的な暴力だ。

「人間を爆弾にするのが一番、効率がいいんだよねえ」

二人はにやにやと笑う。

十

彼女の人形みたいな心を溶かす日が来るのだろうか。

いや、彼女は人形ではないし。人形だって、心が無いわけではない。

彼女は制服屋の前にいた。

今は昼頃だ。

情報を貰おうと思う。口座から二百万近く引き出してきた。

彼女は様々なコスチュームの横を通り過ぎていく。

「すみません」

制服屋は、レジでにやにやと不快な笑みを浮かべていた。

「情報が欲しいです」

それだけ言った。

「今、時間外だよ？」

「それでも、欲しいです」

「情報が欲しいなら、夜に来て貰わなきゃ。……でも、分かったよ。今はお客さんいないし、何の情報かな？」

「決まっているじゃないですか、花鬱の情報ですよ」

「ああ」

制服屋、シーズンズは頭の中をこつこつ、と叩く。

「七十万、それでいいかな？」

「.....ちゃんと、正確な奴、教えてくださいね？」

こいつ、二十万とか言っていなかったか？

まあ、どうでもいい。足元を見たいだけなんだから。

だから、訊ねてみた。

「そんなにお金って必要ですか？ 何に使うんですか？」

「持っている色々、便利だよ。それに金を生むには、沢山の金が必要なんだ」

「.....そうですね。生活費以外にも。マンションとか車とか。それから服に医療費、後、何か必要でしたっけ」

「あればあるだけ、いいじゃんよ。何よりも、お金って安心の象徴だと思わない？」

「安心？」

「そう、だってみんなを支配している気持ちになる。あればあるほど、不安なものを取り除ける。違う？」

「.....分かりません」

「それに、飛べるクスリの値段も半端じゃない。上物ほど、とても高いからね。中毒症状が無い奴ほど、安全性が高いもので、かつ、飛べるものほど、高いから」

ああ、やっぱり、こいつはクソだ、とライフは思った。

ライフは、札束をぱらぱらと数える。

金。

金がゴミ屑のように見える。

ただの数字の羅列だ。

こうやって、握り締めてもなお、ただの紙切れだ。

何の言葉も見出せないゴミ屑。

でも、これに人間は支配されている。みんな、みんなこんなゴミ屑の為に争って、これを沢山手に入れる為に生きて。稼いで。食べて、服とか買って。みんなよりオシャレして。性欲を満たして。奪い合って。生きている。生きている.....？ 本当にお前らは生きているのか？

数万もする十字架型のペンダントよりも。

雑貨屋で買った数百円だった十字架の小物の方が、より気に入って、香水箱にずっと保管している事を思い出す。

数万した奴は、どっかに無くした。

本当に価値のあるものは、自分自身で決めたい。

ライフは、ぺらぺらと引き出してきた金を差し出す。

数えるのも面倒臭い。

クソみたいな男達の欲望を吸って、生まれてきた金。ライフ自身のトラウマを男達に、焼き付

けようとした結果として生まれた金。

金。金。金。紙の束。

「ああ、一応。この前の話と違うのは、やっぱり、相手が花鬱だからねえ。二十万じゃ安過ぎる。ああ、でもサービスして、何か情報が入ったら。携帯に掛けるからさ。七十万は前金ね、今後、よっぽど重要な情報でも手に入れない限り、しばらくはただで情報を提供するよ」

シーズンズは、くくっと笑った。

面倒臭い。

どれが、重要で、どれが重要じゃないか、こいつも気分次第だろう。

……ライフの貯金が底を尽きるまで、搾り取られる恐れがある。腹立たしいが、それはいい。問題は、貯金が底を付いて、闇金で金を借りるにしても、時間が掛かる。その間に、事態が拙い状況に進展していないかだ。

冷静になって、これまでの仕事の苦労を思い出す。痛い出費である事に代わりはない。

でも、……心に決めたから。

命を捨てる、と。

過去も未来も、どうだっていい。

マゼンダの為に、命を掛ける。

なら、未来の事なんてどうだっていいんじゃないのか。未来の生活の事なんて、それこそ無駄以外の何物でもない。

今から、人を、殺しに行くのだから。

十

マゼンダは、失ってしまった自分自身の心を取り戻したい。

そう、思い始めた。

仕事によって、破壊されていく心と肉体。

その痛みを消し去る為に、彼女は考える事を止めた。

けれども、ライフの愛情は突き刺さるように痛い。

まるで、何処か遠くへと消え去ってしまった、自分自身を取り戻してしまいそうな。

どんどん、どんどん、仕事が苦痛になっていく。

今回は新作を沢山、作らなければならないと、監督が言って、仕事は過酷になっていっている。マゼンダは思考したい。自分自身を見つけたい。

自分の出ているビデオを見て、まるで傍観者のように、それを眺めている。

本当の自分は、一体、何処に行ったのだろう。分からない。

私は私を探さなければならない。

最近、少しずつ、そのような想念が湧き上がってきている。

何故だか、あんなによくしてくれるライフの事が、憎らしくなるような気持ちに襲われ始めた

。

私は誰なのだろう。

私は何処なのだろう。

これまでの、痛みが、少しずつ、少しずつ、遅れてやってくるかのよう。

眠れない。眠りが浅い。何かが、囁いているかのよう。

「アオバ」の事を考える。

彼女の肉体を、めちゃくちゃに破壊してしまいたい。

ぐちゃぐちゃに解体して。細切れにしまいたい。

傷、傷、傷、傷。沢山の傷を彼女に深く付けてやりたい。

もはや、アオバはただの人形ではなかった。

まるで、自分自身の子供のよう。

子供だから、愛し過ぎて、傷付ける。

アオバは生きている。少なくとも、マゼンダにはそう映った。

大量のぬいぐるみや、小さな人形達の中で、アオバは女王として君臨しているのだ。

アオバは、マゼンダの中の大きな何かなのだ。聖なるもの、と言うべきなのだろうか。

頭の中で、仕事上の事が再生される。

何名もの男達に嬲られる自分。

動物のような体勢になって、色々な男達の精を受け入れる。

死の時間。ずっと、ずっと、死の時間。

自分は、何度も何度も、殺され続ける。

昨日は、肉体のこの部分が死んだ。今日は、身体のこの部分が死んだ。少しずつ、少しずつ、生きている肉体が死んでいって。いつしか、死は身体全てに満ち溢れていく。

自分が嫌いだ。大嫌いだ。

しかし、嫌えば嫌う程。楽になっていく。自分自身の否定こそが、自分自身の肉体と、現実と、存在の否定こそが。彼女を楽にさせる。

そういえば、と。

彼女は思った。

爆弾でぐちゃぐちゃになり、火傷でどろどろに溶けた写真集を見た事がある。

あれは、自分なのだ、と思った。

自分の肉体は、とうの昔に腐乱して、焼け爛れて、すり潰されて、細切れにされているのではないのか、と。

そして、腐った死体として生き続けているのではないのかと。……。

……涙が出ない。

涙は何処に行ったのだろう。

代わりに、彼女はアオバの両目に、赤いマジックで線を入れる。

血の涙だ。

また、少し、落ち着く。

以前、こんな事をライフに行った事がある。

ふと、クラシック・バーの綺麗なメロディーを聞いている時に、口に出してしまった事。

何で、こんな事を言ったのか、自分でも定かではない。

そう。

死にたい、と言った。

ライフの前で。

何で、その言葉が、口から出たのか分からない。

すると、自分よりも十数年も年上の彼女は、両目に沢山の涙を浮かべて、そして、ぽろぽろと泣き始めた。涙の粒が、雪の結晶のように見えた。あるいは、ビー玉みたいだな、と。

最近、よく見る夢。

自分自身の皮膚が、内臓が、顔が、少しずつ、少しずつ、削ぎ落とされていくかのような夢。死。

自分は生きているのだろうか。それすらも、分からない。

何も、分からない。

思考が、壊れてしまったんじゃないか、って思う。

……………。

ごめん、ライフ。

私はあなたが嫌いだ。大嫌いだ。

私の中に、こんな感情を生んでしまう、あなたが嫌いなんだ。

頭の中で、今すぐ消えてくれって思った事は、幾度となくある。

……………。

自分が壊れた機械だったら、どんなによかったらう。

あるいは、自分が物言わぬ壁だったら、どんなに楽だった事だらう。

自分が全て悪く、自分を嫌い続けていれば、楽になれた。

でも、ライフはそれを赦さない。

マゼンダに、貴方は可愛い、と言ってくれる。貴方は、いい子だとも。

言われれば、言われる程、とてつもなく苦しくなる。……。

……………。

よく、人形みたいな、という言葉があるが。それは違うと思う。

人形みたいに可愛いだとか、人形のように無感情だとか。

でも、それは絶対に間違っている。

人形の綺麗さに、人間は近づく事さえ出来ないし。人形はいつだって感情的に語り掛けてくれるものなのだ。

人形には、命がある。

アオバが。可愛い人形が綺麗で、綺麗過ぎて。

彼女の感情をそのまま、言葉にしてくれる。

まるで、アオバは彼女に向かって語りかけてくれるかのよう。いや、きっと、アオバは何度も彼女と話してくれただらうし。

.....言葉が欲しい。

目の前に、真っ青な砂浜が浮かんだ。

その中に入りたい。海の中に足を踏み入れて、魚達と一緒に泳いでいけたら。そうやって、私は海と一つになるのだ。手も足も、全ては海と一体化していく。

全て、波になれたのなら。

どんなに優しいのだろう。

自分の全てが、透明な蒼に溶け合っていく。自分の皮膚が肉が顔が、魚達に食べられ続ける。彼らの一部となる。自分は海へと散らばっていく。自分は世界に広がっていく。そうすれば、世界中を旅する事が出来る。

十

花鬱はあの少年の見舞いに行くといった。

病院。

ツインも、彼女に付いていった。

病院で働いている医者や看護婦達は、やはり何処か使命感を帯びている。プライベートなど、裏では色々、やっているのかもしれない。けれども、やはり命を助ける、という職業に対しては、何かしかの後ろめたさを感じる。.....

ツインはその為か、居心地が悪かった。

自分は、他人の人生なんて、何とも思っていない。分かっている。

けれども、花鬱に付いて行っている。

いつもの階。

いつもの病室。

彼はそこにいた。

車椅子に乗って、窓の外を見上げている。

見舞いの品として、沢山の漫画雑誌が積み上げられていた。

彼は特に、スポーツ漫画が大好きだ。

彼は花鬱が襲撃したマフィア達によって、手足を切断された少年だった。

今は少年ではなく、成人を迎えている。

両手両足の義手義足にも、少しずつ、慣れてきたらしい。

「やあ」

花鬱は言う。

「あ、お疲れ様です」

青年は明るく笑った。

花鬱は、見舞いのガーベラの花と、果物の入った籠を置く。

「俺、英語とコンピューター勉強しようって思ってるんです」

彼は笑った。

以前よりも、明るい笑いだった。

彼は、昔よりも幸せだと言う。

ドラッグに手を出していて頃よりも。……………。

光を信じて。生きている。

花鬱は、青年と親しげに色々な事を話していた。

勉強は少しずつ、はかどっているという。でも、どうしても、気が散りやすく、漫画に手を伸ばしてしまうという。その後、自己嫌悪に陥って、また頑張って勉強に打ち込むのだと。

花鬱は笑った。

頑張っってね、と青年に言う。青年は微笑する。

ツインは分からない。

貧困国は本当に、悲しい国なのだろうか。切り取られた映像、編集されたストーリー。本当は、色々な幸せが存在する筈なのだ。よく、アダルト・ビデオを病的に観る。映像は編集されて、行為をしている、犯される女達はとても気持ち良さそう。でも、ツインはその裏側も知っている。ツインの友人の一人だった、あの手のビデオの女優。仕事の事を思い出して、頻繁にフラッシュバックに陥って、向精神薬を過剰摂取して、死んでしまった。

ツインの病的な映像に対する固執は、きっとこの世界の何か、裏側を覗き見たいものがあるのだろうか、と。家には、またDVDが積み上げられている。スナッフ・フィルムばかり。それでも、それを観ずにはられない。

……………。

何もかもが、嘘と欺瞞。

ツインは、つねにそう思っている。

けれども。

嘘と欺瞞でもいいと思う時。

それは、花鬱と一緒にいる時だ。

「ツインさん」

青年は言う。

「また、綺麗になりましたね」

ツインは気恥ずかしく、笑った。

メイクも、適当なのに。彼は、優しい。

何で、こんなに優しいのだろう。

生きる事。何を比べればいいのか、分からない。

青年は言う。今は幸せなのだ。

……五体満足で、荒んでいた頃よりも、幸せなのだ、と。

勿論、何かしらの障害を負ってしまった者で、彼みたいな笑顔を見せない人間だって多くいる

。

生きる事って、何なのか。ツインはまるで分からない。

どうすればいいのか。

だからこそ、花鬱に付いていく事にしたのだ。それが見つかるのだと信じて。

十

甘名は女が嫌いだった。

嫌い、というか気持ち悪い。とても不快な存在としか思えない。

卑猥な言葉。卑猥な感情。女はいつだって、そうだ。

余り、同性の気持ちは分からないが、十代の半ば頃、ある女性ばかりの施設で暮らしていた為、思春期の隠す気の無い、露となった女の性欲を目の辺りにして、女性というものが強い異物となって映った。

その施設には男が殆どいなかった為、甘名は彼女達から好奇の視線を向けられた。

まるで、奇形を見るような眼。

甘名は屹然とした態度を取った。

決して、誰にも触れさせなかった。

それと同時に、かなり陰湿な虐めも受けた。

どちらが女の本性なのだろう。

不信感、嫌悪感は肥大化し、攻撃性へと変わる。

甘名の性嫌悪は、女性が原因だった。

男として生を受けて、少女装。ゴシック・ロリィタ・ファッションに身を包むのは、それが強い理由になっているのだろうか。分からない。今の自分ではそれを解明出来ない。

いつか、自分なりの解答を手に入れる事が出来ればいいと思っている。

自分の人生とは、一体なんなのだろうか。……。

特殊なものは、元からだった。

……………。

彼の母親は、女優をしていた。

それなりに、テレビにも出ていたらしい。余り、母親の事は興味が無い。父親は、何度か変わった。再婚の繰り返し。

幼少期の彼は、母親の存在に押し潰されそうになった。

母と自分は、とても顔立ちが似ていた。

恐ろしい事に、母よりも自分の方が容姿がいい、と言われた事もある。

おぞまし過ぎる事だ。

母親の華やかな洋服の数々。

家の中に並んだ服の数々。彼女は俳優の仕事もしていた。

家の中に、何処かの事務所の人間やインタビュアーと称した人間達が入ってくる。

幼い甘名は部屋の中に隠れた。お子さんの紹介、と言って見られたくない。テレビ画面の好奇の視線に晒されたくない。

だから、彼はテレビ局の人間を拒絶した。母親に陰を向けて、スクリーンを拒み続けた。

家の中に大量に積まれているファッション雑誌。どれも嫌いだった。

そんなファッション雑誌に飾られている、お綺麗な顔をしたアイドル達も大嫌いだった。

だから、彼はそんな母親や、何度か入れ替わる父親に反抗する為に、部屋の中に引き籠もった。母親が大好きな漫画雑誌ではなく、小説、古典文学の世界へと嵌っていった。

音楽も、母親の友人達が、それなりに名声のある歌手などもやっていた為、毎日、家の中ではテレビでも流れるポップスが響いていた。

それに反抗するかのように、彼はクラシックのCDばかりを集めて聴いていた。

最初はそれほど好きではなかったが、穏やかで、時として破壊的でさえあるクラシック音楽は、彼の心を癒し。より一層、孤独にさせた。

彼女に対する反抗。女に対する反抗。

だから、自分のやっている事は“女装”ではなく。“少女装”なのだ。勿論、本当の少女がこんなイメージではない事も知っている。それでも、彼は服を着る。世界に対する敵意を現す為に。

彼のファッションには、思想がある。意志があった。

甘名の根源は、きっと母親にある。十代の終わり頃に通った精神科。カウンセリングも受けた。精神科医も、精神分析医も、そう言っていた。けれども、そんな彼らの幼稚としか思えない言葉じゃなくて。自分自身の言葉で、自分自身に解答を見出したい。

そうだ。彼は他人が嫌いだった。今でもそうだ。

学校も大嫌いだった。疎外感。強い妬みに晒される。

男子からは肉体的な虐めも受けた。

だから、小中学校の頃は、もっぱら女子と友達になったりした。けれども、すぐに気付けば友達を止めている。

けれども、数少ない友人。

女友達の中で、唯一、ずっと親しげにしてくれたのが、否睡だ。

彼女はどうも、施設で生きているらしい。相当、複雑な家庭環境らしいが、それでも、いつも楽しそうだった。何がそんなに楽しいのか。

聞くと。前の親には捨てられたのだと言う、文字通り、本当に捨てられた。

事件レベルの捨てられ方をした、と。

詳しくは、聞かなかった。聞けなかったし、興味も無かった。

そして、そんな事は関係が無かった。

中学校の頃、彼女はよくヴィジュアル系ミュージシャンの雑誌を手にしていて。それから、ゴシック・パンク系の雑誌も読んでいた。

甘名はそれを借りて、読んだ。

.....天啓だった。

雑誌に載っているゴシック・ロリィタ・ファッション。

数日して、その筋の店に寄って、買い揃えた。

小遣いは、毎月、持て余すばかりの金額を与えられていたので、多少高いそれらの品を一日で何着も買い揃えた。

そして、彼のそんな格好を見て、気に留める人間など殆どいなかった。似合っていたからなのだろう。それから、嫌いだが、頑張って母親と接触して、メイクの仕方も教えて貰った。

否睡には、色々な小説を貸した。そのうちの中で、耽美や猟奇をモチーフにしたものに彼女は惹かれて、嵌っていった。

甘名は代わりに、彼女から大好きらしいヴィジュアル系のCDを借りた。色々な種類の奴を借りたが、甘名が惹かれたのは、もっぱら、自分が聴いているクラシック音楽をコンセプトに演奏をしているミュージシャンだった。

.....

ただでさえ、異端極まり無い人生だった。

そして、否睡と関わって、ドーン、能力者、この世界の裏側。この世界の隣側の世界。

それらを知って、更に彼の人生は異端のモノへと変わってしまった。

逸脱したものへと。

ずっとずっと抜け出したかった世界。

ずっとずっと、飛び越えたかった世界。

消えたかった。飛びたかった。いなくなりたかった。何処かへと。

しかし、何処まで行っても、世界の外側には行けなかった。.....

それから、彼は小説を書いた。書き続けた。

内容はファンタジー。現実の世界の物語なんて、決して書きたくなかった。元々、他の人間から見れば、彼は非現実のような世界で生きていた。でも更に、その非現実さえも彼にとっては現実でしかない。

だから、この世界とは徹底して違うファンタジー。剣や魔法。神や魔王。

理想の世界を築こうとした。ああ、そうだ。

翼が欲しい。それも真っ白な翼ではない。

真っ黒に塗られた、鳥の羽。

黒い翼。

黒い翼が背中から、生えてこないだろうか。何処までも飛んでいける闇の翼が。

頭の中が、真っ黒になる。

多分、これは憎悪という感情。あるいは敵意という感情。

物凄い、前向きさ、明るさを強要される事の苦痛。更に、それに対して敵愾心が生まれてくる

。

気付けば、いつの間にかそれを神性なものとして捉えている。

それと同時にだ。

自分は孤独なのだと思った。寂寥感が湧き上がる。分かり合えない言葉。

十

今日もハードだった。

男達の欲を全身全霊で受け入れる。

もう、顔を思い出す事が出来ない。

体格などで、どうにか判別する事が出来るのだが。

それでも、男達の顔を思い出す事が出来ない。幾度となく会っている筈なのに。もう、誰が誰だか分からない。なんだろう、男という一つのイメージとして広がっている。

とにかく、自分の身体を破壊していく真っ赤な死、そのもの。

自分は、今、何処にいるのかまるで分からない。離人感。

恋愛がしたいな、と思った。

大切にしてくれる男の人。

そんなの、いるのだろうかとも思うけれども、そんな男の人が欲しい。

守ってくれる人。

汚い男と、綺麗な男。それが二つのイメージとなって混ざり合う。

でも、綺麗な男には裸が無いのだ。彼はいつも服を着ているし、彼女を優しく撫でてくれるだけ。そしてとっても、美形で。彼女に決して暴力を振るったりしない。いつも、笑い掛けてくれる。

優しく、顔と髪を撫でてくれる。

コンビニや、ビデオ店の近くを通り掛る度に吐き気と眩暈を覚える。

自分があるんじゃないかって、自分が映し出されたものがあるんじゃないかって。

実際、あるのだろう。怖い、怖い、怖い、怖い。……………。

それでも、食事を取らなければならず。

コンビニに行く時は、いつも帽子を目深く被って、買い物を済ませる。

男の店員だったらもう駄目で、必ず女の店員が接客している時に買い物を済ませる。

……………怖い。とてつもなく、怖い。

視線。

視線が怖い。

仕事場に向かう度に、コンビニに向かう度に、男達の視線が怖くて服は厚着で、帽子は目深く被るようにしている。

けれども、仕事場から帰った後は、放心したように家に辿り着く。

そして、アオバの顔を見る、彼女はいつも笑い掛けてくれる。とても悲しそうだけれども、笑い掛けてくれる。

最近、思う。

これ以上、アオバを傷付けては駄目だ、と。……………。

仕事帰りに、沢山の紙粘土を買った。

ぺたぺたと粘土をこねて、人形を作っていく。

笑っている顔がいいな。怒っている顔もいい。でも、なかなか、巧く創れない。

アオバみたいな可愛い人形を作れない。それでも、作り続ける。

人形って、どうやって作るのだろうか？

マゼンダは、彼女を友達だと思っている、生きているように接したい。

彼女はアオバにキスをする。

それは、まるでとても神聖なものに対する誓いの言葉のようで。

あるいは。愛の言葉のよう。

まだ見ない、理想の男の人。

きっと、彼は必ず彼女に優しい。

決して、傷付けぬように。

いつも、優しい言葉を投げ掛けてくれる。

いつだって、彼女を好きでいてくれるのだ。こんなに汚い彼女を。

.....愛されたい。

たった一つ出てきた言葉。

それ以上は何も望まない。

欲しいものも、考えられない。

愛情は何処に向かえばいいのだろうか？

一体、どうすれば、愛されるのだろうか？

私はいない。私は何処へ行ったのだろうか？

昔の事を思い出す。母の記憶。抱き締められた事をきっと覚えている、覚えているけれども、忘れていて。どんな言葉を交わしたのだろうか。私はいい子にしていたのかな。いつから、父に愛想を尽かしたのだろうか。

真っ赤な闇のよう。

唐突に、アオバの全身に付けてしまった傷を見て、とてつもなく悪い事をしたような気がした。包帯を探さなければならないと思った。包帯、コンビニに行って買ってこなければ。

包帯を、アオバに巻き付ける。けれども、また彼女を切り刻むのだろうか。包帯を剥ぎ取って。

そういえば、最近、何を口にしたのだろうか。カロリーメイトと水ばかりを口の中に流し込んでいるような気がする。たまに、ライフが奢ってくれる。それ以外は、何を食べたのだろうか。痩せるのはいい、けれども痩せ過ぎても、また監督に怒鳴られる。

自分自身が何処にも無い。.....。

そういえば、私の借金は後、どのくらいだっけ。全部、返せるのはいつなんだっけ。

でも、返し終わっても、仕事が無いって聞く。

じゃあ、私はいつになったら、出られるの？

十

あの日から、鏡に別人が映る。

自分であって、自分で無い女。

あの日記帳の事を主人に問い詰めたい。彼女は誰なのだ、と。そして、私は何なのだ、と。偏執的にその事ばかりを考えていた。

ズレ始めている。どんどん、どんどん、浸食されていく。

彼女は一体、誰なのだ？

私なのか？ 本当に。

分からない。分からないなりに、答えを導き出そうとしている。

考えているのは二つのケース。

ミスティは以前の記憶を封印しているか、消されている。そして、彼の最愛の恋人として生きている。

もう一つは、彼女はあの「ミスティさん」と同じ顔形をしているが、本当に別人なのだ。

.....

出来れば、後者であって欲しい。

あの日記帳、記録帳。それから、挿まれていた写真は今や彼女の部屋の中にある。

ミスティは、自分と同じ顔の女の写真を何枚も何枚もコピーして、それを大量に広げては、一枚、一枚、刃物でズタズタに切り裂いていく。死ね、死ね、死ね、死ね、と。

「ストーカーの何が悪い.....」

情念の言葉を吐き出す。

この女が憎い。余りの嫉妬心に焼き焦がれそうだ。

この女が、数年もの間、自分の主人を虜にしていた事が赦せない。

ミスティなら、彼の為なら、何だってやる。それをこいつときたら.....

ご主人はいつもミスティに優しくした。いつも気遣ってくれる。ひょっとしたら、日記帳と記録帳は彼の創作物なのかもしれない。そんな希望を抱く、けれども不安を押し殺せない。

鏡の中に別の自分が映る。そいつはミスティを嘲笑っている。

同姓同名の別人なんだ。

そうとしか思えないし、そうとしか思いたくない。

彼と一緒に過ごして想う事。それは永遠だ。何処までも続く地平線のように。世界との調和。優しさ、温もり。愛。全て。これ以上の幸福など有り得ない。

このまま、自分が消えていくんじゃないかという不安。

砂のように、風に吹かれていくんじゃないかという不安。

頭の中で、彼の全てを支配したいという感情に襲われる。

彼の顔。目鼻。髪の毛。耳。喉仏。鎖骨。胸板。肩。肘。手首。爪。

彼の全てが遍く、愛しい。

何度でも、何日だって、彼と一緒にいられるし。何時間でも、何日でも、一緒にベッドの中で添い寝する事が出来る。それは天国だ。楽園なのだ。彼の温かい胸。温もり。

他の女に、感情が行っていた、という事がもうどうしようもなく、赦せない。

お前は、私じゃない。

彼女はザッシュ、ザッシュ、とナイフで、自分の顔写真を抉る。抉る。抉る。

そして、小さく悲鳴を上げた。

私は誰なんだ。と。

その後、呻き始める。

自分の脳の中を、引っ掻き回したいような気分。

自分が自分では、なくなっていく。

まるで、自分自身の分身を追っているかのような気分。

分身に、まるで追い付けない。

本当の私は、一体、何処にいるんだ？

何処にもいないのかもしれない。

消失してしまったのだ。

そう。そうなんだ。

あの日記帳、記録帳は、きっと全部、嘘なんだ。嘘に決まっている。きっと、自分の主人が戯れに作った物語。そうに決まっている。けれども、あの日から、自分は変わってしまった。全てが変質していくかのような。私は、一体、何処に行ったのだろうか？ 私は私に為れない、私は一体、何処に消えたのだろうか？ それでも、主人と会うと、普通に笑みを浮かべて、普通に心の底から彼を愛し、炊事洗濯をしっかりとこなしている。

自分自身が分裂していつているかのような感覚。

どんどん、どんどん、世界がズレていくかのような。

自分の中で、新たな自分が生まれて、それが二つに分かれたがっているかのような。

自分が、真っ二つに引き裂かれていくかのような。

鏡の向こう側にいる自分に。

大きな斧を突き立ててやりたい衝動。

刃物では駄目だ。刃物では小さ過ぎる。

斧みたいな、がっしりとしたもので、自分自身の顔を破壊したい。

衝動。

十

昨日の悪夢がまだ終わらない。

甘名は頭痛と共に目を覚ます。

眠りに入ろうとしたが、眠れず。びっしょりとした寝汗で起きた。肉体が不快だ。

睡眠薬で再び、眠りに入ろうか。でも、また駄目だろう。

女性恐怖症なのだろうか。分からない。性、嫌悪症……。

覚えているのは。

女達の嬌声。

自分が一体、どのような施設に入れられたのか分かった。

自分の容姿。母に似た顔立ち。身体付き。

此処は、女の暗殺者専用の訓練施設だ。

身寄りの無い女達も多かった。彼女達は思春期特有の性欲を持て余している。

甘名を、この施設に投入したのは、組織側の一つの実験でもあった。
舞踏をベースにした体術を操って、人を殺害する刺客専門の施設だ。
否睡と仲良くなった事によって知る事になった、裏の世界。
後に、その組織は潰れてしまうが。
その組織に所属していた事が、彼の人生の歯車を大きく狂わせる事になった。
女同士での、交じり合い。
甘名は自分がどうしようもなく、男性であるという事が気持ち悪かったし。
同時に、女性の気持ち悪さも、どうしようもない程に知ってしまった。
女同士の性の在り方。
今からすると。
組織はそれすらも、実験していたのだと思う。
後で、本で読んで知ったのは。女子刑務所があの施設に近かった。
女子刑務所では、女達が獣のように性欲を持て余し始める。
怖い。……。
触れるな、と思った。
視線。……女達の視線。
甘名が男である事は、徐々にバレていった。
そして、訓練によって鍛え上げられた女達よりも、甘名は力が弱かった。
支配する者と支配される者の反転。
通常、男は女を押し倒す。けれども。
体格の良い女、リーダー格の一人である女に、無理やり押し倒されそうになった。これから、
何名かの女達に無理やりやられるのだろう。
何とか、力を振り絞って逃れた。
筋肉も未発達だったが、男の肉体としての力が少しだけ、勝ったのだと思う。
怖かった。……今でも、怖い。今でも、夢に見る。……。
勿論、全員、そのような女達ばかりだったわけじゃない。
貞操を守り通せたのは、奇跡だ、と思っている。……。
しかし、虐めは酷く受けた。
異端だと理解されたから。
しかも、甘名は誰にも媚びなかったから。
裏で沢山の陰口を言われた。食事の中に虫が入っていた事も多い。
組織での訓練は、三年くらい続いた。ちょうど、高校の代わりみたいなもの。
それから、しばらくの間。女性恐怖症が続いた。
それを克服出来たのは、ひとえに否睡がいたから。
彼女は、少し性同一性障害の臭いがする。本当は男になりたいんじゃないのか？ と訊ねた事
がある。私は今のままでいい、と答えられた。
それから、否睡は否睡で、別の組織によって人体改造を受けたらしい。

女である事が無くなった肉体になった、と。
子供は産めないし、性行為も出来ない肉体になった、と言われた。
全身がだるい。
頭の右脳を潰してしまいたい、感覚。
自分も性に対する欲望を持っている。けれども、それが不快で仕方が無い。
頭を握り潰したい。肉体を消してしまいたい。
触れられたくない。
視線。視線。彼女達の頭の中が怖い。気味が悪い。
何を思われているのか。
女も欲情の塊なのだと、彼は知る。
中学に通っていた時、男の欲情は気持ち悪いな、と思っていた。
けれども、施設に入って、女の欲情を目の当たりにして。本当に吐き気を覚えた。
裏で、男役の同性を見つけて行為を楽しむ。そんな奴らがいた。
思春期特有の欲望を、敢えて異性に向けさせない実験。きっと、それも入っていたのだろう。
武術としての暗殺以外にも、そういった歪みを、組織的に作り出したかったのだと思っている。
いわば、フリークスを意図的に作る実験。精神的なフリークスを。
それにしてもだ。
自分の少女装は何処から来るのだろう。
分からない。
母親に対する、反抗。
あるいは、思春期の頃への反抗。
あるいは、男にも女にもなりたくないから。
分からない。けれども、自分はそうやって生きている。
思春期の頃に育った場所が、一般の人間から見れば、ファンタジーのような場所だったから。
甘名は更に、徹底したファンタジーを求めた。
それは、小説を書く事。
剣や魔法。そんなものが登場するファンタジー。
自分の分身達は、自分の下手糞な小説の中で動いていった。
.....大切な友人なのだ。彼だけの友人。
不整脈のように、胸が鳴り響く。
昔の悪夢が、まだ消えない。眩暈がする。
あるいは、込み上げてくるような吐き気。
ベッドの中に、うつ伏せに眠る。
背中が重い。何かを背負っているのだろうか。何を背負って生きてきたのだろうか。
背中が裂けてしまえばいい。裂けて、背中から翼が生えればいい。
それは、真っ黒な翼だ。
飛びたい、鳥のように。

此処ではない、世界へ。

何処かに、飛んでいきたい。

何処までも、何処までも、遥か高くに。

眼が覚めた。

携帯の音で、眼を覚ましたらしい。

否睡からだ。

.....

どうやら、浮遊城からのヘリが降りてきたらしい。

予想した日よりも、ずっと早い。

「すぐ向かう」

彼は携帯を切った。

十

分かっている事はただ一つ。

どんな過去と経緯があれ。

私をご主人様を愛している、という事実。

それだけは、真実なのだ。

他の真実なんて、何もいない。

それだけでいい。

一体、真実にどれ程の意味があるのだろうか。

きっと物語の解釈の仕方は幾らでもある。

だから、私は私の物語を好きなように作ればいいし、間違っていたとしても、捏造でも何でもすればいいんだ。

人を愛するという事。

それは、ありのままに人を愛する事だ。

それ以上は、何も考えない。

ただ、愛する人の為には、無償の愛を注ぐ。それだけでいい。

ミスティは自分の主人の為に、今日も手料理を作る。

大量に取り寄せた料理の本。そうだ、今日はシーフード・サラダを作ろう。ドレッシングは彼の好きなヴィネガーに海老を細かく刻んだ奴。苦手だった、マカロニグラタンも巧く作れるようになりたい。そういえば、この前、焼いたクッキーにピーナッツとドライ・フルーツを混ぜて入れたら、とても美味しいと言ってくれた。

いつもの生活。

ずっと続けたい。

否睡と甘名は浮遊城から降りてきた、ヘリコプターへと向かった。

ヘリは、頭の無い機械人形が動かしていた。

人形達は、まるでプログラムされた通りに、精密に動いていき、街などで買い物を済ませていく。

二人は、ヘリの中に乗り込んでいた。

ヘッド・レスが運転している。運搬席に入り込んだ為、気付かれていない。

大体、数十分くらい掛けて、ヘリは浮遊城へと辿り着いた。

二人は、ヘリから降りる。

彼らは部外者だ。

本来は、此処にいてはいけない者達だ。しかし。

景色に見惚れた。

浮遊城には、美しい庭園が広がっていた。

大理石の彫刻も並んでいる。

まるで、幻想の楽園のようだな、と思った。

大切なものを閉じ込めた、大きな鳥籠のよう。

鳥籠か。

鳥籠の中の鳥を決して逃がさない為のもの。

中のものの封印して、決して外に出さない為のもの。

此処から見える景色はとても綺麗だ。

青空に一番、近い。

雲がたゆたうように、浮かんでいる。おそらく、街の地上に生きている者達は、この空の青さなど、気にも留めないのだろう。白と蒼のコントラストが、何処までも美しい。

様々な草木と、色取り取りの花々が咲いている。

花の中でよく目立つのは薔薇だ。薔薇にも様々な種類がある。しかし、美しい花をイメージする時、人間は薔薇を喚起するのだろうか。

大気が澄み切っている。

空。

何処までも広がっている空。

鳥が飛んでいる。

広漠。全てが無垢だ。

時間が、止まっているかのよう。

しかし、この浮遊城の地面を見下ろす。

何故だか、此処は何処にも行けない窮屈な檻のように見えた。

まるで、鳥籠の中にいるかのよう。

空を夢見る小鳥を彷彿させる場所だ。

とても、安らぐ場所だ。この情景、独り占めにしたい。

さてと。

屋敷の中に突入しなければならない。

屋敷というよりも、城だった。

中世ヨーロッパの城を彷彿とさせる。

大きな城門。

それを飛び越えて、中へと入る。

何名かの、能力者がいるかもしれない。そういえば、浮遊城の周りに、重力の結界を張り巡らせている奴がいる筈だ。

もし、そいつが自在に重力を操作出来るならば、かなりやっかいだ。

「この中にいる者達を始末しないとイケないんだよな」

甘名は呟く。

「どうしたんよ？」

否睡は訊ねた。

「此処に住んでいる奴は、小鳥みたいだな、と思ってさ……」

韜晦を含んだ言葉。

その内容を、相棒は理解しないだろう。

十

城の中は、やたらと広くて、敵が何処に潜んでいるのか分からなかった。

正直、実戦の経験は乏しい。

実際、花鬱が敵の襲撃にあって、適切な行動を取れたのは、相手が直感的に、女だろう、と理解したからだ。女の策略。そのようなものを感じ取ったというか。……。

甘名は否睡の顔を見る。

もし、城の中にトラップが仕掛けられていたら。

あるいは、強力な能力者が潜んでいたら。

どうやって、対処すればいいのか分からない。

否睡に、困になってもらう事くらいしか考えていない。

甘名は少し、自己嫌悪に陥る。行動が早過ぎたかもしれない。

出来れば、城の地図が欲しかった。

自分自身の能力をもっと、巧くコントロール出来れば……。

ぼんやりと、空間の中に図形が広がっているイメージ。

自分の頭の中に、図形が広がっているイメージ。

自分の能力には、それが可能である筈だ、と思った。

『フェンリル』の力。これが、どういう力なのか、色々と考えた。

飛んでいける力なんだと思う。

飛ぶ為には、着地出来る場所が必要だ。

否睡は楽しそうにはしゃいでいた。まるで、ピクニックにでも来たかのような趣。実際、彼女にとって、こういう事をするのは、道楽に近いものがあるのだろう。

自分の死に対する恐怖だとか。人を殺す事に対する恐れだとか、そういうものを感じない。ある種の無垢さがそこにはある。

十

「花鬱さん、ですね」

その女は、髪の毛をブラウンに染めて、地味めのブラウスを着ていた。

よくよく見ると、ブランド物の服だ。

「うん？」

花鬱とツインは、道でも訊ねてきたといったような、その女に少し面食らった。

今、実質、戦闘中といってもいい所だった。

否睡と甘名は、浮遊城へと向かったみたいだ。

花鬱達は、ズンヴィー達の襲撃に備えていた。

.....その女は、名刺を差し出す。

「私、『アーテリー』という店で働いている、ライフっていいです、あの単刀直入に言いますね、大丈夫でしょうか？」

二人はますます、困惑した顔になる。

「私、マフィアに狙われているんです。だから、助けて欲しい.....。お願いします.....」

しばらくして。

三名は喫茶店に入った。

花鬱とツインは、ライフから経緯を聞いていた。

どうやら、彼女の友人が薬物をやっていて、止めさせようとしたら、薬物を売っていたマフィアが絡んできたのだという。

ライフは完全に困ってしまって、頼みの綱として、花鬱の噂を聞いて、訊ねてきたのだという。

状況が状況なのだが、こんな時、断れないのも、花鬱の癖だった。

芯が強いが。どうも、他人に対して面倒を見てしまう。そんな性格。

薬物の売人は、あるクラブにいるという。

そこまで、一緒に来て欲しいとの事だ。

二人は、ライフに付いていく。

クラブは、夕方から開店しているみたいだった。

花鬱は、そこに入る。

店員は、スタンプを差し出す。

頭に押したスタンプを確認しさえすれば、このクラブは出入り自由なのだという。

まず、ライフが、頭にスタンプを押される。

花鬱は立ち止まっていた。

そして、しげしげと、クラブの中と、店員の顔を見つめる。

「あのねえ。ライフ」

花鬱は、少し冷えたような声で言った。

そして、おもむろに、彼女の腕を捕まえて、店の外に出す。

ツインは困った顔をしていた。

ライフは冷や汗を流す。

「スタンプは普通、手の甲に押す。頭と違っておかしいわよ。……それに、あの店員、カタギじゃないでしょ？　どんなに隠しても、臭いで分かる」

花鬱は、こんこん、と額に指を置く。

「あたしが恨まれている事は知っている」

先日、パチンコ店での襲撃を思い出す。もし、あれが無ければ、違和感や不自然さを感じても、そのまま気にも留めなかつただろう。

敵は、正体不明の攻撃を、スロット・マシーンに仕掛けていた。パチンコ店の店長などに確認した処、完全に原因は不明だという。

少しの異常にも敏感になっている。

だから、今回の危機を避けられた。

「ライフ、あんたの背後にいるのは、マフィアかい？　それとも……」

「ごめんなさい」

女は、か細い声で言った。

「クラブに連れてくるように言われました。花鬱さんを、……」

花鬱はあんまり、頭を使うのが得意ではない。

しかし、本能的に察知したのだ。

あのスタンプ……能力者からの、何らかの攻撃のスイッチだ。……。

十

カサネの『ストーキング・ヒッツ』が破られた……。

ライフは心の中で舌打ちしていた。

暗殺に成功する筈だった。

当初、これを目論んでいた。

逆に言えば、マフィア達を味方に付けたのは正解だったかもしれない。

カサネの能力、それは。

カサネの血液を注入した、マジック・ペンなどによって、攻撃する対象の肉体に印を付ける。

その後、対象の写真に、印を付けた部分に同じペンで印を付ける。

その後、刃物でも銃でも何でもいいのだが、写真の部分を貫く。

すると、そのまま、その対象にダメージが送り込まれて、暗殺する事が出来た。

まさに、呪い殺す能力なのだ。

このまま、花鬱の頭蓋を拳銃で吹き飛ばすつもりだった。

それも、遥か離れた場所からだ。

しかし、駄目だ。簡単に見破られてしまった。やはり愚行だったのだろう。不自然だったのだ。頭の中が視野狭窄を起こしているんだ。もっと、巧妙に自然に戦略を練り上げるべきだったんだ。

今度は、どうするべきか。

もう、顔も知られてしまった。

後戻りは出来ない。

どうやりすごそう。

いや……何とかして、始末、しなければならない。

カサネの所属している、花鬱に恨みを持つ組織がまともに手助けしてくれるとはとても思えない。

……刺し違えても、だ……。

不安が頭を過ぎる。

自分に、出来るのだろうか。……。

「駄目ですかね」

花鬱と一緒に付いていた女が、突然、言った。

適当に髪を梳いて、適当にナチュラル・メイクを施した女。

まあまあ、綺麗だけど、ぱっとしない顔立ちの女。

そいつは言う。

「駄目ですかね。その組織の奴、全員、皆殺しにするの」

ライフは頭の中が、一瞬、真っ白になった。

花鬱が眼を閉じる。

「止めておきな」

彼女は額に手を当てていた。

「でも、簡単じゃないですかね。全員、殺しちゃいましょうよ。花鬱さま、そうすれば、彼女の悩みもなくなるんじゃない」

ライフは絶句していた。

この女……本気で言っている。

「私がやりますよ。あなたの舎弟として」

「……………駄目だ。ツイン、後悔する、あたしみたいに。お願い……」

ツインは少し、寂しそうな顔をした。

そして、とてつもなく、やるせなさそうな顔だった。

ライフは頭の中を整理した。

花鬱。敵は彼女だけだと思った……。しかし。

ひょっとして、こいつもヤバイのか……？

「それに、……殺す事はいつだって出来る。問題はその先よ」

「私は、花鬱さまみたいになりたいです」

「止めておきなって」

花鬱はキセルを取り出した。落ち着かなく、吸い始める。

「私も背負いたいんです」

女は押し殺した声で言う。

それを聞いて、花鬱は眼を見開いた。

思わず、彼女にむかって平手打ちをしようと腕を振り上げる。

しかし、腕を震わせながら、代わりに、彼女を抱き締めた。

「ツイン。ねえ、ツイン・スラッシュ。止めて、お願い。殺す事は、いつだって、出来るから。

あたしみたいになっちゃ駄目」

ライフは呆けたように、その光景を眺めていた。

思考がガタガタと、音を立てて崩れそうになる。

……私は、何で。彼女を殺そうとしているの？

思考停止し始める。

どうすればいいのか、分からなかった。

マゼンダ……。守りたい、妹のような存在。自分の押し付けがましい愛情を受けている彼女。

どうすれば、自分は花鬱のようになれるのだろうか？ そんな風に思う。

羨ましかった。気付けば、畏敬の眼で、花鬱を見ている。

何かが、へし折れるような音が聴こえたような気がした。

頼もう。……。

いつしか、涙が頬を伝わっていた。

マゼンダを殺さないでって。あの子を、あの場所から救ってって。

そして、私の代わりに、助けて上げてって。

愛情の向け方が分からない。……。

いつも、押し付けがましく思えるし。自分でも、おせっかいなんじゃないかと思っている。今回の件だってそうだ。

それに、第一。

完全な勘違いかもしれないのだ。

マゼンダが標的である事が。

そうだ。最近、仕事で疲れているんだ。そうに違いない。

大体、ライフのやっている仕事なんて。心的な病気との闘いでもあるのだ。客達の神経症的な病気を受け入れてやるのが、彼女達の仕事だ。だから、感化されて、心が少しずつ病んでくる。

この業界にいる女達は、みんなそうだ。

この業界の人間、水商売の人間はどんどん心が病んでいく。

現実と異空間、自らの性愛が何なのか分からなくなるからかもしれない。

花鬱はごそごそと、懐の茶袋から何枚かの写真を取り出す。

「ねえ、ライフさん。この中の四人、知らない？ 情報を探しているんだけど」
一人は知らない男。

ズンヴィーとフォールス・メモリーの写真もある。

そして、最後の一枚。

「いえ、知らないです。何ですか？ この人達」

「ああ、いいんだ。ちょっとね」

自分の思い違い、思い込みをどれだけ否定しただろう。

自分が妄想癖だったら、どんなによかったのだろう。

でも。

直観で確信していた。

最後の一枚の女は、ライフがよく知っている者だ。

マゼンダ・ヴェルベット……。

……花鬱の殺害対象は、やはり、マゼンダが入っている。

そう。

ライフは知っている。

マゼンダが何故、『ドーン』という組織にランキングされているかも。

彼女は被害者だけれども。

加害者でもあるのだから。……。

十

花鬱を殺さなければならない。

でも、花鬱と親しくなってしまった。……。

どうすればいいのだろう？

唇が、わなわなと。震えていく。

やっぱり、話に聞いた通りだった。

話に聞いた通り。

とても、……いい人だった。……。

どうすればいいのだろうか。

物理的に殺せるかの問題だけじゃなくなってきた。

自分の弱さに反吐が出る。

この前、自分は死のう、と思った。

大切なものを守る為に、死のうと。

産めなかった大切な子供。

育てたかった子。

名前も決めていた。

それなのに、産ませてくれなかった彼。

悔恨ばかり。

もし、産んでいたら、もっと優しくなれただろうか。

普通の仕事をして、家庭を持って、子供の誕生日とか祝って。ケーキを買って。プレゼントは何にしようか、考えて。

でも、……ひよっとすると、ネグレクトしていたかも。……。分からない。

人を、愛したい。大切な人を。……。

「大切な人を守る時って、どうします？」

訊ねていた。

着物の女は、困った顔をする。

「余り、守れないでしょうね……」

彼女は寂しげに言う。少し、自嘲気味。

「守りたい、って傲慢だろ、ってあたしは思うね。よく分からないけど。それ以上、難しく考えられないけど。あたしのエゴで生きているだけだから、他人守るって、何って思うね、あたしは」

ライフは身につまされる思いだった。

「嫌いな人間はどうするんすか？」

長いぼさぼさの黒髪の女が口を挟んだ。

着物の女は、また困ったような顔をする。

会話が一见、噛み合っていない。……いや。

……嫌いな人間も守るのか、と聞いているのだろう。

ツインといったか。この女。

さっきから、ライフと同じだ。

同じように、一人で何かを考えながら、彼女と話している。

十

ツイン・スラッシュは、観念の中で生きている。

頭の中に真っ赤な闇が降り注ぎ、突然、他人を殺してやりたくなる。

それは、道端を歩いている時、不快な男に会ったり。仕事していた時、店長から叱られたり。

たとえ、相手の方が正しくても、頭の中に真っ赤なものが降り注ぐ。正しいか正しくないかは、この際、関係が無く。ただ、衝動だけがあるのだ。

そもそも、相手が正しければ正しい程、正しい事を言われれば言われる程、ツインは相手を憎んだし、この世界そのものを憎悪した。

反吐が出る。

自分は最悪な人間でいい。下衆な女でいい。

そんな事ばかり、考え続けた。

いつも、ニヒルにしか物事を見られなかったし。そういう考え方しか出来ないんじゃないかって思った。

花鬱を慕ったのも、暴力の世界に魅せられた、という部分はあるのだろう。しかも、花鬱は女だ。男性的暴力は分かりやすい。反吐が出る。しかし、女性的な呪詛。それを求めている。何処かで、彼女は花鬱にそれを期待していた。

しかし、実際、会ってみると。かなりマトモに思えた。

そう、マトモだった。常識的な事を頻繁に言うてくる。

だから、最初のうちは困惑した。

けれども、不思議と落ち着いた。

彼女の言う事は、他の者が口にすれば、くだらない、腹立たしいと思ってしまうような事も、不思議と納得してしまう。

それは、彼女の内面からにじり出るものがあって、それが基盤となっているからだろう。

だから、彼女の言葉は強いのだ。

ツインにとって、世界の闇は観念だった。

フィルムの中の映像でしかなかった。

死と破壊と飢餓と病気。

それらを貪るように、眼に焼き付ける。

物心付いた頃からそうだった。

多分、家庭の問題。多分、学校の問題。どちらだったのだろう。今となっては、どうでもいい。ただ、今のツインはもう、どうしようもなく、空虚と観念の中で生きている。

頭の中で、映像がカラカラと回り続ける。

世界の全てが、芝居のように見えた。

自分の立っている場所が無くなるのではないかというような、離人感。

生きる、という事は。

今にも死にそうな餓死者から。

更に、食べ物を奪う行為。

そう。

餓死者や弱者の哀れみすらも。

自分自身の生の肯定へと、還元、回収される。

食卓に並ぶご飯。消化しようが残飯にしようが、貧困国にとっては等しく同じ。

人間は素晴らしく生きようが、心が病んで生きようが、貧困国にとっては等しく同じ。

自分達が優れている、という事に感謝の心を込めて生きる日々。

心の底から、反吐が出る。

もう、どうしようもないやるせなさ。

しかし、相反する感情。葛藤。

優しくなりたい。

あの青年を見ていて、思った。

義手と義足の青年。

彼を大切にする花鬱。

最近はクラシックが好きだと言う。穏やかな音楽が。

以前は、ヒップホップばかり好んで聴いていたらしい。

彼は世界を憎んでいない。

けれども、ツインは世界を憎んでいる。

彼は毎日が楽しいと言う。

ツインは毎日、何も感じずに生きている。

彼はとても美味しそうに、果物を食べる。林檎、バナナ、梨。花鬱がナイフを片手にくるくる、と器用に剥いて上げる。でも、彼は嬉しそうに笑った後、自分でも剥いてみたいと言う。義手で不器用に剥くけど、とても楽しそう。

羨ましい。……。

そして、その青年と花鬱と病室にいて、何故か思うのだ。

ああ、自分の居場所だ、と。……………。

……………。

ライフという名の女。

彼女は、一体、何の為に花鬱を殺しに来たのか。分からない。

バックにマフィアが付いている、か。マフィアに脅されているのか、何なのか。

とにかく、殺しに来た。

先ほどのあのスタンプ。……。そういえば、スロット・マシーンが攻撃のスイッチだったっけ。だから、ズンヴィー達か？ マフィアと繋がっているのか？ いや、それだと辻褃が合わない。別の能力者だと考える方が自然だ。

ライフの能力？ それとも、彼女は罔か何かか？

考えれば考える程、思考が堂々巡りを繰り返す。

余り、頭を使って戦うという事を知らない。

ツインも、花鬱と同じように、肝心な時に小難しい事を考えるのは苦手だ。いつもいつも、ろくでもない思考ばかりをカタカタ、カタカタと巡らせている癖に。こういう風に、論理的に物事を考えるのは苦手だ。裏にきっと策略があるのだろう。でも、分からない。どうすればいいのか。

先ほど、花鬱に少し嫌な思いをさせてしまったんじゃないかと思う。

自己嫌悪に陥る。他の者ならば、こんな感情、起こらないかもしれない。

自分は何も分からない。きっと、何もない。

けれども。

信念とか信条とか分からないけれども。

そういった、何かが欲しいんだと思う。

見つけたい。でも、見つからない。

きっと、気付いている。花鬱だって、本当はそんなもの持っていない。

出口が無い。答えが無い。
ツインは知っている。
青年の夢は叶わない事を。
青年は、花鬱がいなければ、生きていけないだろう。

十

花鬱の能力『邪魅曼荼羅』。
おそらく、その能力を超える力を持つ存在は、アナトミアにはいない。
ツインは彼女のその能力にも、畏怖を覚えている。
いつか、少しでも近付ければいいと思っている。
あの強さに。
あの畏怖に。
花鬱の人間性に興味はなく、その能力の異常性にのみ畏敬を浮かべる人間も、決して少なくないと思う。メビウス・リングとかいう者の評価だと“分かりやすく、シンプルに強い”そうだ。
ちょうど、路地に差し掛かった処だった。
予め、彼女達が通る道を調べていたのだろうか。
確かに、これはもっと直接的な宣戦布告だった。
花鬱の背中から、陰が揺らめいている。
ライフは驚愕していた。
非日常の中に、投げ込まれたような。
ぞっとするような、現実となってスクリーンの中のものが目の前に現れている。
死体。
散乱した死体達。
敵は花鬱を殺す為なら、何の手段も選ぶつもりは無いみたいだった。
どうやら、ライフとライフの背後にいるらしいマフィア達とは完全に別件だ。
ズンヴィーとフォールス・メモリーの二人。
この路地を、何処かから見ている。
あるいは、既に、ライフやマフィアが動く事も彼女達の計略に入っているのかもしれない。
二重、三重の罠。
敵は、何だってやるだろう。
……………。
般若の面が。
花鬱のいつもの冷然とした穏やかな顔に、重なるかのようだった。
ぞくりっ、とツイン・スラッシュの背筋に冷たいものが走る。
ああ、この感じ。
憧憬の念が溢れてくる。

「誘っていると思います」

ライフが呟いた。

「怒り出す事を誘っているんじゃないかって……」

「あなたは、こいつらと繋がりはないのよね」

「はい、嘘付いていません」

花鬱は頷いた。

それ以上、ライフに何も言わない。

ツインは考える。

死体に触れさせようとしている。

あるいは、他の何かにだ。

路地裏の鉄パイプ。マンホールの蓋。分からないが、とにかく、何か、だ。

どれかは分からないが。

あの二人のどちらかの能力は、おそらくは、ライフが襲わせようとした能力者と近いような使い方で攻撃してきている。

そう、暗殺、だ。

ライフにしろ、ズンヴィー達にしろ、花鬱を真正面から倒せないの、暗殺を狙ってきている。しかし、やり方は多少、違っていた。

少なくとも、ライフは他の者達を巻き込もうとはしていない。

ツインは、ぞわっと、首筋に寒気が過ぎっている。

花鬱の肉体から、滾っているオーラ。

今にも、彼女の邪魅曼荼羅が発動しそうになっている。

彼女は必死で、怒りを押さえ込んでいる。

真っ赤な暴力そのもの。

死体しか作れない能力だと、花鬱は言った。怒りをコントロールしても、流血しか作り出せないものだ。

それでも、メビウス・リングとかいうのは、『ドーン』からしてみれば、花鬱の力もそれ程でも無いという。ツインは見た事は無いが、メビウスとかいう奴の力は、花鬱よりもより圧倒的で絶対的な暴力らしい。

それは、どれ程のものなのか。ツインには理解の範疇の外側だ。

しかし、分かった事だけはある。

ズンヴィー達は、いよいよ、本格的に花鬱を始末しようとしてきている。

あるいは、消耗を誘っているのかもしれない。

ぐるぐる、ぐるぐる、ツインは考える。余計な思考が入り込んでくる。どれが正しいのか分からない。花鬱はどうするのだろう。今はとにかく、怒りを抑えているみたいだった。

冷静さを、何とか冷静さを保とうとしている。

「ねえ、ツイン・スラッシュ。ライフさん……」

花鬱は押し殺した声で言う。

「もし、あたしの友達が襲撃されたら、抑えられない、と思う。もし、それをやられたら、止められない。もし、あたしが敵だったら。あたしの友達を狙う可能性が高い。ねえ、ツイン、お願いがある。あたしの友達、あなたが知っている限りで、守って欲しい……」

花鬱。

彼女は今、自分一人で敵の二人を倒すと宣言している。

ツインには、とにかく、大切な者達を守って欲しいと。

「敵は調べ上げているかもしれない。そろそろ、あたしの友人知人の誰かに手が回る頃かも」
嗚咽を殺すように言った。

花鬱は必死だ。

ツインも必死。

ライフの顔は蒼ざめている。

それにしても、スクリーンのものが現実になっている。

死体。

まるで、煽動的に肉体を破壊されている。

死体の何名かは、壁に勢いよく頭を叩き付けられている者もいた。頭蓋の爆裂。彼らは臓物を引きずり出されている。大量のナイフを全身に刺し込まれていた。

死体達には、傷口に、百合の花束が差し込まれている。

そして、死体の周りに黒いペンキで文字が書かれていた。

“花鬱さん？ あんたは何も守れない。あんたが死ねば全部、解決する。”

禍々しく刺々しい文字。

転がっている死体達の素性は分からない。

男もいれば女もいる、子供もいれば、老人もいる。

これははっきりとした宣戦布告なのだ。

勿論、罾を仕掛けるつもりだろうが。まず、何よりも花鬱の思考を破壊する事を狙っている。
花鬱が熱くなって向かってきて、彼女達の罾にはまっていく事を狙っている。

分かっている、分かっているけれども、花鬱の性格上、止められそうになさそうだ。

早く、敵を始末しなければならない。

こいつらは、どれだけでも、殺してくる。

パチンコ店の辺りから、悠長に構えるべきではなかったのだ。

この前は、様子見。

今回も様子見。

次も様子見かもしれない。その次も。

問題は。

その度に、無関係な人間を何の躊躇も容赦も無く殺し続けるという事。

その事によって、確実に効果を与え続けている。

まともな思考回路を奪い続けていくだろう。

ツインはライフを連れて離れる。

そして、片っ端から、花鬱の知り合いに連絡して回る事にした。

頭を使うのは苦手だ。自分も花鬱も。

敵は完全に、それにつけ込んでいる。

十

「カサネが失敗しました」

ライフは取り敢えず、それだけをマフィアの幹部に報告した。

自分ではなく、カサネの戦略。

そう言い切ってやった。責任はカサネにある、と押し付けてやった。

そして、予め、自分はカサネが失敗した時に、花鬱に口を割らされる事もさせられるという事を念頭に置いていた。

ルーザーも、その程度は許容している。

問題は、最後までやり遂げる、という事だ。

花鬱の側に付いてしまったら付いてしまったで、ルーザーの組織の存在も花鬱にバレてしまったらバレてしまったで、それすらも計略に入れなければならない。

そう、予め、ルーザーと話し合っている。

マフィアは単純だ。マフィア達の単純な思考回路では思い付かなかったみたいだから、計画したのは当然、ライフだった。ルーザーは唸りながらも、しぶしぶ承知した。

後で、どんな代償が伴うか分からない。けれども、彼女はマフィアを説得し続けた。

問題は、花鬱を狙っている別件の敵が存在する。

それをマフィア達に報告するべきかどうか。

まだ、裏切ってはいない。

最初に、背後にマフィアがいる事くらいは話さざるを得ない事を覚悟していた。

更に、それに付け込んで、彼女を引っ掛ける。

覚悟と決意。

そして、先ほど貰った四枚の写真。

その中の一枚が、やはりマゼンダ。

ズンヴィー達の思考も、ライフの思考も完全に一致している。

花鬱は単純だ。それは、暗殺者や処刑人と呼ばれる者達には周知の事実だ。しかし、それでも中々、彼女を殺せない。それも周知の事実。

ライフは思考がぐるぐると渦巻いていた。

花鬱を好きになってしまった。……マゼンダを守らなければならない。

迷い。それが螺旋のように渦巻いている。

そして、はっと思い出す。

シーズンズ。

彼女から、情報を貰おう。

先ほどの死体達、おそらく仕掛けているのはズンヴィー達。

彼女達は、何の手段も選んでいない。

目的の為なら、全部、全てが正しいとくらいに思っている。

そうだ。

確かに、そうだ。

ライフは最初に花鬱を殺そうとした、その時から決まっていた筈だ。

相手がどんなに正しくても、目的の為なら間違っているし。目的の為に必要な行動は、どんなに間違っている事でも正しい。

ズンヴィー達は正しい……………。

極めて効果的な事しかしていない。

「もしもし、シーズンズさん」

しばらくして、艶かしい女の声が聞こえてくる。

……あら、ライフさん。どうしたの？

「どうしたもこうしたも、花鬱の情報が欲しいです。今すぐに」

……ふうん、どれから？

「……………現在、誰がどのように、花鬱を狙っているか知っているだけ、教えてください」
声は沈黙した。

こいつは、おそらく掴んでいる。

何かを掴んでいる。

的確に、引き出さなければならない。

……ああ、ズンヴィーちゃん達が頑張っている、みたいだね。

間違いない。

こいつは、何らかの手段で。街の全てを把握している。

こいつの能力に、きっと関係している。

「ズンヴィー達の動向、教えてくださいませんか？」

自分で、何を言っているか分からなかった。

……病院。

電話相手はそう告げた。

……病院を狙いたいみたい。何で、だろうねー。

ライフは困惑する。

……でもまあ、それはまだ楽しみを取っているようにも見えるね。後、何度か、無関係な人間を殺すつもりみたい。知り合いを殺す、っていう行為もじらしてるんじゃないの？

ライフは絶句していた。

やはり、この女、全てを握っている。かなりヤバイ。

ライフは一通り、情報を得た後、携帯を切った。

そして、少し地面に屈んだ。

十

やはり、広い建物だ。

突入して、一時間近く経過していた。

しかし、やたらと迷いやすい。

監視カメラらしきものは、一切無い。

ただ、ヘッド・レスと呼ばれる機械人形ばかりが徘徊していた。

それらには、見つからないように行動し続ける。

甘名は頭の中でイメージし続けている。

城の地図。

この先、自分の能力が成長すれば、おそらく物質の形をイメージとして把握出来る事が可能だろう。自分の能力の先は理解している。しかし、まだそれには届いていない。

とにかく、迷いながらも、何とか地図を書き記そうと頑張る。

否睡は、今にも破壊衝動を満たしたい、といったような顔をしていた。

甘名はひたすら、見知った知識ばかりで敵のイメージを想像していた。

この前、花鬱相手に話した事。敵のイメージの話。

甘名は経験よりもまず、想像を先行させて花鬱に話したのだった。

読書をしたり、小説を書いてきた過程で膨らませたイメージを、そのまま“能力者”という存在に對して、話したに過ぎない。

想像力。

それが、戦いにおいて、あるいは人生において、もっとも必要な事の一つなのだと甘名は考えている。それが、状況をひっくり返す事も。

昔いた施設。それも、他人に対する想像力で潜り抜けてきた。

思考を練り上げる事。

それを、今後の生き方の指針にしたい。

彼はそう思っている。

そもそも、こんな城に住んでいる奴ってのはどんな奴なのだろう。

まず、厭世的な奴なのだろうか。

他人との干渉を避けて、生きている。

想像力を巡らせる。

此処は、大きな鳥籠。

中の奴は、多分、出たくない。

もし、中に入ってくる奴らがいたとすれば、どうするのだろうか。

「とっくに気付かれている、と考えるのが普通だよな？」

彼はそう呟いた。

そして、舌打ちする。

鳥が斜めに飛んでいた。

本来ならば、違う筈だ。

ミスティは空を見上げながら、そんな事を考える。

城の中に巣を作っている、鳥達の飛び方で、彼女は異変に気付いていた。

何か、おかしい。何かの危険を察知したかのような感じ。

ざわめき。

何かおかしい。

何が、おかしいのか。

まるで、自分の心の中に、誰かが入り込んできたみたいだ。異物。

「まさか……侵入者……？」

ミスティは、歯をかちかちと鳴らし続ける。

そして、エントランスへと向かった。

何かが変だ。

床を眺めていく。

小さな泥。砂埃。誰かが床を踏んだ後、おかしい。

「やっぱり、誰か、侵入者がいる……」

ミスティは自室へと戻った。

少しだけ、頭の中がパニック状態になる。

ただでさえ、精神を掻き乱される事が最近、起こったというのに、今度は何なのだろうか。

いや、彼女が何とかしなければならぬ。何者かが、この中に重力の防御膜を破って、入り込んできた。危険に晒されている、と言える。

深呼吸、落ち着きを取り戻す。

自分自身の感情に対して、“能力を発動”させる。

そして、クローゼットの中を開ける。

真っ黒い服。

魔女のような服。真っ黒なドレスだ。闇と悪夢を吸ったような黒。

魔女のような簪もある。

自分を邪悪な怪物に見立てた嗜好品。

彼女はメイクを施す。

さらけ出した内臓のような唇。

彼女は真っ赤にルージュを引く。

艶かしい指先。

目の周りを漆黒に覆う。

彼女は舌なめずりする。

この黒い服は、とても気に入っている。

彼女も能力者だ。

『ナルコレプシー』。

それが、彼女の力。

城の中の異物は、排除しなければならない。

敵は、倒す。

人を愛するという事。

そこに過去も未来も無い。

彼女は誓う。愛する人の為に、眼の前の敵を倒さなければならないのだと。

十

花園のような場所に出た。

薔薇や睡蓮、ハーブなどが咲いている。

アーチの中に、様々な彩色を放つ薔薇が咲いていた。枝が散り散りに伸びている。

甘名はしげしげとそれを眺めていた。

何だか、得体の知れない違和感のようなものを感じる。

この中庭の中にある庭園には、幾つもの小鳥が巣を作っている。

ゆらゆらと、小鳥が飛びながら、巣に入り、眠りに付いていた。

そういえば、まるでまどろみのようなものの中にいるようだ。

「なあ。甘名」

否睡が不思議そうな顔をする。

「何で、そんなに眠そうなんだ？」

「……何でだろうな」

そうだ。

眠い、のだ。と気付いた。

物凄く気だるく、眠りたい。

気温といい空間の心地よさといい。

此処が敵地である事を忘れてしまいそうだ。

彼は一本の薔薇を掴む。

ピンクに近い赤い薔薇だ。手入れが行き届いている。

何だか、落ち着いていく。

瞑想的な空間だ。

空気の流れが、全身に入り込んでくるようだ。

「薔薇が結構、咲いているな」

「ああ」

「薔薇は美しいな。こんなに種類があるのか。少し、埋もれて眠ってみたいな」

否睡は少し困惑したような顔になる。

気付けば。

自分に両膝を突いていた。

全身が気だるく、重い。何だか、思考が鈍くなっていつている。

何だか、もう何十時間も不眠不休のまま動いていたような感覚。

薔薇の中に埋もれよう。甘名はそう思い始めた。

見ると、棘が丁寧に切り取られている。安心して、ベッドに出来る。

「おい、お前、おかしいぞ？ 一体、何をされたんだよ？」

否睡が喚いている。煩わしい。

だんだん、今、何の為に此処にいたのか分からなくなってきた。

もう、疲れた。そんな気分だ。安息感ばかりが頭を過ぎる。

夢を見よう。少しだけ苦しい記憶を消し去るような夢を。

否睡はどんどん、混乱し始めていた。

.....そう。

甘名は何らかの攻撃を受けている。

それは苦痛ではなく、安堵となって彼を襲っている。

苦痛よりも、快樂の方が耐えられないのかもしれない。それも、侮蔑や屈辱さえ伴う快樂ではなく、在りのままの快樂の方が。そこには在りのままの自分の欲するものが存在する。

「どうすんだ。ってか、私には効かないのか？ 肉体の構造上の問題なのかな？」

彼女はおろおろと、周囲を見回した。

何処かで此方を見ているのか。

それとも、何処か遠くから攻撃しているのか。

分からない。経験が無い。

彼女は構わず、自身の能力を発動させようかと考えた。

「否睡.....」

彼は呻く。半分、寝言のよう。

「多分、敵はオレ達の位置を知らない。直観だけど」

そして、ドレスの中に隠し持っていたナイフを取り出す。

おもむろに腕に滑らせていく。

「駄目だ。.....痛みも眠っている。感覚が無い。.....否睡、お前は平気なのか？」

「.....ああ」

「じゃあ。お前の.....身体の、構造上、効かないんだろうな.....後、しばらくは頼む」

甘名はそのまま花園の中で倒れた。

否睡はうろたえ始める。

どうすればいいのか。

彼女は、上着を脱いで、肩のタトゥーをさらけ出す。

ベリベリっ、とタトゥーから怪物が引き剥がされていく。

『ダンス・マカーブル』。

それが彼女の能力だ。

しゅうしゅう、と大量の霧が噴き出していく。

それは人の形へと変わっていく。まるで、ヨーロッパの騎士が身に付ける甲冑のような。

それは、大きな鎌を持っていた。

全身に溢れ出してくる高揚感。

エネルギーのボルテージが上がっていくかのようにだった。

少しずつ、歓喜の衝動が湧き上がってくる。

「甘名、待ってる。敵には死の舞踏を踊ってもらうぜ。私が殺しに行く」

彼女は彼を背中に担ぐと、嬉々として城の中を走り出した。

大鎌を振り回しながら、城にあるものを次々と壊して回る。

甘名が練っていた戦略など、完全にお構いなしだった。

彼女は、彼の思考を練り上げようとする行為を馬鹿らしく思っていた。

とにかく、突っ込んで行って、敵を見つけてぶっ殺せばいい。

シンプルな衝動だけで、戦うべきだろうと考えていた。

花瓶や額縁などが破壊されていく。

突然。

地面が無くなっていた。

とっさに、背中に背負った甘名を放り投げて、彼女は地面の中へと落ちていく。

そして、全身に衝撃が走る。

どうやら、全身を串刺しにされたみたいだった。

十

城の主人はパソコンのモニターを真剣に見ていた。

『ドーン』の中枢。もうすぐ、それを調べる事が出来る筈だった。

城の事は全て、ミスティとヘッド・レス達に任せている。

ドーンの中枢にあるもの。

それは、“円環”と呼ばれる名である事までは知っている。

そいつに辿り着かなければならない。

……。

そして、もう一つ。

“凍結”という隠語で呼ばれているもの。

ドーンの中枢は、究極的にはそいつを追っているのだと知った。

彼は、その凍結と呼ばれるものにも辿り着こうと考えていた。

世界を手に入れる。

そう。

かつて、彼は自分の欲しいものを奪い取るかのように手に入れたように。

自らの手の中に収める。

世界を握り潰せるのではないかという感覚。

十

目覚めると、甘名はベッドの中にいた。

身体が殆ど、動かない。それから、気だるい。

一応、両足に鎖の付いた枷が嵌まっている。彼の能力を使えば、そんなものあって無いに等しいのだが。

……オレは庭園で眠ってしまって。……否睡と一緒に来たのが拙いかもな。あいつ、何も考えずに、行動しやがるもんだから。

まんまと敵の罠に嵌められてしまった。

しかし、自分が生かされている、という事はまだ何かしらの生かす価値があると判断しての事だろう。彼は少し考えてみた。

……花鬱と彼女の相棒が狙っている事を喋らされるだろうな。拷問に掛けてでも、でも、オレはすぐに言うつもりだ。彼女達には何の義理も無いからな。加えて、オレはハンターでも何でもない。どうだっていいな。

まず、自分が生き残る事を前提に考える事に決めていた。

甘名には希死念慮がある、しかし、屈辱の中で死にたくはない。

部屋の中に一人の女性が入ってくる。

真っ黒い服を身に付けた女だった。

「あら、お目覚めですか？」

彼は何かを喋ろうとする。

しかし、舌がもつれて動かない。

もう、大体のこの能力は把握していた。おそらく、使っているのは彼女だろうか？

“眠らせる”。それも様々なものを、様々な調整して。

「お茶とコーヒーと紅茶、どれにいたします？」

すうっ、と喉が動いた。

「紅茶で頼む」

まるで、本当に普通の客に対する物言い。

彼女に幾つかの質問をしたかったが、また舌がもつれて動かなくなる。

さっさと、知っているだけの情報を吐いてやるつもりだったのだが。……。

……しかし、参ったな。変質者だったら、どうしようかな。

動けない状況。女に拘束されている。

施設での記憶が甦る。怖かった記憶。女の暴力性。

……オレを人形にしたがった女達。赦せない。今でも殺してやりたい。

今の女も、何処か強い気味の悪さを感じた。

彼をどうしたいのか。

念入りに警戒し、此方側が有利になっていく事を進めていく必要がある。

身体は動かない。

しかし、頭の中はフル回転している。

敵の甘さは、頭まで眠らせなかった事だろう。考える時間を与えてしまっている。

だから、今の状況を逆に好機と考えるべきだ。

小説で、プロットを練っていた時の事を思い浮かべる。

こういう状態の時、一体、相手はどうしたいのだろうか。

相手の立場に立って、思索し続けるという事。それこそ、相手と一体化するかのよう。それが現実の人間だと気持ち悪さばかりが伴うが。実際、敵と戦うという事は、そういう事ではないかと思っている。相手の立場を読み取るという事。

それにしても、否睡はどうしたのだろうか？

彼女もまた、敵に捕まったのか？

しかし、全て情報を吐いてしまったら。そのまま殺されてしまうかもしれない。なら、何か駆け引きが必要になってくる。はったりでもいい。

しばらくして、ドアが開いた。

「紅茶をお持ちしました」

彼女は清楚なエプロン・ドレスに着替えていた。

そして、紅茶の他に、ベーコン・エッグとフレンチ・トーストもトレイの上に載せている。

彼女はそれを床に置いた。

「この部屋、テーブルが無くて。すみません」

甘名は全身が動けなかった。

しかし、喉と口元だけゆっくりと動いていく。

「どれからお召し上がります？」

彼女は訊ねた。

甘名は困惑した顔になる。

「一応、聞いておくけど。その料理、飲み物。毒とか自白剤、入っているのか？ 何か聞きたい情報があったら、全部話すからさ。拷問もましてや殺害も止めて欲しい。……オレは、はっきり言うけど。仲間を売るつもりだけど」

彼女は少し、困ったような顔になる。

そして、おもむろにフレンチ・トーストの端を千切って、口にする。

「自白させるとか、必要ないです。ただ、ちょっとお話してみたくて」

彼女はちょっと、困惑気味だ。

「あなた、男の方ですよ？ 女だったら、容赦するつもりは無かったんですが。ご主人様も、好きに放置していいって言ってました。今、大切な仕事に打ち込んでられるそうです」

何だか、微妙に韜晦を含んだニュアンスで言う。

「オレから情報を聞き出さなくて正解だ。何故なら、オレでさえ、まるで分からないからな。ド

一の事も何もかも。ただ、友人に付いてきただけなんだ」

「……でしょうね。あなたから、何と言うか、使命感みたいなものが、感じられなくて」
ふん、と彼は鼻で笑った。

「そうか。でも、その料理は頂けない。紅茶もだ。すまない」
凜然とした態度を取って、言った。

そう、此処は敵地なのだ。

そして、彼女は紛れもない敵。

完全に油断を誘って、何かに嵌めようと考えているとしか思えない。

エプロン・ドレスの女は困ったような顔をした。

濃い金髪の髪を撫でて、彼を見つめている。

「えと、ですね。あの、あなた、御自分の立場、分かっているんですか？」

彼女は淡々と言う。

「分かっているからこそ、言っているつもりだが？ オレはお前を、お前らを始末しに来たんだぞ。ご機嫌取りの方は選ばなかった。そちらの方がより危険だって判断したから。はっきり言わせて貰う。今、オレはどうやったら、今の状況を打開すべきかどうかを考えている。お前らを始末する事をな」

それを聞いて、女は嘲笑した。

口元を押さえて、笑い続ける。

「そんな、物騒な。あのですね、私、あなたを気に入ったんですよ。ご主人様にも、あなたのお顔を見て貰った。それで、決して“関係”を持たない事を条件に私の好きなようにするように言われたんです。あなたは、正式に此処に招き入れられたんですよ」

「はあ？」

彼の声が裏返る。

「いいですか」

彼女は甘名の頬に、両手で触れる。

「私もご主人様もド変態です。隠すつもり無いです。あなた、可愛いなあって。だから、決めました、あなたを私のお人形にしたいなって」

「はああ？」

今度は、声が完全に裏返っていた。

「もう、あなたって。老いる事も死ぬ事も無いです。ずっと、この城の人形として生きていくんです。ね？ 素晴らしいでしょう？ あなたを飾って、あなたの世話をしたい。髪を撫でて、あなたに付いた埃を払う。素敵だなって」

どうやら、本気で言っているみたいだった。

「一応、確認しておく。……もう一人はどうした？ オレの相棒は？」

「ああ」

彼女は屈託無く笑う。

「あっちの方に、尋問、拷問などするようにご主人様から言われています。何か、好きじゃない

からって。私も、この城に、私以外の女はいらないんで。好きに処理、廃棄しようかなあと」
指先を口元に当てる。
「処で、お前の名は？」
「えっ？」
「誰にでも名前はある。お前の名前は？ オレは甘名。まさか、勝手に名付けようとしてたわけじゃないよな？ お前の名は？」
「ミスティです」
「そうか。宜しく、ミスティ」
彼の眼には、微笑が灯る。

十

一度、服を脱がされて、更に装飾の多いドレスに着替えさせられた。
真っ黒なドレスだ。
顔には念入りにメイクが施される。
どうやら、此処は宝物庫みたいだった。
様々な絵画や家具などが置かれている。宝石もある。
アンティーク・ドールも。
どうやら、甘名はその宝物の中の仲間入りをしたらしい。
今は完全に身動きが取れない。
ただ、思考だけが動いている。
不思議と、瞬きをせずとも、眼の中に埃などが入り込んでこない。
……否睡はこのまま始末されるかな。まあ、ある程度仕方無いかも。
彼は考え続けていた。
どうやら、自分はひとまず助かったらしい。
正直に言えば、このまましばらく置物として生きていく人生もいいかもしれない、と思った。
そもそも、生きる目的なんて無かった。ドーンのハンターの手伝いをしたのも、いわば、暇潰しだ。
花鬱達は、下界で一体、どのような状況にあるのだろう。

十

この浮遊城の主人の名はブレイカーと言う。
ブレイカーは、ひとまずパソコンの休止に入る。
一体、何十時間、寝ていないのだろう。
仮眠に入る事にした。
ああ、ミスティからちゃんと歯を磨くように言われていたっけ。

ミスティは彼の恋人で家政婦で、たまに母親みたいに感じる事もある。

「『リフリジレーター』が一体、何なのか分からないな。辿り着けるのだろうか？ 僕に」
彼は頭を悩ませていた。

ノックの音。

ミスティが入ってくる。

コーヒーとベーコン・エッグ、フレンチ・トースト。それからポテト・サラダ。メイン・ディッシュは、ミート・ソースのスパゲティだ。

彼はそれを口にしていける。

「なあ、ミスティ。僕は一体、どれくらいの間、パソコンで仕事していた？」

「56時間、いい加減にしてください。ご主人様のお身体が心配で心配で」

「だな……。しかし、パソコンでアナトミアの株やドラッグの管理、カジノのコントロール。情報だけで、この浮遊城は維持されている。まあ、大変なんだよ」

「そうですけど……。一人で持つのでしょうか？」

「まあいいさ。割りとは僕は丈夫なんだ。それに、さすがにこの仕事はヘッド・レスなんかじゃ出来ないからね」

彼はブラックのコーヒーを一気飲みする。

「それにしても、侵入者の彼らはどうなんだい？」

「えと、可愛い子の方は。私の好きにするようにして、可愛くない子の方は、ご主人様がおっしゃられた通り、地下牢に閉じ込めています。……全身を串刺しにされたのに、何故か生きていますよ。どうしましょう」

「コアの重力波を潜り抜けてきたか。もしくは、へりにでも侵入してやってきたのだろう。珍しいよね。ドーンからの刺客なんじゃないかな。ドーンに死体を送り付けてもいいかも。それも、相手が再度の襲撃を躊躇う程の芸術的なオブジェに変えてね」

「ですよ。あ、じゃあ、私、可愛い子の方、また見てきたいので。ご主人様は可愛くない子の方、見て頂けませんか？ 私、私以外の女って大嫌いなんですよ」

彼女は何処か、すねたような声になる。

「分かった、分かった。どうしようか、他にも仲間がいるかどうか聞いてみればいいのか？」

彼は少し考える。

実は今はそれ所ではない。

世界の秘密。ドーンが本当に追っているもの。

あるいは、ドーンの中樞が追っているものに、迫ろうとしている。

十

髪の毛を念入りに梳かれながら、彼は言った。

「花鬱と後、それから、彼女の手下の一人が狙っている」

彼はミスティに助言していく。

「オレ達が始末されたって知ると、乗り込んでくるんじゃないか？ もっとも、その前に別件の敵に負けるかもしれないけど」

エプロン・ドレスの女は以外そんな顔をしていた。

「それから、此処に来たもう一人。バラバラにして空中から廃棄するとかどうだろう？ 頭は残すんだ。地面に落ちた時に潰れたトマトみたいになって見物だろうな」

末恐ろしいな、と彼女は思った。

口を閉ざしていれば、とても端正で玲瓏な顔立ちなのに、喋る内容と言えば、率先して仲間を売っている。

「オレの元々の服はどうしたんだ？」

「え、えと。私の部屋に置いています」

「あれ、イノセント・ワールドの新作だから汚さずに、たまに着せて欲しい。洗濯は手洗いでする事、フリルなどのパーツが取れたらしっかり縫って欲しい」

「え、ええ……」

完全に不遜な物言いだ。

自分が拘束されており、捕虜となっている事、あるいはもう始末されてしまっている事を何とも思っていないように思える。

「あの変なメイクの男だか女だか分からない面倒臭そうな奴。能力も教えてやる。串刺しにされて、首は繋がっているか？」

「繋がってますね」

「首を切断して置いたら、そのうち死ぬ。彼女の能力は『ダンス・マカーブル』といって鎌を持った死神を召喚する。気を付けろ」

聞いていない事まで説明してくる。

「ちなみに、花鬱と……後、何だったっけ。もう一人の奴の能力は知らない。興味が無いから、聞かなかった。オレの持っている情報はこれくらいだ。他に聞きたい事は？」

「……………仲間、何とも思ってないんですね」

「当然だろ。オレはみんな嫌いだからな。特に、花鬱と一緒にいた女、名前覚えなかったが、あいつは是非、殺してやって欲しい。思い出しただけで、腹が立ってくる」

すらすらと、彼は流れるように言葉を紡いでいく。

そこには何の迷いも、韜晦も無いように思えた。

「あの、今の状況。悔しかったり、腹立たしかったりしないんですか……？」

「いいよ。オレ、そろそろ自分の人生を終わらせようって思って。この仕事に首を突っ込んだんだ。だから、この待遇なら悪くないって思ってさ。勿論、お前が裏切らないって話ならだけど。オレを人形として、ずっと保管してくれるんだろ？ 此方としては、願ってもいないな」

ミスティはしばらくの間、絶句していた。

彼の言葉の中には、とてつもなく強い、虚無感を感じ取ってしまった。

生きる意味を見出せない。

そんな言葉が、頭の中に浮かんでくる。

ある種の病的なものさえ、感じた。

「処で、お前の能力って。オレの思考までは眠らせられないの？ 完全に睡眠状態に入らせるとか」

「出来ますよ。……貴方を普通の意味で眠らせる事が出来ます」

彼は少し考えて、訊ねた。

「夢と違って見る？」

「見ます。見ると思います。さすがに、意識の全てを眠らせるのは無理で……」

「そうなんだ」

彼は何か、悔しそうな顔をしていた。

考えるという事。それから解放されたいといったような。

虚無感。

「なあ、ミスティ」

何処か、とても気だるそうに。空ろそうに言う。

それは、とても、信じられない質問だった。

「殺してくれない？ 飽きたらでいいからさ。人形遊びに」

「えっ……？」

「勘違いしないで欲しいのは。こうやって所謂、負けたのが屈辱だからとか。捕虜になるくらいなら死んだ方がマシだからって事じゃない。オレはさ、死にたいから、ドーンの手伝いをしようと思ったの。でも、今はハンターになるつもりは無かった。意味が無いから。相棒はオレに生きる、って言う。でも、オレは死にたい。向精神薬無しじゃ生きていけない心がもう嫌なの」

ミスティは本当に信じられないようなものを見る目で、彼を見ていた。

底無しの虚無と。それを支えている世界に対する憎悪を感じる。

ミスティが見てきた綺麗なばかりの世界にはない感覚。

「着替えさせる時、下着だけにしたでしょ。あの時、フラッシュバックした。酷い光景が、聞いてくれないかな？」

彼はミスティの言葉を待たずに語り出した。

「十代の頃。同年代の女達に強姦……違うな、輪姦されそうになった。ずっと、トラウマになっている。ある施設で……」

ミスティは黙る。

信じられない話を聞かされている事を理解する。

「その施設って。女という存在の邪悪さの実験をしていたんじゃないかって思う。どれだけ男に行動規範を近付けるかとか。まず、沢山いる女の中で、誰かが男に近くなっていくんだ。性格とかが。容姿もかもしれない。男のいない女同士の間って、下品だよな？ で、そいつらって、持て余しているから。女同士で絡み合うの。全員ではないけど、一部が。あれは酷かった」

彼は淡々と吐き出しているが。

まるで、自分自身を刃物で切り付けるような印象。

「で、オレは施設にいる時に。顔と全身の永久脱毛を行っている。元々、顔立ちだけじゃなくて

、骨格もかなり女性的。加えて、能力者になってから、どんどん能力の特質故か、老いなくなってきた。もう、オレは人間じゃない。人形なんだと思う」

彼はどんどん、自分の中の苦痛を、よく知りもしないミスティに吐き出して、叩き付けているかのような音だった。

「ミスティ。飽きたらでいいから。殺して欲しい。お前のせいだからな。さっき、服脱がしてくれた時に、フラッシュバックを引き起こした。生きていたくない、って事を思い出させてくれやがって……………」

憎しみではなく、空ろな眼で、彼は彼女を見ている。

そして、どんどん、言葉はナイフで刺すように変わっていく。

「ドロワーズだけの姿になったオレを見て。お前、胸とかうなじとか、まじまじと見ていただろ？ 鎖骨とか。施設でキラキラとあいつらは見ていた。どう思う？ 女と男の欲望の違いって何なの？ オレには分からない」

まるで、根底から社会の原理を否定するかのような発言だった。

いつだって、凌辱する側は男で、凌辱される側は女。

……………。

甘名は眼を閉じる。

その光景は何度も何度も、亡霊のように浮かび上がる。

さらけ出した裸体。ぬめるように光る人体。

真っ赤に塗られたルージュ。発達途中だが、確かにそれは気味の悪い肉の色をしていた。

それが、今、眼の前のミスティと重なる。

女の顔、顔、顔。

頭の中で残響していく。

拭い去れない、心の傷。

自分自身の姿。

それをみなは、美しいと言う。美しいらしいから、みな、行為の時以外にも、部分、部分をさらけ出す。

肌、胸元、首筋、鎖骨、足首、腹。

それらを美しく、官能的だと言う。

そういった世界の輪郭、在り方を知って、甘名は何度もフラッシュバックに苦しめられ。自身の死を願うようになった。

彼の、女に対する憎悪と呪詛は相当に、強い。

本屋やコンビニに並んでいるアダルト雑誌は勿論の事、絵画の裸婦にまで強い嫌悪感を感じる。あるいは、本の中に書かれる女の描写。性的な描写。

……………。

彼の持つ、底知れない程の悪意と敵意を感じ取って、ミスティは不思議な感情に襲われた。それは必死で思考の何かを振り払いたいかのような。

見たくないものは、見ないようにしたいと思うミスティ。外の世界も何もかもいらぬ。愛す

る主人と暮らす日々さえ、見つめていればいい。

しかし、目の前にいる美貌の存在は、普通、人が見なくてもいいものまで、見ているように思えた。

彼はいわば。

他人の愛情を信じられないのだろう、と思った。

彼の両眼は、酷い空虚と。深い憎悪を讃えている。

十

再生される女の顔、声。

マゼンダは蝕まれていく。

延々と延々と、自分が消費され続ける。

もう、最近では、街中を歩いている途中、設置されている監視カメラなどを見るだけで、恐怖で頭の中がおかしくなってしまうようだ。

殺されるのではないか、という感覚。

自分の肉体が何処にも無いように思えた。

自分は一体、何処に行ったのだろう。

顔、身体。

全てが破壊されていくかのような感覚。

ああ、そうだ。

人形が羨ましい。

アオバが羨ましい。

痛みも何も感じないのだろう。

でも、とても悲しそう。

自分の声を心を代弁してくれる、アオバ。

そして、マゼンダは新しい人形を作り続けている。

泥だらけの爪。仕事以外では、ずっと人形を作り続けていた。

まるで、全てが腐食していく世界で、小さな光を形作るような感覚。

自分の感じているものを、どうにか形にしたい。

人形を作っていくうちに、どんどん作り方が分からなくなってきた。

なので、かなり前に安く買った型落ちのパソコンの電源を入れる。

一応、まだインターネットに接続されている。かなりの時間が経過して、パソコンの画面が開いた。やはり、型が古過ぎる。重い。

ネットで、人形の創作サイトを調べる事にした。

……パソコン。

アダルト画像や動画が氾濫している場所でもある。そういえば、マゼンダの映っているDVDも沢山、売られている。ネットにも動画が載っていると聞く。

負のイメージが本流のように押し寄せてくる。

何とかそれを振り払おうとして、床に爪を立てた。

……今は人形の創作サイトを見に行くだけだ。

それでも、ノイズのように、頭の中に自分の映っている画像が存在するのではないかという恐怖に駆られる。何とか、それを振り払おうとする。そういえば、仕事場にいる、他の女の子達も沢山、載っている。彼女達を見つけても、パニックに陥る可能性が高い。

どんどん、どんどん、自分が行ける領域が狭くなっているような気がする。

何処に行っても、自分の感情を引きずり出すものが。

心を引っ掻き回すものが、置かれているように思える。

彼女の心を砕く何かは沢山、充滿しているような。

……人形みたいな子がタイプ。

アダルトDVDの客の一人が漏らしていた言葉。たまたま聞いた。

お前に人形の何が分かる、と思った。怒った。

無感情の中、生きているが。その時ばかりは、とても怒った。

人形ほど、感情的なものは無いんだ。

彼女は強く、そう信じている。

彼女は、人形が。大好きだ。

携帯をしてみる。

ライフからの不在着信が沢山、入っていた。

マゼンダは困惑する。

かなり年も離れているのに、何かと世話を焼きたがる彼女に、どんな反応をすればいいのか分からない。

十

「ねえ、甘名。なんで、そんな眼しているの？」

彼女はデジタルカメラを持ち出して、彼を写していく。

ミスティは少し、泣いた。

彼の眼は世界と自分に対する憎悪ばかりが募っている。

他人に対する不信感。

この状況だから敵意があるというわけではない。

元々、彼は誰にも心を開かずに生きてきたのだろうと思う。

彼の眼。それが、とてつもなく怖いのだ。

髪に熱心に、ヘア・アイロンをあてていく。

綺麗なストレート。

ミスティは彼を使って、写真集を作ろうと思った。

主人も、彼を見て、気に入ってくれたみたいだった。

色々な服に着せ替えていく。

そんな事をすればする程、彼の事がとても、とても愛らしくなっていく。

彼の顔にファンデーションを塗ったり、口紅をひいたりすると。妙な陶酔感に襲われる。もうどうしようもなく、愛しい感情。

主人に対する恋愛感情とはまた違う。

まるで、自分の所有物にしていくような感覚。

着せ替え人形に。思い通りのドールに、変えていくかのような。

「提案があるんだけど」

彼の声帯は自由にしている。

彼に与えられた自由は、眼球運動と声帯だけだった。

顔の表情は大きく変えられない。首の一つも動かさない。

唇を緩やかに動かせるだけだ。歯にも余り力が入らない筈だ。

それでも、彼の声は凜然としており、明朗だ。

「お前の能力。オレが生きていないと駄目なのか？ 毒を盛るなりして。早く死体にしておいた方がいいと思うけど？」

眼がまるで笑っていない。完全に本気で言っている。

そう言われる度に、ミスティは少しずつ心が痛んでいく。

「等身大のドールなんだろ？ オレは。辱めるなら、いっそ殺して欲しいな。それくらいの慈悲を与えてくれたっていいだろ？ 死蟻の人形ってあるだろ、それに替えておいた方がいいんじゃないか？ 死んだら、もう物質だから。後は何しようが、構わないから」

ミスティはなるべく、彼の言葉に耳を貸さないようにしていた。

主人からもそう告げられている。

「忠告しておくけど、始末するなら。命まで絶っておいた方がいい」

発声の方は平気なのに、舌に歯を押し当てると、それ以上、力が出なくなる。

舌の一つも噛めなくて、彼の怒りは倍増しているみたいだった。

彼の死への意思は相当、強い。

今にもそれに、感化されそうだった。

けれども、声まで眠らせる、という事が出来ない。

眼が本当に怖いからだ。

彼の視線に、本気の寒気を覚えて、彼の独白を許してしまっている。

甘名、彼は死を望んでいると同時に、眼の前の彼女を、ミスティを。

殺してやる、殺してやる、とばかり考えながら視ている。

おそらく、頭の中で、どうやって無残な死体に変えようか、そればかりイメージしている。

本当に彼は、他人を憎める人間なのだ。

ミスティは、怖いと思った。同時に……。

だからこそ、愛しい、とも……。

「しかし、ミスティ。お前、気持ち悪いとか思わないのか？ こんな男なのか女なのか、分から

ない容姿」

彼は自虐的に言う。

ミスティは返答に困った。

「お前って最低だよな？ また胸板に触るわ。腕に触るわ。首を斬ってやりたい……」
底冷えする声で言う。

十

否睡は眼を開けた。

どうやら、しばらくの間、気絶していたらしい。

どうも、頭に何かが引っ掛かっている。髪の毛が痛い。

髪の毛を天井に引っ掛けられて、吊るされている。

どうも、服を着ていない。裸だ。

それはまあいい。

両手両足。

無かった。

彼女は四肢を切断されて、吊るされている事に気付いた。

「あれ？」

何だか、自分の状態がよく分からない。

部屋のドアが開く。

男が入ってくる。

「お目覚めで」

黒斑の眼鏡を掛けた、少し陰気な男だ。

少しラフな部屋着を着ている。

「何だ、私、捕まったのか」

彼女は欠伸を始める。

「君は興味深いな」

男は言った。

そして、彼女の裸身をまじまじと眺める。

女としての機能。

……それがまるで無い。

見事に何も無い。

まず、生殖器が無い。そして排泄する為の器官も無い。

ついでに、両胸の赤い突起物も無かった。

彼女は欠伸を続けている。

「君は、一体、何なんだ？」

「『ドーン』に所属しているんだけど。お前、システム・ブレイカーって言うんだっけ？ お前

が研究しているのは、各種の“機関”だよな？」

「ご名答、続けて」

「能力者ってのを突き詰めた先には、“不死”ってのが浮上してくる。それから、生殖の否定、性別の否定。強力な能力者ってのは、それらの人間の限界に近付いていくらしい。ちなみに、私は実験体の一つ。人工的に、それに類似するものを作ろうとして生まれたものなんだな。そこまではいいか？」

「ああ、……やはり、調べた通りなのか」

彼女の全身には、孔が開いていた。

それは、塞がり掛けている。

それ処ではない。

彼女の切断した手足。

切断箇所の肉が盛り上がり続けている。

「で、私は実験の成功作の一体らしい。普通の人間がベースなんだけどな、他に聞きたい事は？」

「……じゃあ、君の方から、僕に聞きたい事は無いかい？」

「私を始末するのかしらないのか？」

彼は少し、考えているみたいだった。

「もう一人の彼。彼の方も、さっさと自分を始末しろ、って言っているらしいけど。弱ったな。僕はヒネくれ者だから、そうやって腹を括られていると、逆に惜しくなってしまう」

「じゃあ、服着せろ。こんなんでも、一応、恥ずかしいんだ。乙女の身体だぞ」

そう言いながら、彼女は全身を振り子のように振り回し始めた。

「排泄はどうやってやるんだ？」

「大気中に不要物を分解して流している」

「性欲とかはあるのか？ 生殖は不可能なのか？」

「性欲は無い。生殖も出来ない。お前からしてみると、それは幸福なのか不幸なのか？」

「僕には愛する人がいるから、不幸かな」

それは、射抜くような視線だった。何処か蔑みを帯びた声音。

「服、着せろよ」

彼女は悪態を付く。

ブレーカーは、ドアの向こう側にあった袋を取り出して中の物を見せる。

彼女のいつも来ている、ゴシック・パンクの服だ。落とし穴に落ちて串刺しにされた箇所に孔が開いている。

「含み針、火薬、スタンガン。ナイフ。自動小銃。随分と手の込んだものを……これは、没収だ」

そう言って、彼は簡素なTシャツとズボンを彼女に放り投げた。

「この部屋はミスティの能力が入り込んでいる。何かしようとしても、無駄だぞ？」

そう言って、彼は扉を閉めて鍵を掛けた。

否睡は心の中で、冷やかに笑った。

十

ブレーカーは虚空を眺めていた。

真っ白な部屋だ。

その中に、一つの縄がぶら下がっている。

首輪。彼の首を拘束する為の輪だ。

永遠に、死の淵へと拘束する為の輪。

自分で作った首吊り台を、ぼうっと眺めていた。

小さな背の無い椅子が置かれている。

首を絞めなければならない。

それは、きっと、決められた事なのだ。

ミスティ。

完全に壊してしまった女。

愛しくて愛しくて、無理やり手に入れた女。

自分が精神病質だったのは、後から理解した。

救いがたい程の病気だったのだと。他人を壊さずには、いられなかったのだと。

彼女はどうか、"眠らせる"という力を手に入れたみたいだった。自分の記憶を底に封じ込めてしまう力。

完全に、彼女は記憶を喪失していた。

彼好みの着せ替え人形へと変わっていた。

彼女と生活し続けていて、彼は思った。

.....死のうと。

償いのイメージが頭を過ぎる。

かつて、あれ程、求めて手に入れたかった女。

全てを所有して、全てを作り変えたかった女。

理想の女。彼が理想化した女。

もう、彼女は彼を視て、好きだ、愛しているとばかり言う。彼の好意を受け止め、彼の欲情を受け止める。そこに虚偽が何も無い。嘘偽り無く、彼女は彼を好きという。

その瞬間に、ブレーカーは彼女を永遠に喪失してしまったのだと思った。

もう、決して手に入らなくなったものになってしまったのだと。

精神医学の本を大量に読んで、自分が病気だった事を思い知らされる。

何とか、自分をマトモにしたいと思った。異常な執着性しか無い自分。

持っている衝動と言え。たとえば。

物欲。

情欲。

支配欲。

破壊欲。

何がしたかったのかを、頭の中に思い浮かべていく。

長い時間を掛けて、絞首台を眺め続けた。

一体、どれくらいの時間、見ていたのだろう。

時計を見て確認する。まだ、三時間弱。

もう、何日も眺めていたような気がした。

時間の感覚が、何処か彼方へと消え失せてしまったかのような。

彼女の眼を覚えている。

彼を蔑むような眼。

それを潰したいとばかり思って、踏み躪りたいと思って。途中から完全に引き返せなくなってしまっていた。

止められなくなった暴力性。破壊衝動。全てを踏み躪りたいという感覚。情熱。

肌に触れた時。無理やり彼女の服を引き剥がした時。

女は肉体で男を支配しているのだと知った。

何度も、何度も、挿し込んで。

次第に壊れていく彼女の顔と。

次第に濃んでいくような彼女の両眼から放たれる視線を視て。

彼は更に破壊衝動を増していった。

彼女の精神の全てを支配したかった。

彼を否定した彼女の全てを。……。

そして。

結果、……成功してしまった。

その瞬間に、彼は自分の死が頭を過ぎった。

もう、これは死ぬしかないな、と思った。

それ以外に考えられないな、と思った。

けれども、だ。

……もう、それから何年の月日が経つだろう。

忘れてしまった。

余りにも、ミスティを愛する、という日常を作り出してしまっていた。

歯車が破壊されていきそうだ。……。

……そう。

否睡とかいう女のせいだ。

彼女の嘲笑。

それに蝕まれそうになる。

あれ程、人体を破壊してもむしろ、支配されているのは彼の方ではないかと思ひ込まされる。頭を掻き耨りたくなる。

.....死ぬしかないんじゃないか。

自分の事を、そう思う。

変わってしまったミスティを大切にすること。

もうそれしか、彼には残されていなかった。

まるで、中身をそっくり替えてしまったかのようだ。

ミスティの顔形をした、別の女の、コスチューム・プレイのような。

もう、希死念慮しか湧いてこなかった。

支配する者とされる者。

果たして、それはどちらだったのか。

首を斬られるイメージ。

手足を落とされるイメージ。

そのまま、自分の性器を落とされるイメージが浮かび上がる。

分かったのだ。彼自身も大切なものを殺してしまったのだと。

そして。

あのもう一人の青年。

男の性器を切断して、女にしてみたが。

更に、その女が他の男の、あるいは女の性器を切断する剣を手にしてしまったかのようだ。意味の分からない.....。イメージ。

頭の中にイメージが広がり続けていく。

首。

自分の首を絞める感覚。

いつか、自分は首を括らなければならない。

それを忘れようとしていた。仕事に打ち込んで、忘れようとして。

しかし、.....イメージの奔流が頭の中に駆け巡る。

あの女のせいだ。嘲笑が頭の中で鳴り止まない。

「生きているの恥ずかしいから今すぐ死ねよ」

彼は明確にミスティに言った。

ミスティはううん、と顎に手を置いた。

しばし、二人は無言になる。

.....

「って、オレなら言うけどな？」

.....

ミスティは先日の日記の件を彼に話したのだった。

誰にも言えなかった事。ずっと悩んでいた事。

それに対しての答えがそれだった。

とまどい。

しかし、何処か吹っ切れたような気分させられた。

何だか、全ての事実が馬鹿らしくなる。

幸福とは、そんなものではないのだと、思い出させる。

ミスティは慎重に、彼の身動きを縛り付けながらも、今は歩いたり出来るくらいの自由を与えている。

何だか、どんどん丸め込まれていく感じだった。

何よりも、彼の視線、言葉のナイフが怖かった。

的確に、ミスティの良心に食い込んでくる。

おぞましく、背徳的な事をしているのだと、思わされてくる。実際、そうなのかもしれない。

だから、彼にある程度の自由を与えるしかなかった。

籠の小鳥を空に飛ばすような。

でも、飛ばす場所があくまで室内だ。決して窓の外には逃がさない。

彼女にとって、とても必要だから。

一緒に薔薇園に行った。

これから、ポプリを作ろうという話だった。

彼は今、両肩を剥き出しにしている黒いドレスを着ていた。

そして、頭には羽飾りの付いた黒いボンネットを付けている。

唇にはピンクのルージュが引かれている。

まるで、置物ようだ。生きた人間ではないかのような。

彼はもはや、この庭園の女王だった。

一枚の絵画に描かれた人物のように、彼は立っていた。

まるで、この世のものではないかのような。

「女が、男に女装させたいって願望。あれは男の男性性を剥奪して、男を自分の人形にしたいって思うからなんじゃないかな？」

「えっ？」

「ふと、思ってさ。お前はオレを人形にしたいと言っただろ、オレに男性性なんてあるのか？ オレは余り無いと思うけど、他人から見ると違うのか？ オレを人形にする意味ってあるのかな？」

そう言いながら、彼は薔薇の一つを摘む。

それをじっと眺めていた。

コーヒー・オベーションという名の薔薇だ。ミスティが特に気に入っている種類の一つ。

赤の中に不思議な茶色を帯びている。

他の薔薇も熱心に見ていた。

「凄いな、緑色の薔薇まであるのか」

「えと、それはグリーン・アイスと言います……」

「薔薇ってこんなに種類があったんだな」

彼は、白の中に黄緑の混ざる薔薇に、真剣な眼差しで見入っていた。

緑色の花、生命の不可思議さを喚起させる。

「そういえば、ミスティ」

彼は神妙な顔で言う。

「アイラインの引き方巧いな。どうも苦手でさ。後で教えてくれ」

ミスティはいきなり褒められたので、面食らった。

彼は立ち上がろうとする。

そして、そのままひっくり返った。

薔薇の中に突っ込む。

「ミスティ……」

彼は憎憎しく言う。

「もし、オレの顔に傷が付いたらどうしてくれる？ もう少し、身体を自由にしてくれるか。もしくは、今、抱き止めて欲しかったな？」

彼女は彼を抱き止める。

胸の鼓動が激しくなるのが分かった。

彼の願いを聞くわけにはいかない。彼の全身の神経をコントロールして、かなり筋肉が衰弱しているような状態になっている。これ以上、彼の肉体を自由にするのは危険だった。

しかし、どんどん彼の策略にはまり込んでいくのが分かるし、はまり込んでいってしまいたいような気分になっている。

そして、彼は悪魔的な事を囁いてきた。

「なあ。本当の意味で、三人で一緒に暮らさないか？ 幸せに。四人だっていい。オレの友人を助けてやって。まあ、どっちでもいいけど。他にもある、たとえば、お前の主人にはいなくなって貰って、オレ達二人で、この大きな城に住むとか、どうかな？」

彼女は頭が混乱しそうだった。

選択を幾つか与えている。

しかし、彼はきっぱりと別の状況に向かわないように、物事を押し進めていっている。
元々、ミスティは彼に対して、彼を正式に招き入れて、一緒に暮らそうと言った。けれども、彼は同じ言葉を繰り返すかのように言っている。
本当の意味で、一緒に暮らしたいと……………。
遠回しに、彼は別の事を言っているのだ。
そう。
彼の生活と行動を完全に保障して、自由にしろ、と言っている。
彼女が彼に使っている能力を解除しろ、と言っている。
……籠の鳥が飛んでいく。
この胸の感情は何だろう？ 分からない。
とにかく、彼の言葉はナイフだった。
そして、気付かされたのだった。
ミスティは、言葉のナイフに、弱いのだ、と。
「そうだ」
彼は笑った。
「なあ、鳥の翼が欲しい。そういう衣装無いかな？ ずっと憧れているんだけど。天使のような翼。それを付けてくれたら、喜んでポートレート・モデルになってやるからさ？」
ミスティは顔を覆った。
どんどん、彼が彼女の心の中に入り込んでくる。
彼の美貌が悪いのだ。その冷たさと悪意の中に、絶妙に優しさを混ぜ込んでくる。

十

ブレーカーは鉄格子から中を覗く。
その女は自らの髪を引き千切って、吊り下がった肉体を地面に下ろしていた。
手足の肉が盛り上がり、何とか渡したTシャツとズボンを身に付けたみたいだった。
彼は鉄格子の扉を開けようとする。
しかし、思い止まった。
心臓が少しずつ、脈打ってくる。
怖い……………。
そう感じてしまっている。
何故、彼女が怖いと思うのか。
それは、かつてのミスティを彷彿させるからだ。
どれ程、凌辱しても、屈しなかった彼女。
彼を憎悪し、蔑み続けた彼女。
しかし、何かの一線を越えてしまって、彼女は壊れた。
その瞬間に、彼自身も壊れてしまった事に気付いた。……………。

壊れたのは、彼の虚構の世界だった事に気付く。

ミスティを偏執的に支配しようとしていた自分。その仮面が崩れ去ってしまった。

一体、あれは何だったのか、と自分に問い掛ける。分からない。

何故、あれ程、彼女を支配し、所有したかったのだろう。

今となっては、導き出せない答え。

今はもう、今のミスティに対しての償いだけで生きている。

彼女が死ぬと言えば、死ぬつもりだ。覚悟は出来ている。

ただ、彼女はいつも彼に笑い掛ける。それが、とてつもなく辛く、苦しい。

彼女の屈託の無い笑み。とてつもなく美味しい料理。

たまに行う情事。全てが彼の罪悪感を倍増し、同時に、何故か以前よりも本当の意味で、愛しいと感じている。

涙が頬を伝わった。

きっと、この鉄の扉の中にいる女は、彼がどれ程、凌辱しても屈しないのだろう。ずっと、ずっと、頭の中に残り続ける嘲笑を続けるに違いない。

それが分かった瞬間に、彼はもう折れてしまった。

彼女をどうすればいいのか分からない。

倒すべき敵である事は間違いない。

それから、他にも何名か、彼を殺そうとしている者達がいると聞く。

ならば、それはそれでいいんじゃないだろうか。

それを、享受すべきなんじゃないだろうか。

それから、あの美貌の女のような青年。

彼の眼を見た瞬間に分かった。

彼も死にたがっている。しかし、同時に強い殺意も抱えている。

強過ぎる殺意のエネルギーが世界や他人に向いていき、同時に、それが逆流して、自分にも向き、自殺願望と酷い空虚感に襲われているに違いない。

彼もまた、ある種の病気を抱えているのだろう。そういえば、向精神薬を飲んでいると言っていたか。

心が病気な部分がある。それ故、必死さと。理解不能な魅力がある事も。

もう……男は理解していた。

きっと、彼らを招き入れてしまった時点で、自分達は敗北しているのだ、と。

彼らは能力者だ。しかしだ。

彼らは、一切の能力を使わずに、言葉と視線だけでブレーカーの心を折り、ミスティの心を掌握してしまっている。

彼らと言葉を交わす度に、巧みにブレーカー達の心の脆い部分に付け込まれていっている。

いや、ひょっとしたら、ブレーカーは始めから敗北していた。この浮遊城に住み始めた時点から。完全に。

此処は、空ろな生のみが漂っている空間なのだ。

生きていない筈なのに、生きているかのように虚構を作り上げてきた。

しかし、何故だろう。

あの美少女のような、美青年。

ミスティは少しずつ、彼の虜になりつつある。

このまま、ミスティが彼に惚れ込んでくれるだけならいいし、彼にミスティを託しても悪くないとも思ったのだが。明らかに、あの青年には明確な悪意があった。

絶対に、恋愛という形には収束しない。

それだけは分かる。

だとするのならば、どのような形で二人は歩むのだろうか。

分からないからこそ、もしかすると。それが光に繋がるのかもしれない。

「ご主人様っ！」

ミスティが彼を呼んだ。

「一緒に、写真撮りませんか？」

ブレーカーは、彼女に屈託の無い笑みを返す。

以前の彼には出来なかった事。

それは、他人を愛するという事。

自分自身の所有欲ではなく、在りのままの他人を愛する、という事。……。

十

「不満がある」

甘名は不機嫌そうに言った。

黒いドレスの背中に付けられた、翼。

それは、純白をしていた。

「オレは、黒い翼が欲しいんだけど」

尊大な物言い。

ミスティは笑った。

ブレーカーも笑った。

本当に、彼は傲岸不遜だな、と思った。

自分の立場というものを、一切、理解していない。

いや、だからこそ、本当に立場を破壊してしまったのかもしれない。

……………。

二人共、もう彼を殺せなくなっている。

彼を始末出来なくなってしまうている。

「黒いスプレー缶があったかな。羽を黒く塗り潰そう」

ブレーカーが提案する。

「あれ、結構、塗るの大変ですよ」

「黒い翼の衣装、買ってこいよ」

彼はますます、不遜な物言いで二人に告げる。

ミスティは甘名の背中から白い翼を外す。

そして、黒く塗ってみると言って、城の作業場へと向かっていった。

甘名とブレーカーの二人だけになる。

そういえば、二人での対面はこれが始めてだ。

.....。

「ああ、そうだ。否睡は始末しないのか？」

彼は仲間意識なんて、投げ捨てるかのような物言いで訊ねてきた。

「.....彼女はどうか。暴れそうで怖いから、地下牢に入れたままにしている」

「逆襲されるかも。あいつ、ミスティの能力効かないんだろ？」

ブレーカーは少し空虚そうな顔になる。

「それなら、それでいいかなって思う。この浮遊城はとっくに終わっていたんだ。君達は、死者の生活を覗き見しに来ただけだよ」

「ふうん」

何だか、蔑むような声。

「ああ、そうだ。教えておく」

彼は何となく、何か、とても下らないものを語るかのように言った。

「オレ達は多分、捨石だ。メビウス・リングってのが、様子見の為に送り込んだんだ。だから、後からお前を始末しにやってくると思う、それがいつなのかは分からない。オレもよく分からない存在なんだが。何でも、ドーンの中枢らしいぞ」

「.....初耳だよ。もっと早く教えて欲しかったんだけどね」

「いや、今、思い出した。あいつ、裏で確実に動いている筈だ。なあ、お前はひょっとして知っているんじゃないか？ メビウス・リングとかいうのが何者なのか。オレには興味が無いけどな」

何処となく、邪悪さが現れてくる。

「もし、現れたら。オレと否睡を自由にしろ。お前らに味方してやる。メビウス・リングと一緒に倒さないか？」

「.....君は何を考えているんだ？」

「そっちの方が、ドーンなんかにつくよりも、面白いと思ったから」

彼は楽しそうな笑みを浮かべていた。

自分の死なんて、どうだっていいと思ったら、人間はこうなるのだろうか。

暗鬱なまでの悪意が、彼の中には詰まっているかのよう。

底冷えする声で、鋭利に言う。

「どうだろう？ 一緒に花鬱達も始末しないか？」

「.....それは、裏切り、にはならないのかい？」

「何で？ 始めから仲間じゃないのに？」

「……………考えておくよ」

彼は陰気に笑った。

そして、庭園を離れた。

そのまま、城の空っぽの部屋へと向かう。

その部屋には、何も置かれていない。

一つのダンボール箱を除いて。

箱を開ける。

中には、ロープと椅子が入っている。

天井には、ロープを吊り下げる為のパイプが取り付けられている。

首を括る日。

それは、今日なのかもしれない。

死ぬべき日。

……………。彼は壁に持たれて考えた。

横にはロープと椅子。

酷い倦怠感に襲われた。

ロープを弄んでいく。自分の首に掛けてみたりする。

ぼうっ、と空ろに天井を見上げた。

自分は此処から、ぶら下がるべきなのだろう。死ぬべきなのだ。

冷たい死の感触のようなものが、ロープから伝わってくる。

それは触れれば触れる程、次第に密度を増していく。

……………。

メビウス・リング。

彼は『リフリジレイター』の秘密に迫っている。

甘名が教えてくれなくても、知っていた。彼らがある為に、此処に乗り込んできたのだろう事も気付いていた。

メビウス・リング。どうやら、そいつは何かしらの“秩序”を作り出そうとしている。それがどんな論理によってかは分からない。

しかし、その対極となる凍結を意味する『リフリジレイター』。

それを倒さなければならないと、メビウスは考えている。

彼はリフリジレイターの秘密をずっと、調べている。

……………、しかしだ。

しかし。

どちらに傾くべきなのだろうか。

自ら選ぶ死と、メビウスとの対決。

どちらでもいい。どちらだって、同じ事なのだ。もう、大切なものは、二度と、戻りはしないのだから。

じゃあ、どうすればいいのだろう。

大切なもの。……………。

過去のミスティは、彼が殺した。

今のミスティを、彼が守らなければならない。

けれども、守る。どういう事なのだろうか。

紛れもなく、彼は自分が死ぬ事だと思っている。そして、彼女を飛ばしてやるのだと。

鳥籠の外へと、飛んで行って貰う。

そして、新しい人生を歩んで欲しい。

それしか考えられない。

彼女の人生にとって、明らかに自分は邪魔なのだ。

だからこそ、彼女の為に、自分は死ななければならない。

しかし、だ。

何か出来る事があるのなら、やってみたいと思う。

十

ツイン・スラッシュは色々な相手に電話を掛けていた。

みんな、元気そうだ。

ちょっと、風邪をこじらせたとか、ギャンブルで大負けして借金を作ってしまったとか。そんな愚痴を聞かされたが、みんな元気そうだ。

自分の『レッド・オア・ブルー』が何処まで対抗出来るのか。

分からない、けれども、花鬱に近付きたい。

ズンヴィーとフォールス・メモリー。

どんな攻撃を行っているのか、よく分からない。

ツインの頭では、想像も及ばない。

だから、とにかくがむしゃらに戦って、がむしゃらに倒すしかないのだと思っている。

単純な事しか、考えられない。

「花鬱さんの知り合いを狙っているんですよね？」

シックな服装をした、ブラウンの髪の女が立っていた。

「ああ……、どーしたもんか。わたしじゃ無理だ。相手の狙いを見抜けない」

ツインは面倒臭そうに、壁に持たれる。

「どーしたもんかなあ」

「病院で待ちませんか？」

彼女は妙な提案をした。

「病院？」

「花鬱さんの御友人がいらっしゃるんでしょう？」

彼女は色々と思う処があるみたいだった。

「もし、私だったら。下見に行くと思うんですよ。楽しみは後で取って置く前に。……もう、

下見、済ませているのかもしれませんが。でも、どうせ動くんなら、可能性が高い方に賭けてみるのもいいと思います」

ライフと言ったか。

この女は、気付けば、積極的に花鬱達に介入しようとしている。

彼女は庇護対象でしかなかったんじゃないか？

「うーん、うーん」

ツインは言われても、迷っているみたいだった。

どう言えばいいのだろうか。

更に、敵はこちらの予想さえも念頭に入れているような。

頭がこんがらがってきた。

巧い、頭の使い方ってあるのだろうか。

ツインの下に、電話が掛かってきた。

彼女は電話を取る。

「はい、もしもし、何かあった？」

先ほど、電話を掛けた知人の一人だ。

ツインは凍り付いたように止まる。

ライフは眉間に皺を寄せた。

「ええ、そう……。そうなんだ。自爆テロみたい？ ちょっと待って、その死体に触らないでな？ わたしが今、向かうから。花鬱さまはちょっと、動けない」

花鬱は怒りを堪えつつ、一人になると言っていた。

一人で敵を探す、と。

もっと、ちゃんと戦略を練って、戦った方がいい。何となく、それは分かっている。

しかし、出来ないのだ。ツインと花鬱には。

単純に物事のトラブルが起きたら突っ込んでいって、単純に何もかも粉砕するしかない。

電話を切る。

ツインは走っていた。

その知人の下へ。

名前はロールン。少し、外国人の血が入っている。

此処から、2キロ程、先のアパートに住んでいる。

家の前に、近隣の住民の死体が転がっているとの事だった。

頭がトマトのように潰れた死体が。……。

ツインはかなり、焦った顔になる。

二人は、ロールンの家の前まで走った。

そして、彼のアパートに辿り着く。

住民の死体が次々と転がっている。

どうやら、死体から死体に感染するかのよう、攻撃が広がっている。

ツイン・スラッシュは背中に手を入れた。

それは、紙のようだったが、徐々に立体感を伴って形になる。

それは、一本の刀だった。

鉛色をしている。刃の部分が無い。

そして、刀を持っていない手で、腰に触れる。

何かを虚空から、抜き放った。

もう一本、彼女の手から刀が出現する。

そして、慎重に、階段を歩いていった。

「ライフさん、あなたの能力。教えてくれない？」

「えっ……」

「能力者でしょ。あなた、一緒に戦う以上。教えてくれないと」

ライフは黙る。

携帯が鳴り響く。

見ると、花鬱からだ。

何度も、不在着信が入っている。

ツインは刀の一本を地面に置いて、携帯に手をやった。

「はい、………えっ？ マジですか？ でも、私、あいつら倒しますよ。えっ……うーん……」

」

ツインは困った顔になる。

電話の向こうの花鬱は言った。

……もう、あたし達は降りよう。メビウス様に後は任せよう、と。

十

メビウス・リングは、アナトミアの街を訪れた。

そろそろ、花鬱達が何名か始末している頃かもしれない。

しかし、まだ一人も殺せていないかも。

花鬱には少々、所謂、“義”を重んじる節があるように感じられた。

メビウスにはよく分からない感情だ。

メビウスはシステムとして、動き続けている。

人間の感情など、まるで分からない。

システムの維持。

それだけが、正しい事だと信じているし。

そもそも、彼女はその為にこの世界に降りてきたのだと思っている。

これは、自分が生まれてきた宿命なのだと。

花鬱は使いやすい。

それで、選んだ。

彼女はルールに従うからだ。

ドーンには、ルールに従わない人間が多い。多過ぎる。

たとえば、否睡。彼女には余り、期待出来ないだろう。

メビウスの司令など、どうでもよさそうな顔をしていた。

実際、否睡という奴はどうだっていいのだろう。とても快樂的であり、破滅的でさえある。だから、信用出来る相手ではないが。別に害にはならないだろう、くらいには思っている。

能力者が世界中に溢れ出して、どれくらいの年数が経過しただろうか。

そして、メビウス・リングがこの世界に生まれ落ちて、どのくらいの年数が経つのだろうか。もう、覚えていない。

しかし、システムは動き続けている。

メビウスは携帯電話を取り出す。

いつも思うのだが、人間は奇妙なものを発明したと思う。

彼女は、登録してある番号に電話を掛ける。

「花鬱か？」

電話の向こうの人間は、まるで冷水を浴びせられたような声音で答えた。

「メ、メビウス様？丁度、良かった。どうすればいいか分からない。あたし達の応援に来てくれないでしょうか？ 敵はとにかく、どんな手段でも使ってくるつもりでいる.....」

「なるほど。どんな手段でもとは？」

「あ、あたしの友達とかを、殺しまくって。あたしを潰そうとしてる.....」

メビウスは少し、考える。

メビウスには分からない。他人の痛みが。

この肉体は、人間のそれではない。

無感情な、セルロイドの肉体だ。

球体関節によって、動き続けている。

「私はどう答えればいいのか？」

メビウスは神妙な声で言った。

本当に分からない、といった感じだった。

花鬱は黙る。.....。

「え、えと。とにかく、あたしは友人とか大切なんだ。狙われたら、どうしようもない」

「そうか。.....。お前を私の任務に巻き込んだのは悪かったかもしれないな」

それは温かくも冷たくもなく、ただただ事実だけを述べた物言いだった。

「この仕事が終わったら。お前は引け。こんな時、こう言えばいいの？ すまなかった。.....。他の人間を探す。次からは失うものがない人間がいい。しかし、中々、人材がないな。.....」

つまり、花鬱は所謂、クビ、という事だ。

しかし、そこには冷徹さは無かった。

メビウスに人間らしさは無い。

しかし、どうすれば相手に人間らしさを振り撒く事が出来るのかは、考えている。考え続けて

いる。

「花鬱。私が、全員、始末する。『システム・ブレイカー』『ズンヴィー』『フォールス・メモリー』『マゼンダ・ヴェルベット』の四名は、私が全員、殺す。お前はもう降りていい。とにかく、お前の仲間達を守れ。ただ……」

しばしの沈黙。

そして、数十秒後、電話の向こうで声が聞こえる。

「『ドーン』は、人間が維持していくべきものだと私は思っている。能力者の犯罪は人間が解決すべきだ。私は“超えよう”とした者を始末するだけだ。善悪はともかく、“超えよう”とした者。だから、お前達で、出来れば解決して欲しい。アナトミアの秩序を守るのは、お前の役割だ。たとえ、私からの任務を降りても。それは守って欲しい」

「はい……」

「それから、もう一つ。この四人以外にも。一番、始末しなくてはいけないもう一人の能力者がいる。実は本命はそいつで。この四人は、そいつに接触したから始末しなければならない。そいつは、四人を“端末”“媒体”に使う予定があるみたいだ。私はその本命のみを殺すつもりだったが……」

「ズンヴィーとフォールスのコンビに勝てる自信が無い。……彼女達を、始末してくれませんか？」

花鬱は完全に弱気だった。

今にも、ヒステリーかパニックを起こしそうだ。

「それから、否睡達が浮遊城に向かって。……連絡が取れないんです。否睡に付いていた子、甘名という子とも連絡が取れません。……、二人は始末されたかも……」

「そうか」

メビウスは状況を確認していた。

花鬱を責めるつもりはない。

おそらく、自分の人間考察が弱かったのだろう。

大切な人間を人質に取られたら、こうも人間とは弱いものなのか……。

メビウスは分からない。

人間の弱さが。……。

十

黒い翼が生えればいい。

漆黒の翼。暗い、黒い鳥の羽。

黒い羽が広がっていく。イメージ。

背中が裂けて、空へと伸びていく。

暗い空に広がる、自分自身の感情のイメージ。

甘名は眼を閉じて、考え続ける。

空を飛びたい。

地上は死だ。

死の空間のような場所だ。

彼はそう思い続けている。

背中から生えた黒い、暗い翼が。

空へと伸びていけばいい。

天空に、巨大な黒い翼が広がっていくのだ。

黒い鳥の羽のイメージ。

それは、おそらくは、彼の世界に対する失望と敵意の象徴だ。

この世界が、真っ黒なモノによって、塗り潰されてしまえばいい。

心の中でわだかまる感情。

それは、この世界に対する敵意だ。

ただ、何もかも、壊れてしまえ、と思う衝動。

同時に。

自分には、それが出来ないのだと、彼は思っている。

.....

ミスティはもう、敵とか味方とか立場とか関係が無かった。

おそらく、ブレーカーもそうなのだろう。

彼に掛けた能力を解除したくない。

すれば、彼は飛んでいけよう。何処かへと。

彼をこの巨大な鳥籠から、決して逃がしたくない。

何故ならば、彼は、何かの為の。大切な何かだ。それは何なのだろう。今はまだ、言葉に出来ない。

作業用のエプロンを身に付けて、黒いスプレーで、丁寧に白い翼を黒く塗り潰していく。

意外と繊細な作業だ。

中々、全部をちゃんと黒く塗る事が出来ない。

いらぬダンボールの上に置かれた白い翼は、ようやく半分程まで、黒く染まっていた。

そして、スプレーを塗る前に翼に触れてみて気付いた事がある。

この模型の翼、作りが甘い。.....

安物だ。

羽がぼろぼろと取れていく。

スプレーが乾いたら、接着剤で丁寧に貼り付けようと思った。

ああ。ミスティは思う。

何だか、理想のドールを作っているような感覚。

ああ、愛しいな、と思った。

.....

甘名は考えている。

自分の性的なものに対する敵意は何処からやってくるのだろうか、と。
それは、果たして、この世界と折り合いを付けられるのかと。
彼は人を愛せないし。他人との接触が本当に気持ちが悪いと考えている。
その中で。
他人を大切にすることが出来るのだろうかと。
人は人を愛して、情愛に及び。子孫を残していく。
愛が、官能が美しいと感じる。
実際、それはある種の正義。正しさなのだろう。
では、自分は一体、何なのか。分からない。答えが出ない。
しかし、自分もまた官能を肯定しようとは思わなかった。
それが、自分が自分であるという事。
性に対する憎悪の在り方も。様々な形があると思っている。
様々な形で、人は人を愛するように。
様々な形で、人は人を愛さないのだとも。
たまに感じる。自分自身の肉体が腐敗していくんじゃないかという感覚。
何故、自分は性的なものを憎悪しているのだろうか。
それは、心理学、精神医学、精神分析などの言葉ではなく。
自分自身、自ら何かの解答に達したい。そう思い続けている。
自分が存在しているという意味。自分自身で自分の意志を創造するという事。
決して、答えは出ないかもしれない。けれども。
本当は何処かで思っている。生きていたい、と……。
この世界の何もかもが、気持ち悪い。
ミスティとの触れ合い。
その気持ち悪さの中で、何処か。何か意味があるのだろうか。
交流の意味。

十

欲と支配。
欲と支配が、この世界に蔓延している。……。
……………。
Aは。
恋愛コンプレックスだった。
沢山の女に蔑まれて生きてきた。
ある日。
アニメを観て、Bという女性キャラクターが。
少し現実の女臭くて。

こいつは一向に今までのカタルシスを発散させるべく。

投影している主人公に靡きもしない。

主人公は嘆きよりも怒りを募らせていく。

しかし。

Aはこれまで培ってきた、かつてアニメ作家になる夢の為に磨いた技法で。

そのキャラクターの裸婦画を描いた。

生々しく。生々しく。男に口で奉仕している絵。

涙を流しながら。屈辱と欲に塗れて。

男の性器をくわえている絵。

ドス黒い感情を、突き立てるように描き上げた絵。

それから、Aはそのキャラクターを愛せるようになった。

率先して、そのアニメの画集やフィギュアも買った。

男は、晴れやかな顔だった。

彼は彼女の肉体を奪い取ったのだ、と。

.....

携帯で。様々なブログを眺めていた頃にかかれていた、男性の欲望に関する考察の一つ。

マゼンダが底冷えし、おぞましく思ったものの一つ。

.....

この時。マゼンダは。

その男ではなく。

そのアニメの女性キャラクターと自分が重なった。

強姦され続けるような、感覚。この世界にあるものの、全てから。

強姦者には、顔が無い。真っ黒だ。

マゼンダは死ぬ。心が殺され続ける。ずっと、ずっと。

暗い海の中から、這い上がりたい。

手を差し伸べてくる人。そんな人に巡り会える事が出来るならば。

愛する男性。理想像の男性。

愛のある性行為。

マゼンダが望む世界。

他人に認められたい。

欲と支配の世界ではなく。愛のある、官能の中で。生きられたならば。

いつか。理想の男性を探しに行こうと思った。

彼女の事を、完全に愛してくれる。

完璧な、男性。

理想の男性。いつか、巡り合えるだろうか。この泥沼から救ってくれる。

部屋の中に、大量に敷き詰められたヌイグルミ。

彼女を抱擁し、安心を与えてくれる温もりだ。

彼女は、男性の代わりに、人形に恋をしていた。

完璧なアオバの姿。

何だか、今日は彼女が憎い。

美し過ぎて、美し過ぎて。憎い。

顔。顔が気持ち悪いのだ。まず、男は女を顔で判断する。

人形のアオバ。何度も何度も、傷を入れてもなおも。美しいアオバ。

何故、だろう。今日は。特別何かが苦しかったわけじゃない。でも、少しずつ、少しずつ。

蝕まれて。行っている。

頭の中に、雑音が入っていく。沢山。沢山。沢山。沢山。

めりっ、と彼女はアオバの首を掴んで、もいだ。

アオバの首が、地面に落ちる。

何だか、安心した。

アオバは、自分と同じになったのだ、と。……。

その後。二時間近くして。

マゼンダは、絶叫の叫び声を上げていた。

絶対に取り返しのつかない行いをしてしまったのだと、理解したのだった。

十

少し前に遡る。

メビウスは、花鬱の前に現れた。

「フォールス・メモリーとズンヴィーの二人を倒して欲しい。お願いします」

「分かった」

メビウスは即答した。

メビウスは、ズンヴィー達によって殺された死体達を調べる。

実際、彼女は死体に指で触れた。

強烈な火花が、メビウスの全身を駆け巡る。

「なるほど」

彼女は何事も無かったかのように、言った。

「これは電磁波だ。生体電流か何かなのだろうか。人間だったら簡単に殺傷出来る力があるのだろうか。花鬱、お前は明晰な判断を下していたと言っていい」

やはり、自分だけでは、手に思えるものではないんじゃないのか、と花鬱は思った。

彼女を呼んだのは正解だったのだと。

「この者達は、私が倒そう。しかし、花鬱。お前は守るべきなんだろう？ お前の大切な者達を。私はこの者達の始末に向かう。お前はお前の大切な者達を守る事に勢を尽くすんだ」

メビウスは自身の能力である『ウロボロス』を発動させる。

風が軋み出したように思えた。

花鬱は一体、何が起こったのか分からない。

それは、環を描くような力だ。

環によって、空間の理を読み取っていく。

メビウスは宙へと浮かんでいく。

完全に重力を無視していた。

空高く、彼女は舞い上がる。

そして、天空から地上を見下ろした。

自身の能力である、円環の蛇の力を街中に送り込んでいく。

それは、小さな風のような風だった。

誰もが、只のそよ風が吹いているのだと思った。

「能力者というものは、独自の生体反応がある。私のウロボロスは、それを感知する事が可能だ」

突風がアナトミアの空を覆った。

それは、風のようなものだったが。

実質として、それは空間のねじれの現象だった。

空間と空間に歪を生み出す。

それが、メビウスの能力であるウロボロスだ。

アナトミア中に、彼女の能力が及んでいっている。

これが、ウロボロス。

彼女は、さながら、魔王のように君臨していた。

「ねじれ、とねじれの中には、鼓動を感じ取る事が出来る。歪なねじれの鼓動こそが、敵だろう」

さながら、地図を作っていくようなものだ。

アナトミア全体に存在している形の全てを把握する事が出来るのだろう。

ウロボロスの渦は、みなに見えない。

しかし、メビウスは完全にアナトミアにいる者達の、形状の一つ一つを把握したようだった。

「成る程。此処から、先。数キロ程先のビルの屋上で様子を伺っている。彼女達だろう、そいつらを倒せばいいんだな？」

花鬱は頷いた。

圧倒的だった。

一切の小細工が通じない、強さ。

これが、神の力とされる、ドーンの中枢であるメビウス・リングの力。

魔王の力。……………。

「ふむ？」

彼女は首を傾げた。

「可能ならば、やはり私ではなく。人間が討伐すべきだろう」

花鬱は沈黙している。

「花鬱。お前が折れたとしても。他の奴らはそうではないみたいだがな」
メビウスはしばらく、様子見する事に決めた。
勿論。花鬱の要望は汲み取るつもりだ。
彼女の友人知人に、危険が及ぶならば、すぐにメビウスが手を下さなければならない。

十

ライフはロールンを連れ出して、アパートの外に出た。
部外者、無関係な人間を、絶対に殺させるわけにはいかない。
やはり、この敵ばかりは自分達で倒さなければならないと思っている。
花鬱はああ言っている。しかし。
ツインは自分の取り出した刀を死体の傍に近付ける。
何らかの衝撃が、刀の中に入り込んでくる。

「間違いない」

彼女は確信していた。
おそらくは、自然界にある何かを操作していて。
それは、彼女の能力と近いものなのだろう。

「電気？」

ツインはその事に思い至る。
ツインの能力である、レッド・オア・ブルーは磁力を操る能力だ。
その為か、電流なども僅かに感知する事が可能だ。
アパートの部屋の中を見回す。
そして、刀を向けていく。
電気は空気中に存在する。おそらくは、その波動のようなもの。電磁波だろうか。それを送り込んで、トラップにし。人間を内部から爆発させているのではないか。
アパートの室内には、沢山のトラップが仕掛けられていた。
死体も横たわっている。
死体にも仕掛けられている。
何て事だ。
もう少し早く、自分の能力を使っておけば、すぐに敵の居場所を突き止められたかもしれない。

。ツインは“痕跡”を辿っていく事に決めた。
電気の流れが強い場所を、磁力によって感知していくのだ。
そう、使い方こそ全然違うが。類似した能力なのかもしれない。
外に飛び出す。
刀を向けて、痕跡を辿っていった。
全力疾走で走る。

第六章 ソリッド・ブレイド

ズンヴィーとフォールスは。

別々の場所で育ったが。

お互いが、お互い、同じ臭いを共有していると感じていた。

最初に、二人が会った頃から。

ああ、同志だ、と。

だからこそ、肌で触れ合い。お互いに行動を共にするようになった。

どちらも、苦しむ人間の顔を見るのが大好きだった。

綺麗だなあ、とってしまう。

情感。二人は交差するように、互いの情感を受け入れあっている。

他人を殺戮したいという事。押さえ切れない衝動。

舌で蜜菓子を嘗め尽くしたいといったような。愉悦感。

この快楽を分かち合いたい。

まるで、海と溶け合うような感覚なのだ。

死に行く者の、悲鳴が聞きたい。

それは、とても美しく。安らかなメロディーだ。

空腹感を満たすような。

何らかの欠落を補い合うような。

……………。

分かった事は。

あのだらしのない顔立ちの女。

あの女もやっかいだ、という事だ。

必ず、始末しなければならない。

必ずや、障害になるだろう。

二人の意見は一致していた。

「まさか、あたしの『キャンサー』の正体を見破ったっての？」

彼女は呆然としていた。

何故、見破ったのだろうか。分からない。

双眼鏡で眺めている限り、彼女は刀を突き付けていただけだ。ならば、あの刀に何らかの秘密があるのか。

早めに、敵の能力の全貌を理解するべきだ。

さて、どうやって倒すべきか。

「やはり、応援を呼ぶべきなんじゃないかなあ」

フォールスは言った。

携帯電話を取り出す。

「いや」

ズンヴィーが言った。

「俺が直々に始末してやるよ。簡単だろう？ 花鬱じゃあるまいし。何とでもなるだろう」
虚栄心と攻撃性が入り混じっている。

二人は顔を見合わせる。

そして、濃厚なキスを交わした。彼女達の愛の触れ合い。

「さて、行ってくるぜ。祈っていてくれ」

ピアスを舐めながら、ズンヴィーは向かった。

十

「連絡がとれねえ、あの女っ！」

ルーザーは携帯を壁に投げ付ける。

隣では、カサネがびくついたような顔をしていた。

「舐め腐りやがって。ああ。兵隊は用意している」

カサネの能力が失敗した事の報告依頼、まともに連絡が取れていない。

それに対して、ルーザーが怒り狂っている。

彼は少しずつ、正気を失い始めていた。

無くした腕の屈辱。

その恨み辛みで、我を忘れ始めている。

「花鬱をぶち殺すんだよ。このままだと、あの女を招き入れた、俺の面子が保てねえんだよ。

分かっているよな、カサネ。なあ？」

カサネはまた、小刻みして震える。

片腕が義手の男は、マンションの中に掛けられていたショットガンを取り出す。

「全員で、花鬱を射ち殺すんだ。そうすれば、勝てる。鉄砲玉は何名か必要だがな。ヘマをしたり、最近、上納金の出が悪い若い奴ら、いただく。奴らを最前線に向かわせる。マフィアを舐め腐りやがった奴は赦すべきじゃない、そうだろ？」

ドスの効いた声。並みの者ならば、震え上がるだろう。

「何が『能力者』だ。あいつらは只の大道芸人だ。何も変わらねえ、俺達で殺すんだ」

ルーザーは、飾ってあった上物の花瓶をカーペットへとぶちまけた。

かなりの怒りが溜まっている。

ずっと。

ずっと、女共に舐められまくっている。

理性の一線が外れそうだ。

カサネは、そんな彼に完全にビビっていた。

カサネは自身の能力を、殆ど何の役にも立たないものだと思っている。

だからこそ、組織の力を欲した。

そして、組織の中にいる事に対する安心感を覚えた。

実際、安心を手に入れた。只のゴロツキでしかなかったカサネ。
支配される事によって、得た安息、それはとても大きかった。
「ラ、ライフの奴なら、寝首かく事、出来ると思いますぜ」
カサネは言う。
これで、少しでも上司の怒りを緩和させなければならない。
出なければ、下手打つと、責任をカサネが取らされるかもしれない。
「ラ、ライフの奴。大切な友人がいて。名前、マゼンダって言って。AV女優やってるんですよ。ライフはそいつをえらく可愛がっていて、そいつ脅せばいいんじゃないですかね」
ルーザーは今度は、壁を蹴り続けていた。
そして、しばらくして、ふっと呼吸を平常に戻す。
「お前、何だって？ もう一度、言ってみろ。なあ、何だ。詳しく教えろよ」

十

花鬱は地面に蹲っていた。
そして、仕切りに、色々な友人知人に電話を掛け続けている。
やはり、駄目なのだ。
商店街の人々。バーのマスター。カジノの男達。エステサロンの女達。
みんな、彼女を慕っている。
誰一人として、殺させるわけにはいかない。
彼らを守りたいという事。
それは、システムを維持したいという事だ。
システムそれ自体は、善でも悪でもないのかもしれない。
様々な人々が、様々な認識でシステムの存在を感じる。
彼らを大切に思う。しかし、彼女は自分自身を過大評価したくなかった。
ドーンに付いていなければ、ただの殺人鬼なのだ。
花鬱は、ある意味で言えば、その程度の人間なのだ。
それでも、みなに慕われている。だから、本当に必要な時は、行動に移したいと思っている。
けれども。
殺す事は、いつだって出来ると思っていた。
けれども、辛い罪悪感の中に置かれている。
何度も、何度も夢に見る。
殺した相手の幽霊達。
彼女の罪悪感が、具現化して形となって現れているのだ。
振り払いたいとは思わない。彼女は、その罪の意識と共に生きるのだ。
贖罪というよりも。何だろう、帳尻合わせと言った方がいいような気がする。
花鬱は能力者としての、一線を超える事が出来なかった。

人非人になる事が出来なかった。

殺す事が出来ても。殺す力を持ってしても。殺す覚悟が無かった……。

だから、その代償として。呪いとなって、過去の罪が反復してくる。

自分が生きる意志。

それは、このような悲劇を繰り返させない為だ。

ツイン・スラッシュは。

大切な、友人だ。

可愛い子なのだ。

彼女に、こんな思いをして欲しくない。

人間として、生きて欲しい。

真っ赤な情念。その中で生きるという事。

それは余りにも辛く、同時に何も生み出さないのではないかと思っている。

十

ツイン・スラッシュは、路地裏に差し掛かる辺りで止まった。

何となく、違和感を感じたからだ。

立ち止まる。

「俺なあ、お前殺そうと思ってるんだ。お前なら、殺せるって思ってねえ」

ブランド物の、ジャケットを羽織っている。

その下に、エナメル風の服を着込んでいた。

間違いない。

この件の敵だ。

そして、渡された写真に見覚えがある。

ズンヴィー。

「質問なんだけど、何で。俺がわざわざ、お前の前に姿を現したって事なんだけど」

ツインは考える。

そして、答えた。

「私を絶対に殺せるって思っているから」

「ああ、そうだけ。それから……」

けけっ、と彼女は笑う。

そして、唇をめいっぱい歪める。

「俺の相棒に、お前の友達を沢山、殺させる為だ」

ツインは頭の中に、血が上った。

全力で、この女、ズンヴィーの下へと向かっていく。

「蜘蛛の巣に入り込んでくる、蝶だなああ？ ああ、お前は蛾か。醜いもんねえ」

ズンヴィーは楽しそうに、嘲笑っていた。

破壊衝動ばかりが、眼球の奥に浮かんでいる。

ツインの肉体が、宙吊りにされていく。

何も無い空間に、浮かんでいく。

首が、少しずつ、少しずつ、締め付けられていく。

「『ネック、ネック、ネック』と呼んでいる。花鬱じゃ無理だが、お前なら、殺せるよな？」

見えないピアノ線が、ツインの首に食い込んでいた。

どうすれば、向け出せるのか。

試しに、自分の首筋を指で触れてみる。

何の感触も無い。

ツインの頸動脈が閉まっていく。思考する事も徐々に困難になっていく。

彼女の顔は膨れ上がっていた。鬱血が始まっている。

ああ、意識が無くなるなあ、と思った。

何も無い空間から。

彼女は二本の刀を取り出す。

ズンヴィーは、眉を顰めた。

悪あがきだろうが、しかし、攻撃の手を止めるつもりはなかった。

刀と刀が、くるくると回る。円を描く。不規則ではなく、規則的。途端。

刀の一つが、ズンヴィー目掛けて襲い掛かってきた。

彼女は、それを難なく避ける。

しかし。

もう一本の刀も、彼女の下へと襲い掛かる。それも難なく避けた。

刀と刀が交差する。そして、再び、引き離れていく。

二本の刀は、路地にある木々を切り落としていく。

瞬間。

刀が切り落とした、太い木の枝と木の枝が、ズンヴィーの下へと襲い掛かってきた。

思わず、彼女は仰け反るが。さばき切れなかった。

二本の木の枝と、木の枝が、交差し、それぞれズンヴィーの腹と背中に激突する。

彼女は思わず、悲鳴を上げた。

敵の能力。

それを、理解する。こいつは。

磁力を操るのだ。

刀を媒体にして、次々とS極とN極の磁石を作っていく。

次々と、刀で切り付けられたものが、ズンヴィーへと襲い掛かる。

ズンヴィーは能力を解除しなかった。

そのまま、ツイン・スラッシュを締め落としていく。

激しい、衝撃音。

すとん、とツインの身体が、地面に落ちる。

数分間の間、意識が朦朧としていた。

ぼんやりとした眼で、辺りを見回す。

見ると。

ズンヴィーが血塗れで立っていた。

彼女の脇腹には、ツインの刀の一本が突き刺さっており。背中から胸にかけて、もう一本の刀が突き刺さっていた。

「くうう、……」

ズンヴィーは迷わなかった。

すぐに、逃走に移った。

ツインは頭が混濁していて、追う為の余力が残されていない。

しばらく、十数間程。頭がぼうっとしており、なかば気絶していた。

死ぬ、寸前、ギリギリだった。

そして、立ち上がる。

この敵は、ツイン一人ではどうにもならない。

花鬱に頼りたい。あるいは……。

十

「コシュマールさんが、協力してくれるって」

電話越しのフォールスの声は不安そうだった。

「そか、やっぱり怪我してでも立ち向かう甲斐はあったなあ。俺が重症だって、聞いて。重い腰を上げてくれたんだな。嬉しいぜ。それに、あのもう一人の女の能力も大体、分かった。詳細を話す」

ズンヴィーは相棒に、ツイン・スラッシュの能力の概要を告げる。

「分かった。あなたは、少し休んでいて。後は、あたしが何とかするから」

「分かった……、少々、辛い……」

ズンヴィーは、地下病院へと向かう事にした。

表社会での治療を受けられない、犯罪者ばかりが向かう闇病院とも呼ばれる場所。

脇腹が酷く抉られている。ダメージの面積が広いので、傷自体は浅く脂肪で止まって、内臓へのダメージは少ないだろうが、それでも酷い激痛に襲われていた。

肩の骨にも亀裂が入っているだろう。

脇腹は布でキツく縛っていた。

死ぬ程の傷ではないとは思いますが、あまり身体を動かさない。

「しかし……、コシュマール。やってくれるのかな。あいつ、確かリストに載らずに。クリミナルじゃないんだっけ」

空を見上げる。

もう、夜だった。

憎しみで、眠れそうにない。

彼女は、ライフルを組み立てる。

やはり、身体にムチ撃ってでも。何とか、一泡吹かせてやりたい。

十

輝くスポット・ライト。

浅黒い肌。

金髪のソバージュが揺れている。

観客達は絶頂の顔になる。

彼女は、前の観客の頭をブーツで踏み蹴っていく。

それ以外は、一矢纏わぬ姿だ。

浅黒い肌をした女は、ストリッパーだった。

街で一番大きなカジノの隣には、夜だけ開いている巨大劇場があった。此处では、アンダー・グラウンドなイベントが夜毎、開かれている。一種の見世物小屋だ。

剥き出しの乳房。剥き出しの性器。

視線に晒されながら、彼女は官能に酔う。

自身が観られる性、である事を実感する。

男達の歓喜の視線。女達の羨望の視線。どちらも愛しい。

人々の欲を浴びる事が、何よりも恍惚だ。

スポットライトは光輝き続ける。

彼女は自分の出番が終わり、楽屋裏に向かう。

服を着る。

携帯電話を見る。留守電が何件か。それに掛けてみる。

「はい、もしもし」

.....コシュマールさん、お願いします。助けてください。

彼女は鼻で笑う。

フォールス・メモリーからだ。

しばらく事情を聞いた後、依頼を受ける事にした。

ズンヴィーが怪我をしているらしい。強敵だそうだ。

コシュマールは重い腰を上げる事にした。

同業者の面倒は見ておいた方が、後々の仕事でも役に立つ。

しかしだ。今回、渋ったのは。あの例のヤバイ女だからだ。

そのうち、コシュマールにも危険が及ぶ虞がある、遅いか早いかの違いでしかない。だから、そろそろ、彼女は始末するべきなのだろうと思っている。

カニの絵。

コシュマールは、蟹の絵が好きだった。

食べ物としての蟹は余り、好きではない。

蟹の絵。それは、彼女が幼少期の頃、テレビで流れていた妖怪か怪物のアニメの中に登場していた恐ろしい蟹の怪物だった。それが鮮明な記憶となって残っている。

それから、多少、年齢を重ねて。ある時、絵画展にて幼少期に残った怪物ガニの姿に似たものを見つけた。それは、真っ黒に背景が塗り潰されて、燃え盛るおどろおどろしいカニの絵だった。絵の説明が額縁の下に載っていて、どうも破壊の象徴として、カニをモチーフにしたらしい。

そのポストカードを気に入って買った。

更に、背中や腕に、そのカニの絵をプリントしたいと思った。

著名な彫師に、ポストカードの絵を見せて、カニの絵を彫って貰った。

それからの事だ。……。

ある晩、背中がうずき出した。

どうやら、カタカタと、背中から何かが這い上がろうとしているらしい。

ああ、自分の肉体から抜け出したいんだな、とコシュマールはすぐに分かった。

余りにも、その異変を自然と受け入れていた。

彼女の背中に住むカニの絵は生きている。

彫られた絵には、念が籠っている。

それから。

最初に人を殺したのは、くだらない劇場の楽屋裏でのいざこざ。

何だったか、金銭トラブルだったような気もするし、恋愛の、男を取った取らなかった、だの、そういった下らない話だったような気もする。

とにかく、そいつは此方を殺そうとしてきた。

手には刃物を握り締めていた。

実際、やってしまったのは、ただの正当防衛だった。

背中のカニが、外に出て、そいつをズタズタに引き裂いてしまった。

死体は無残だった。

彼女は、それを更に細切れにして、ポリバケツの中に押し込めた。その後、地中深く、埋めた。

コシュマールは、視られる、という事を陶酔的に思っている。

自分の肌、肉体。視線。

それらを受け入れるという事。

フォールスとズンヴィーの依頼で、彼女は動き出す。

別にこの仕事は副業だと思っている。

ただ、彼女は人を殺す事に罪悪感が無かった。

それは、確かだ。

殺す事の罪悪感があるか、無いか。

それは、きっと決定的なものなのだろう。

フォールス・メモリーは、ツイン・スラッシュと花鬱を始末したい。

応援は頼んだ。

しかし、ズンヴィーを負傷させた、あの女だけでも殺してやろうと考えていた。

自分の能力は見破られている。

ならば、どうするべきか。

その事を、逆に利用してやればいいのではないか。

他人を殺せる道具なんて、幾らでもある。

彼女は服の中に、銃身を切り詰めたショットガンを隠し持っていた。

能力以外でも、殺せる方法など幾らでもある。

これを、敵の脳天にぶち込んでやれば。殺す事が可能だろう。

引き締まった肉体が、揺れる。豊満な身体。自分の肉体には自信がある。

フォールスは、全身から強い色香を漂わせている。

巫女装束に似せた服。

桃色の花束が描かれている。

髪の色も桃色。彼女の長い髪が、靡く。

彼女は水商売人でこそ無いが、自分の豊満な肉体に自信を持っていた。

この肉体で、“女”を虜にしてきた。

女の肉体。何処までも、麗しい。潤いに満ちている。

男の肉には、そんなものを感じない。男にはまるで欲情しなかった。

ズンヴィーは、今までの女の中で。もっとも肉体的な相性が合う相手でもある。

そんな彼女の肉体を傷付けた事は、絶対に赦さない。

フォールスは落ち合う場所に向かっている。

約束の時間には間に合った。

落ち合う場所は決めていた。

夜のデパートメントの、地下駐車場だ。

女は既に、その場所に来ていた。

そいつは、浅黒い肌をしていた。

フォールスやズンヴィーのように、目立つ服装だ。

露出度の高い服を纏っている。

カニだ。

カニの刺青が全身に彫られている。

フォールスは刺青に見惚れていた。まるで、本物のようだ。

「花鬱を殺すと」

女は言った。

「ええ」

フォールスは頷く。

そして、心と思った事を口にする。

「あなた、あたしの好みかも。ズンヴィーも好きだけど。お仕事が終わったら、あたしとお相手してくださらない？」

フォールスは自身の唇を、艶かしくなぞる。

「考えておくわ」

女はそっけなく、言った。

フォールスは、ちえ、と詰まらなそうに言う。

コシュマールは、両手の黒い長手袋とボンテージ・ブーツだけの姿になる。

それ以外には、一糸纏っていない。

彼女は、浅黒い裸体を晒していた。

女が見惚れるような肉体だ。

彼女の背中に張り付いた刺青が、びりびりっ、と剥がれていく。

黒い靄のようなものが、彼女を取り囲んでいた。

次第に、それは深く、濃くなっていく。

「こ、このまま行くんですか？」

フォールスは顔を紅潮させる。

「当然でしょう。能力を全開で行かないと」

彼女の肌に彫られた、カニの刺青が少しずつ薄くなっていつている。

真性のストリッパーだなあ、とフォールスは思った。

しかし、不思議と下品さは無い。

極限まで洗練された、肉体美。

ああ、素敵だなあ、と彼女は見惚れていた。

十

マゼンダは仕事を終えて、アパートに戻った。

何故か、アパートの鍵は開いていた。

中には、土足で何名もの男達が立ち入っていた。

明らかにカタギではない。

独特の職業の者達が持つ、異臭。

「あのさあ、俺。カサネって言うんだけど」

彼は室内で、煙草を吸い始めた。

彼女の部屋が汚れるのを構わずに、灰を落とし始める。

「マゼンダちゃんだっけ？ ライフの奴の親友。俺さあ、上司から言われているんだよねえ。ライフの奴があんまり、舐めた真似出来ないように。お前に来て貰おうってさあ」

紫煙が待っている。マゼンダは煙草の臭いが嫌いだ。

ヌイグルミ達に香りが移るのが嫌いだ。

「ああ。お前、あれか。他の組織の処にいる道具か。なら、仕方ねえなあ。面倒事起こすの。商品に傷付けるわけにはいかねえからなあ」

はあ、と彼は深く溜め息を付く。

「ケジメ取らされるのは、嫌なんだよなあ。俺」

カサネはマジック・ペンをポケットから、取り出す。

そして、マゼンダの前に来ると、彼女の額に丸を描いた。

「これさあ。出来るだけ、消さないでいてくれない？ ああ、そうか。お前の仕事ってあれか、じゃあ」

彼はマゼンダの首の後ろに、また丸を描いた。

そして、髪を掴み上げて、側頭部にも、丸を描く。

「監督に言っといてくれねえ？ どれかは残しておいてくださいってさあ。いざとなったら、お前、人質に取りたいんだよお」

「あ、あ、あのお」

「んーん？」

カサネは舐め回すように言った。

「顔は駄目なんだよ。お腹だったらいいよな？ でも、服脱ぐから痣になったら拙いの？ なあ、俺はお前を拷問しないとイケなくなるんじゃないか？ てめえが、俺に楯突こうってんならなあ。こっちだって必死なんだよ。俺の首が掛かっているからなあ。下手打ったら、俺が捌られるんだよお。分かってるのか？」

彼は淡々と歩いていく。

「さてだ。お前から、ライフさんにお電話掛けてくれねえ？ 俺が出るからさあ」

男はへらへらとした顔になる。

「安心しなよお。俺とライフさんは旧知の仲なんだよ。手荒くしねえからさあ。只、ちゃんとしたコミュニケーションを取りたいだけなんだよ、分かるか？」

彼は首を、こきりこきりと鳴らした。

「ライフさんは言ってんだよ。ウチの組織に。花鬱を倒したい、ってさあ」

ドスの効いた声。

カサネはがしっ、とマゼンダの腹を踏み付けた。

そして、乱暴に彼女の髪を掴んで、引き回す。

そして、男は彼女に怒声を浴びせ続ける。

マゼンダは。

マゼンダは、頭の中が真っ白くなり。真っ黒くなり。

ああ、アオバが見ている。こちらを。

吸い込まれそうな眼をしているアオバ。

彼女には、今や首が無い。

マゼンダが、引き千切ってしまった。
彼女の腕は、刻まれている。
切り刻んだのは、マゼンダ自身。
彼女は鏡。マゼンダの鏡。とても、儚げで。愛しくて。
痛みが、反復し、フラッシュバックしていく。
もう、何も聞きたくない。……………。

十

もう夜中か。
花鬱は、路地裏にあるベンチに腰を下ろしたまま、空を眺め続けていた。
浮遊城が見える。
あの二人は、一体、どうしたのだろうか。
先ほどから、煙草を吸う気になれない。
不安が強くなり過ぎると、逆にストイックに禁煙したくなる。
ツインの事が心配になってきた。
メビウスはまだ動く気はないと言っていた。
メビウスは浮遊城の偵察へ向かうと言って、花鬱の下と離れた。
時間ばかりが、刻々と過ぎていく。
後、どれくらい。こんな気持ちで居続ければいいのだろう。
しかし、静寂は終わる。
そこに、そいつは現れた。
闇の中に、手足の無い裸体が浮かんでいる。
そいつは、少しずつ、近付いてくる。
よく見ると、両手両足には、漆黒のボンテージが嵌められていた。
何処かで見たような気がするが、思い出せない。
水商売の界隈の何処かで、顔を見たような。
人目見て分かった。普段はカタギの中にいるが、裏では沢山、殺している。
黒い靄のようなものが、周囲に広がっていく。
それは、大きなハサミの形になっていく。
「『アグリー・クラブ』。それが、私の力。覚えておいてね。花鬱さまよお」
巨大な黒い霧が、彼女の全身を取り囲んでいた。
まるで、甲殻類が動くように、機械的な動作で霧は蠢いていく。
霧は確かな重量を持っているように思えた。
花鬱は勢いよく、壁に叩き付けられていた。
彼女は口から喀血する。
肋骨をやられたかもしれない。

それに、何かの力で身動きが取れなかった。
万力のようなもので、挟まれているような。
裸体の女が、こちらを見ている。
この距離ならば、簡単に倒せる。
しかし、このような状況にいてもなお。花鬱は説得を考えていた。完全に駄目だと思った。
メビウスに電話を掛けたい。しかし、身動きが取れなかった。
上を見上げる。
すると。マンションの一つから、こちらを見下ろす女の姿を見つけた。
その顔を知っている。
桃色の巫女装束。長い、淡い桃色の髪。
フォールス・メモリー。
こちらを見て、嘲笑っている。
使うしかない。
『邪魅曼荼羅』を。
こいつら二人を、倒さなければならない。
全身が、宙に浮いていく。
黒い靄に挿まれながら、花鬱は地面に叩き付けられる。
敵は、少しずつ後ずさりしながら、花鬱を釣り上げるように引っ張っていく。
まるで、何処かに彼女を移動させたいみたいだった。
フォールス。
彼女は狙っている。
この辺りの何処かに、彼女の能力を設置したポイントがある筈だ。
おそらく、このカニ女は、その場所に花鬱を触れさせるつもりだろう。
やらなければ、……やられる。
真っ赤なイメージが、頭の中を巡る。
女は踊る。夜の中、踊り続ける。
裸体が廻る。両手を振り上げて、廻る。
花鬱の肉体は、何度も何度も、壁や地面に叩き付けられる。
身動きが取れない。拘束されている。

十

ツイン・スラッシュは携帯を取る。
ライフからだ。
声は震えていた。
「助けて欲しい」

それは、悲鳴に近かった。

「私の大切な友達が。男達に捕まって、マフィアなの相手。来ないと、酷い目に合わせるって。助けて、あなた達しか頼れない。このままだと、私の友達が、マフィア達に凌辱されちゃう。ねえ、お願い」

電話の声は泣いていた。

ツインは断る事は出来ないし。断る気も無かった。

急いで、駆けつける事にする。

場所を教えられた。

しばらく、走り続ける。

ライフは、アパートの近くの駅にいた。

彼女も、今、此処に来たといった処だった。

ライフはツインを引き連れて、マゼンダのいる部屋へと向かう。

場所は、四階だった。

ドアの前。

一人の男が、震えながら、尻餅を付いていた。

彼の顔は、完全に蒼褪めている。

今にも、排泄物でも下半身から噴出しそうな、勢いだった。

「カサネ……？」

ライフが首を傾げる。

カサネは口元を、パクパクとさせていた。

何だか、様子がおかしい。

ツインが先に、扉を開けていた。

心臓が、止まってしまったように思えた。

中を見る。

……………。

惨状は、部屋一面に広がっていた。

部屋の中央には、マゼンダが空ろな眼で座っている。

そして。

部屋中には、無残なぐちゃぐちゃの死体が並んでいた。

死体はスーツを着ている。おそらくは、マフィアの下っ端達だろう。

彼らは全身を、大量の刃物で抉られるように刻まれていた。

血溜まりは、天井にまで伸びている。

部屋には、惨劇を作った刃物らしきものが見当たらない。

ぐちゃぐちゃになった男達。

何よりも哀れなのは、彼らの頭は無くなっていた。いや。

地面に落ちて、叩き付けられたトマトみたいになっているのが、彼らの頭なのだろう。

ライフとツインは息を飲んでいて。

そして、ツインが口を開く。

「お前は……………マゼンダ・ヴェルベット？ 私達が始末する予定の……」

ライフは迷わなかった。

自身の能力、セブン・マーチを、ツインに向かって発動させる。

ツインは床に横たわる。

そして、酷い不整脈に襲われた。

ライフは、マゼンダの手を取る。

ライフは扉を閉じた。

そして、カサネの方に駆け寄る。

「解除しなさい」

冷たく言い放つ。

そして、カサネのポケットを弄る。彼は抵抗しなかった。

ナイフを見つける。

そのナイフを、カサネの首にあてた。

「解除しなさい。あなた、マゼンダに『ストーキング・ヒッツ』を仕掛けたでしょう？ 分かっているのよ。あなたのやり方くらい」

ナイフを強く押し当てていく。

彼は口をパクパクと開け閉めする。

マゼンダの額に記された刻印。

それが、空中分解して、消滅していく。

ライフは、カサネから上着を剥ぎ取った。

それを、マゼンダに被せる。

「行くわよ。マゼンダ、此処から逃げないと」

ライフは放心した女の腕を引っ張って、必死でこの場から離れた。

行き先は分からない。

今、マフィアも、花鬱も。完全に裏切ってしまった。

十

全身の怖気が止まらない。

得体の知れない恐怖に襲われている。

何をされたのか。

マゼンダの能力か。

いや、ひょっとしたら。……。

……ライフ、さん……？

ツイン・スラッシュは、必死で、部屋の外に出る。

外には、男が一人、這いずりながら、この場を逃げ出そうとしていた。

ツインは男の背中を踏み付ける。

「おい、お前。マフィアの奴らか」

震えながらも、凜とした声で彼女は訊ねた。

男は首を上下させる。

「お前らの組織、気に入らないって思ってたよ」

彼女の怒気は、見る見るうちに膨れ上がっていく。感情の高揚。

この気持ち悪さをどこにぶつければいいか分からない。

セブン・マーチを食らってもなお、ツイン・スラッシュは意志の力だけで怖気と戦っていた。

ライフの力は、能力者にはそれ程、通用しない。

しかし、確実にツインを不安定にさせていた。

どんどん、怒りが膨れ上がっている。

不安定な感情が、マフィアに矛先を向けていた。

いっそ、こいつら全員をぶっ潰してしまいたい。

こいつらは、社会のクズだ。他人の人生を踏み躪るゴミ共なのだ。

ツインは男の顔を、蹴り飛ばし続ける。

見る見るうちに、男の顔は膨れ上がっていく。

「上の奴に電話しな」

ツインは男を睨み付けながら言った。

全身、恐怖心が襲っている。しかし、ツインはその恐怖心を意志の力によって、闘志へと変換させていた。そして、それによって、少しずつ、彼女の正常な思考回路は奪われていった。

男は口元を拭う。鼻がへし折れて、沢山の血が流れていた。歯も何本か、地面に落ちる。

男はズボンのポケットから、携帯電話を取り出す。

そして、ツインに指示された通りに言う。

「今から、じ、事務所にみ、みんな、集まってください。花鬱の一味が、事務所を襲撃しようとしてます、俺達の」

ツイン・スラッシュは彼から携帯を奪い取る。

「おい。てめえら、今からわたしがお前らの事務所、爆弾で粉碎してやる。それが嫌なら、さっさと集まりやがれ。銃だろうが、ショットガンだろうが。何でも持ってこいよ。全員、皆殺しにしてやる」

そう言って、彼女は携帯電話を踏み砕く。

「事務所の住所を言え」

男は、すぐに答える。

ツインは住所を頭に叩き込む。

カサネは、彼女の首筋に触れる。

そして、彼女の首を絞めるポーズを取る。

げしっ、と勢いよく、ツインは男の顔を踏み潰した。

男はそのまま、意識を失う。

首には、沢山の血がこびり付いていた。拭っても、中々、落ちない。
洗って落としている暇はない。
彼女は全力で走っていた。

十

事務所内は暗かった。
ツイン・スラッシュの脚は早かった。
事務所にある金庫を粉碎して回る。
彼らは銀行に金を預けない。
彼らは金庫に資金を置いていた。
金を数えていく。
有に、数億はあった。
椅子や机を蹴り飛ばして、金を並べるスペースを作っていく。
金庫から取り出した金を、雑然と並べていく。
金で出来た小さな建造物だ。
彼女は、此処に来る途中に手に入れてきた容器を取り出す。
そして、容器の中身をぶちまけた。
そして、しばらく。マイルドセブンを吸い続けていた。
それから、約十分後、事務所の周りに何台もの車が到着する。
沢山の男達が階段を駆け上る。

「ああ、遅かったじゃねーか」

彼女は火の付いたジッポを、金の山の中に放り投げた。
そして、即座に窓へと飛び。窓ガラスを叩き割って、外に飛び降りた。
ガソリンを撒かれた紙束が、勢いよく燃え盛っていく。
男達は、必死でそれらを消そうとした。
炎の巻き添えを食らって、火傷を負う者達もいる。
次第に、事務所ごと、焼け爛れていく。

「あーあ、楽しいなあー」

ツインは、満面の笑顔でその光景を眺めていた。
事務所の中から、一人の男が飛び出してきた。
男は、拳銃をツインに向けていた。
ツインは、小石を二つ拾って投げ付ける。
それは、磁力を帯びて、男の両耳の辺りを挟み込むように打ち付けた。
男は地面に倒れる。

「さてと、行くか」

彼女は、携帯を取り出す。

花鬱とライフ。どちらに電話を掛けようか、迷った。

どうするべきなのか。……。

しかし、ツインは余り深く考える事をしないし、その上、ライフの攻撃で。今は特に、まともな思考回路を奪われている。

深く考えずにライフに電話してみる、当然のように不在着信だ。

それから、花鬱に電話を掛けようとする。

背中を、何かで撃ち抜かれた。

背後を振り返る。

マンションの一つ。

そこに、ズンヴィーの姿があった。

彼女はライフルを手にしていた。

どうやら、こいつは徹底して、ツインを始末したいみたいだった。

再び、ライフルの引き金が引かれる。

ツインの太腿が撃ち抜かれる。

……腕は確かだ。いや、相手も必死で、全神経を集中させて、攻撃しているのかもしれない。

ツインは二本の刀を何も無い空間から、取り出した。

そして、一本を、ズンヴィーの下に向かって投げ付ける。

刀は回転しながら、ズンヴィーの横を通り過ぎた。

ズンヴィーは嘲笑う。

しかし。

ツインはもう一本の刀を強く握り締める。

磁力と磁力が引き合っ。

先に投げ付けた刀に向かって、もう一本の刀が。ツインの肉体を支えて浮き上がり、もう一本の刀へと向かっていく。

そしてそのまま、ツインはズンヴィーのいるマンションの辺りまで飛んでいった。

ズンヴィーは即座に、ライフルから弾を引き抜いて。重いライフルを捨てて、逃げていた。ツインは彼女の後を追う。

十

レッド・オア・ブルーの攻撃によって。

小石の礫が、ズンヴィーを襲う。

麻酔薬を注射したとはいえ、先ほどのダメージが酷いので、余り肉体に無理をさせられない。

しかし、ダメージが酷くても、こちらが率先して敵を殺さないと。どんどん状況が不利になってくだろうと、決断しての事だった。

それに、やはり、憎悪で今日は眠れそうにない。

この女は殺す。

ズンヴィーは色々と、策略を巡らせていた。

背後から、何かが飛んでくる。

それは、二本の包丁だった。

ズンヴィーは焦る。

ビルから飛び降りた。

そして、即座に飛んでくる包丁を。目の前で停止させる。

ネック、ネック、ネック。

それは、空気を凝縮させて、物質を空間に固定する能力だ。

対象の効果の範囲は、大体、ズンヴィーから離れて3メートル程度。体調にもよるが、大体、最高でも5メートルくらいまでだ。そして、人間以上の重量のものは固定出来ないし、固定する事によって持ち上げられない。

彼女はそのまま、ビルから落下していく。

地面に墜落する寸前に、自分自身の肉体を空中に固定した。

ゆっくりと、彼女の肉体が地面に降りていく。

そして、真夜中の路地を走り続けていく。

予め持っていた武器の類は、逃走の邪魔になるので、次々と捨てていく。

拳銃やら、スタンガンやら、色々持っていたのだが。どんどん、捨てていく。正直、重くて持っていられない。

ツイン・スラッシュは、追い付くのが早い。

彼女は磁力と磁力を引き合わせる事によって、逃げるズンヴィーの距離をあっさりと縮めていく。

その間にも、刃物や鉄パイプなどが飛んでくる。

それらも、次々と固定して行って、何とかガードしていく。

石飛礫の全てを捌き切る事が出来ないので、ズンヴィーの肉体は徐々に負傷していった。

電柱が引き千切れて、ズンヴィーの方へと向かってきた。

ズンヴィーはツインのいる辺りに、手榴弾を投げ付ける。

爆撃。

追撃として、閃光弾。

ツインは、ズンヴィーの姿を見失う。

ズンヴィーはある場所へと向かっていた。

情報は既に、手に入れている。

彼女達の守るべき者の中で。

一番、彼女達の意志をへし折るだろう人間。

彼女達の弱点はそれだ。守るべき者がいるという事。守るべき者達が、弱き人間達ばかりである事。その弱点は、日常を生きている彼女達にはどうにもならないだろう。

ズンヴィーは病院へと向かっていた。

そこにはいる筈だ。事前に調べ上げている。

手足の無い青年が。

彼を殺して、彼の未来を奪う事。

それが、もっとも花鬱と、あの刀使いの女の意志を破壊出来る筈だ。

心の奥底から、破壊的な衝動が湧き上がり。膨れ上がる。

他人を壊したいと思う、嗜虐心。

有効な手段は、利用するべきだ。

ズンヴィーはガソリンのタンクを手にしていて。

ただ、殺すだけではつまらない。

どうせなら、いっそ。

……。

病院ごと、焼いてみるか？

口元から笑みが零れ落ちる。

これ程、破壊と虐殺をするのは初めてだ。

考えてみた事はあるが、まだ実行に移した事の無い虐殺行為。

帰ったら、フォールスに自慢してやろう。

理性の先を超えてみたい。

非人道的な破壊行為。それを行ってみたい。

何処まで壊せるのか。どれだけ、悲鳴が聞けるのか。どれだけ、最悪な人間になれるのか。想像するだけで、楽しく思う。

森の藪の中を駆け抜けていった。

病院の前に辿り着く。

ズンヴィーは舌打ちした。

こいつが、こんなに要領の良い奴だとは思ってもいなかった。

一番、見晴らしのいい病院の駐車場の辺りで。

ツイン・スラッシュは先回りして、立っていた。

おそらく、これ以上は踏み込めない。

分かるのだ。

既に、何らかの仕掛けが張り巡らされている。

小細工ばかりを行って、人を殺してきたからこそ分かる。

この辺りには、細工ばかりが仕掛けられている。だから、踏み込めない。

ズンヴィーはすぐに、逃走に移る事にした。

ズンヴィーは心の中でほくそえむ。

彼女はあんなに、堂々と目立って姿を見せるべきではなかった。

物陰に隠れて、病院の中へと入ろうとするズンヴィーを襲撃するべきだったのだ。

彼女は、やはり馬鹿だ。確信を持って言える。

しかし。

がくん、と両足が竦む。

麻酔薬が切れてきたのだ。

肩と腹の部分の、痛みが甦っていく。

がくっと、木の幹を強く叩いた。

音が反響していく。

後ろを振り返った。

ツイン・スラッシュが立っていた。

この場所はまずい……。

磁石に変えて攻撃出来るものが、沢山、ある。

ズンヴィーは全力疾走する。

そして、道路側に飛び込んだ。

沢山の小石や、枝。それが、散弾のようにズンヴィーへと向かってくる。

ズンヴィーの全身は、それらによってズタズタにされる。

それでも、なおズンヴィーは逃げ続けた。

どうにか、倒す手段を思い付かなければならない。

敵はどんどん、高揚していつている。

そして、ふいに気付いた。

駐車している車。バイク。

それらがカタカタと動き出す。

数十メートル離れた、遠くに、ツインの姿を発見する。

「平穏を送る人間に。わたし達のような世界を見せようとするな、と言いたい。お前は絶対に、“彼”には会えないし。会う事など叶わない。彼はもう、お前らみたいな世界を見る事なんてない。これから、幸福に生きるんだ」

道路の中央に、幽鬼のように立っている。

「お前を絶対に、病院に近付けさせはしない」

車やバイクが浮き上がっていく。

それらを、磁石に変えていつているのだろう。

それらを食らうと、非常にまずい。

どう考えても、圧死し、肉塊にされてしまう。

「わたしの『レッド・オア・ブルー』。こんなに色々なものに使えるとは思わなかった。今の精神状態だからかしら？ てめえを絶対に殺してやる。今なら、今までよりも、もっともっと重いものにも使える」

彼女は、いつの間にか、両手に刀を握り締めていた。

一本を、ズンヴィーの下へと投げ付ける。

ズンヴィーは、それを避けた。

もう一本も、飛んでいく。

ズンヴィーを挟むかのように。二本の刀は迫ってきた。

ズンヴィーは、二つとも、空中に固定する。しかし。

大量のガラス片が飛んでくる。それから。
大型バイク。自動車。それらが、空中に浮き上がっている。
絶体絶命だった。
この攻撃から生き残る事が出来ても、どうやっても重傷は避けられない。
あのツイン・スラッシュを殺す事は、極めて困難だった。
どうすればいい。
自分の死が頭を過ぎる。数秒後には、訪れるであろう出来事。
何とか、この事態から抜け出さなければならない。
どうすればいい。どうすれば。
目の前が、真っ白になった。もう、何も出来ない。
呼吸が停止している。脈拍が人生で最高潮な程、上がっていた。
……………。
何が、起こったのか。
まるで、分からなかった。
まるで、操り人形の糸が切れるように。
次々と、空中に浮かび上がったものが、落下していく。
ズンヴィーは放心していた。
まるで、理由が分からない。
先ほどまでの恐怖が何だったのか、分からない。
ツイン・スラッシュの首が爆裂したかと思うと。
彼女の首はポロリ、と地面に転げ落ちていた。
そのまま、首の無い彼女は地面に膝を付く。
そして、噴水のように。彼女の切断された首から血液が吹き上がり続ける。
あっけなく、終わっていた。
完全なまでに。
ツイン・スラッシュは死亡していた。
……静寂が、夜空を支配している。
ズンヴィーは完全に呆けていた。
ネック、ネック、ネックが決まった訳ではない。
何者かが。
おそらく、他の能力者が。
彼女を始末したのだ。

十

カサネは自宅のマンションに戻って、風俗情報誌を開いていた。
彼は仕事の関係もあって、風俗界隈にいる女達の顔を、出来るだけ覚えるようにしている。

数ヶ月前くらいのものだろうか。

小さくだが、キャバレークラブの欄に、ツインの顔が載っていた。

カサネは、これを使う事にした。

後は、彼女が彼の能力に気付いていないかだ。

カサネは鼻血のこびり付いた指先で、ぐしゅぐしゅと写真をなぞる。

カサネはカッター・ナイフで、思いっきり、写真に写ったツインの首を横に引き裂いていた。

おそらく、彼女が急いで首の周りでも洗わない限り。

彼女の首と胴は、今頃、離れている筈だった。

暗い部屋の中で、カサネは哄笑を繰り返した。

十

花鬱は、自身の能力『邪魅曼荼羅』を発動させる。

それは、暴力しか引き起こせない力だと、彼女は思っている。使うしかない。

風が引き裂かれていく。

ぞわり、とするような赤い色が。

一面の空間に、広がっていくかのようだった。

真っ赤な鮮血が、夜の空の中に溢れ出していくかのようだ。

ああ、これは。

強い。とてつもなく、強い殺気なのだを知る。

生臭い血の臭いが、何処からか漂ってきた。

肌を刻まれるような感覚。

思わず、自分の肌を眺める。傷は無い。痛みも無い。

血の臭いは現実のものではない。

しかし、確かに実体感を伴っていた。

……………。

空間に。一本、一本。

刀が現れていく。

それは、斬首刑の為に必要な、首切り役人の刀だ。

一本、一本が鈍く光り輝いて。禍々しい錆びた血の臭いを放っているようだった。

それは、さながら、地獄の針の山が並んでいるようにも見える。

花鬱は、まるで、地獄の鬼のようだ。

コシュマールは戦慄していた。

これが、花鬱の能力。

噂には聞いていたが。

余りにも圧倒的な暴力なのだ聞いていた。

それを、目の前にして、一瞬、立ち眩みがした。少しだけ、後ずさりする。

刀。

沢山の刀が、空中に浮かんでいる。

数えてみる。十本を超えている。

コシュマールは、急いで、花鬱の胴体を引き千切ろうとした。

裸体に彫られた刺青が、どんどん薄くなり、消え去りつつある。

全力のアグリー・クラブ。

それによって、一気に花鬱の胴体を引き千切ろうとする。

黒い靄が凝縮されて、圧縮された質量を持った鉄のハサミへと変わっていく。

これで、万力のように花鬱の胴を切断出来る筈だった。

気付けば。

コシュマールの右腕が何処かへと消し飛んでいた。

宙に浮いた刀の一本が、彼女から右腕を奪ったのだった。

しかし、彼女は笑った。笑っていた。

右腕の切断面から、黒い霧が生えてくる。

それは質量を持った、巨大な腕へと変わった。

腕は巨大な黒いハサミへと変わる。

夜の闇が更に深まり、それは巨大な質感を伴っていく。

まるで、巨大な建造物のようにも見えた。

「私は、勝つ確信があつてね」

コシュマールは笑う。嘲笑う。

「じゃなければ、悪名高い、お前なんかと誰が戦うもんか」

彼女の顔には、慢心が宿っていた。

気付けば、花鬱の肉体を、何かが張り巡らされていた。

それは、幾重にも巻かれたワイヤーだった。少し水に濡れている。

花鬱は焦った。

ああ、仕掛けられていたのだと。

正攻法から、敵が来る筈が無かった。花鬱の能力は、よく知られている。

力だけで、勝つつもりだった。圧倒的な力で。

しかし、敵はそんなものに、最初から賭けてはいない。

フォールス・メモリーの攻撃。

それは銅線に、彼女の能力の波動が既に送り込まれている。

即座に、花鬱は邪魅曼荼羅の刀剣にて、ワイヤーを切断しようとする。

しかし、ワイヤーの糸は、幾重にも張り巡らされていた。

そして、フォールスは武器を取り出していた。

ショットガン。

それが炸裂する。

花鬱の胴体に向かって撃ち込まれていた。

花鬱は咄嗟に、先にそっちを防御する為、刀の一本を動かした。弾き落とす。
電磁波の攻撃が、花鬱の全身に巡る。

十

マゼンダの能力『インプリンティング』。

それは、彼女が投影したものを傷付けると。

反射するように、その傷が跳ね返っていく。

標的は、彼女が投影したものに触れる必要がある。

そして。

彼女は今回。

アオバという人形に、自身の能力を送り込んでいたのだ。

それも、おそらくは無意識下で。

何故、マゼンダがドーンから狙われているか、理由は分かっている。

マゼンダの能力は、コントロールが効かない。

マゼンダは、それでいて、沢山の人間を殺している。

始末されても仕方の無い人生を送っているのだ。

だが、ライフはそんな彼女を守ると決めていた。

たとえ、殺人犯になったとしても、我が子を守る良き親のように。

彼女は走っていた。何処に？ 何処に行けばいいのか分からない。

思い付く場所が無い。

取り敢えず、自分のアパートにでも連れていくか？

いや、すぐにバレる。

一番、愚直な選択だ。

制服屋。

彼女を頼るしかないのではないか。

あの異常者を。

マゼンダはガタガタと震え上がっていた。

また、彼女は沢山、人を殺した。

それから、ライフは守らなければならなかった。

この世界にある。全ての彼女を傷付けるものから、彼女を守らなければ、と。……。

「私……」

マゼンダは言う。

「アオバの、首。もいじゃって……」

それだけ言った。

ライフは強く彼女を抱き締める。

守らなければならない者。……。

まるで、信用出来ないが。

あの制服屋の女に、助けを求めるしかない。

癪だが、あの女しか思い浮かばない。

制服屋の前まで来ていた。

明かりが付いている。

マゼンダの腕を引っ張って、ライフはずかずかと乗り込んでいく。

青髪の女は、相変わらず、自らのコレクションを眺めて喜んでいた。

「なーに、面倒事でしょ？」

シーズンズは、何かを邪魔されたような苛立ちの声を上げる。

「彼女をかくまって欲しい」

ライフは強気で言う。

「で、幾ら欲しいわけ？」

「うーん」

制服屋は、ぽりぽりと頬を搔く。

「じゃあ、あんたの通帳渡して」

ライフは財布の中から、クレジットカードを引き抜いて放り投げる。

「番号教えるから、好きなだけ使いなさい」

シーズンズは、ぱあっと明るい顔になる。

頭の中で、色々と算段を組み立てているみたいだった。

ライフの方は。

もう、完全に後の事など考えていなかった。

自分自身の守れるものを守りたい。

それは、かつて守れなかった者の代償なんだ。

産みたかった子供。ずっと、ずっと、心の奥底で後悔し続けていた。

彼女は、あの頃、彼を説得する力が無かった。今でもたまにその時の後悔を思い出して、自分自身の無力さに打ちひしがれる。彼女のその激情こそが、男達を怒りに駆り立てる。

もしかしたら、自分の人生を納得した形にしたいのかもしれない。

たとえ、どれだけ苦しくなるろうが、後悔はしたくない。もう、これ以上。……。

部屋の中で、マゼンダを寝かせた。

シーズンズはくくっと笑っている。

ライフはブラウスを脱いで、淡い紫色のキャミソールだけの姿になる。

背中では露出している。

十字架とマリア像の刺青。

彼女が本当に、聖性を感じているもの。何よりも清らかだと思えるもの。

けれども、それと対比的に。

シーズンズの店にある、マリアのコスプレ。シスターのコスプレとも言える。

この女は、自分が抱いている聖母マリアに対する経緯とは違って、墮落で冒瀆的な行為として

、マリア像のコスプレを売り捌いている。

それが、とても赦せない。しかし、今はそんな事を考えないようにした。

「あなたをまるで信用出来ないけど、他に可能性が無いから言いますね」

ライフは自然と言葉を紡いでいく。

「マゼンダを守って欲しい。あなたも犯罪者なんでしょう。だから、その点においては信頼出来ると思っている。マゼンダは追われている。花鬱と、それからマフィア達にも。何とか身を隠さなければならない」

「へえー、そうなのお」

十

沢山の刀剣を。

自分自身の服や皮膚の表面へと突き刺した。

フォールスの能力『キャンサー』を送り込んだワイヤーの攻撃は、刀の防御によって止められていた。ワイヤーの全ては、鎧のように纏った刀によって止められている。

フォールスは絶句していた。

まるで、通じなかった。……、いや、後、一歩だったかもしれない。

コシュマール。

彼女の首が飛んでいた。

死神の鎌のように、刀が宙を旋回していく。

ぽん、ぽん、と彼女の首が跳ねていく。

花鬱の顔。それは限り無く、鬼のそれに近い。

……勝てない。

フォールスは即座に逃走へと移っていた。

すぐに、他の算段を考えなければならない。

やはり、この女、強かった。

何でもいいのだ。時間を掛ければ、殺せない相手ではない。

トラップの張り方さえ、間違えなければ。

そう、もう標的となった花鬱に安息なんてない。

二度と、安心して、眠らせなどさせない。

フォールスは予め容易していた自動車に乗り込む。

鍵を回す。

そして、全力で夜の道路を疾走していた。

追撃が来るならば、そのまま自動車から飛び降りればいい。

何度でも、再戦する気でいた。彼女は殺す。彼女の友人も知人も。

計画は他にも練っている。今回の計画が失敗だっただけだ。

次は、もっと狡猾に。もっと巧妙に。そうすれば。……。

ざくり、と。

腹の中に違和感を覚えた。

何だか、全身に寒気が帯びてくる。

腹を見る。すると。

シート越しに、長い刀がフォールスの腹に刺さっていた。

車がスリップする。

どうやら、タイヤを破壊されたみたいだった。

フォールスは急いで、車外に出ようとする。

しかし。

車が勢いよく、爆破炎上した。

エンジンやら、ガソリントankやらを破壊されたのだろう。

爆音。衝撃。

全身が焼け爛れていく。

ああ。

愛する女の下に行きたいなあ、と彼女は思った。

記憶が奔流のように、駆け巡る。

……………。

思い出の中。

ズンヴィーは後ろからフォールスを抱き寄せる。

そして、彼女の耳たぶを口に含んだ。

そのまま、ズンヴィーの左の手は、フォールスの胸元に入っていく。

指先が、メロディーのように彼女の胸をなぞっていく。

そのまま、恋人の右の手が、フォールスの下半身へと向かう。

指先はしなやか。体内の深遠へと、入り込んでいく。

全身の紅潮。

一体化。

愛する者は、彼女に囁くのだ。

もっと、して欲しいかと。して欲しいと返す。

強い、陶酔感の中にいる。ああ、優しい眠りが近い。

自分自身が何者であったかを、思い浮かべていく。

フォールスは自分が同性愛者だと、物心付いた頃から知っていた。

女の肉体を見て、欲望の眼差しを向けていたし。

同時に、何よりも女から、欲望の眼差しを向けられる事を欲していた。

女同士の触れ合いの中に、安らぎはあった。

男と触れ合う事など、何一つとして考えられなかった。

故に、彼女は男相手には、未だに処女なのだ。

彼女の官能の全ては、女という芳醇のみにあった。

肉体に蔓延る電気信号。

脳内に流れる電流。

脳を刺激する官能。エクスタシーの世界。

人間は、電気信号によって動かされている、というのが彼女の認識だった。

生体から発せられる電流。空気中などに流れる電気。

彼女にとっては、女の匂いに感じる。

色香の美しさ。安堵感。

暗黙。

腹の中に深々と突き刺さった刀剣。

恋人との触れ合いが、脳裏に甦っていた。

ああ、このまま死ぬな。とフォールスは思う。

死ぬからこそ、大切な記憶を脳が再現させているのだろう。

二人は、同じような感覚を共有していた。

そう、愛する者の為に。

しかし、一矢報いたい。

花鬱の姿は見えない。けれども、フォールスは全身、焼け爛れながらも。突き刺さった刃物を握り締めていた。

「き、来やがれ。クソババア、あ、あたしを殺しに来やがれ。もう一人の居場所も吐かせたいんだろ？ あたしの相棒の場所も。彼女はお前がずっと守ろうとした、手足の無い青年の下へと向かっている。お前はあたしと交渉するべきだ」

花鬱は近付いてくる。

フォールスは突き刺さっている刀に、キャンサーの電磁波を送り込んでいた。

間合いがどんどん、近付いていく。

自分の命は、もうすぐ終わるのだろう。

艶かしい皮膚も、顔も。全ては崩れていく。ああ、ズンヴィーはもう、あたしを愛してくれないなあ、と。彼女は思った。

それでも、彼女の為に、今、生きる。死ぬのは、もう少し、先だ。

間合いに入った。

こいつの弱さだ。耳を貸すべきじゃなかった。

フォールスは、腹の刃を勢いよく引き抜く。

そして、花鬱へ向かって、投げ付けた。

花鬱は、身を翻して、それを受け止める。囧だ。

彼女は既に、キャンサーを送り込んだハンドガンを取り出して、花鬱へと撃ち込んでいた。

眼球の中にも、炎が入り込んでいる。

全身の全てが焼け爛れていく。

フォールスは崩れ落ちていた。地面に腹這いになる前に、彼女は絶命していた。

キャンサーを送り込んだ弾丸は、花鬱の左斜め上を通過して、虚空へと消えていった。

第七章 クライン

ウロボロスの能力によって、みな状況は把握している。

人の死は痛い。

しかし、それよりもメビウスは彼女ではなく、人間の域にいる者達が。なるべく、能力を持つ犯罪者達を倒す事を願っている。

それは、メビウスの信念だ。あるいは、何者かから与えられた意志。

けれども。人間の領域では手に負えないもの。

浮遊城。

空に浮かんだ、孤島。

もうすぐ、夜明けが近い。

メビウスは全身を浮かせていく。

そして少しずつ、浮遊城へと近付いていった。

重力波の攻撃をまるで彼女は意に介していない。

肉体への攻撃は、全部、彼女の”能力”によって遮断されていた。

重力も何もかも、彼女のねじれの空間を通り抜ける事など出来はしない。

空洞の肉体の中から生まれる。

無限の宇宙のような環。

それが彼女の能力だった。

始まりが終わりであり。終わりが始まりである。

システムを形作るという存在。

おそらく。

彼女の肉体は、一つの宇宙を創造したいという願いが込められている。

そのエネルギーから、彼女の能力は発現している。

自分は”システム”という存在なのだろう。

システムを維持するという役割を持った者。それ以上の何者でもない。

美なるものが、幾ら詰まっていようが。彼女を見て、みなが何らかの美しさを感じようが。彼女には、一切、関係が無いのだ。

メビウス・リングはシステムで。

システムである以上、システムとしてしか動く事が出来ない。

おそらくは、その基準からは逃れられないのではないだろうか、と。

メビウスは自分の存在とは、何なのかと思考する。

生きた人形とは、不気味過ぎて、世界にとっては異質なのだろう。

動いて歩いて、飲み物も口にする事が出来る。

人間に近いが、それでもどこまでも人間ではない。

人間が人形に感じる感傷的なものを、メビウスは一切、理解していない。

ただ、理解するという事は可能だと考えている。

おそらく、メビウスを創った者は、彼女をもっと感情豊かにしたかったのだろう。
しかし、そいつは外側の世界から、メビウスを降ろしてしまった。
人格の豊かさよりも、能力としての凶悪さの方が固定されてしまった。
彼女を作り出した、人形作家。
名も無い人形作家。
そいつは、一体、何を思って、彼女を作ったのだろう。
本当は、彼女は、ただ人に愛される為の人形として作られたのかもしれない。
しかし、そんなものはどうだってい。
思考するだけ無駄なのだから。
くるくる、ぐるぐる、回転していく。

十

「甘名がメビウスを倒すとかいう話、乗った」
少女は愉悦の笑みを浮かべている。
ブレーカーは彼女からも、怖気が隠せなかった。
インソムニア、否睡。
彼女の手足は、今や再生している。
ミスティのナルコレプシーによって、全身の筋肉をある程度、鈍らせているとはいえ。彼女から発せられる怖さが軽減されたわけではない。
ブレーカーは息を飲んでいて。
自らが、被虐待者になってもなお。嘲笑い続けた彼女。
ブレーカーは、ミスティを虐待し続けて獲得した。
ブレーカーは、インソムニアという力を持つ否睡の嘲笑を聞いた時。
彼女からも敗北していたのだと思う。
この城にいる者は、初めから敗北していた。
穏やかな暮らし。
日々、繰り返される生活。
ミスティは、甘名を夜景の見える場所に連れていった。
バルコニー。
絢爛豪華な宝石の煌きのように映る、アナトミアの街。
天国と地獄。
果たしてどちらが幸福なのかは分からない。しかし。
ミスティは天国を幸福だと言う。浮遊城を。
永遠の時の中で、過ごして生きたいのだと考えているという。
みんな、仲良くすればいいのだと思う。そう思って。
どうせならば、四人で食事をして過ごそう、という事になった。

ミスティはみんなの為に食事を作る。

否睡が手伝ってくれた。

下手糞ながらも、卵の殻を割ったりしてくれた。

ロースト・ビーフ。アラビアーノのパスタ。シーフード・サラダ。焼きたてのパン。オニオン・スープ。糖蜜菓子。

それから、甘名の好きな紅茶。ブレイカーの好きなコーヒー。

何だか、みんなずっと一緒にいられたらなあと思う。

敵とか味方とか、そんなもの関係がなく。

甘名は薔薇園が好きだと言ってくれた。

否睡も、あれだけ酷い事をされながらも、ミスティ達に好意的だ。

そもそも、彼女の中では、酷い事をされた、という意識が無いのかもしれない。

メビウス・リングに花鬱、彼女達を倒す。

その事で、四人は決意が固まった。

戦略も練っている。

否睡は。

ツイン・スラッシュの事を思う。

何度か話しているうちに、否睡は彼女に好意を抱いていた。

もっと仲良くなりたいな、と。

だから、迷っている、というよりも何だかアンヴィバレントな感情に支配されている。それを整合する為に必要なのは。メビウスは倒して、花鬱は相手にしなければいい。また、ツインと色々な話をしたい。くだらない話を。彼女の家にもまた行きたい。

卑怯で悪いが、メビウスと戦った後。適当な言い訳を付けて、花鬱との戦いは避けようと思っていた。

ツイン。今度、一緒にテレビゲームをしたり、カラオケにでも一緒に行きたい。

.....

ミスティは否睡に仕掛けた、ナルコレプシーは完全に解除してある。

しかし、甘名相手には躊躇していた。

それは彼女のエゴイズムからだ。

人形のように、冷淡で。身動きの取れない彼。

それがどうしようもなく、美しくて見惚れてしまって仕方がない。

ミスティは甘名の口に、スプーンとフォークで食べ物を運んでいく。

彼は面倒臭そうながらも、それを許していた。

「ミスティ」

彼女にとっての、ドールは言う。

「メビウスとの戦いが終わったら。お前の顔、踏み砕くから」

ミスティは口元が引き攣った。

「まあまあ、別にどうだっていいんじゃないの？」

否睡がフォローを入れる。

彼女はぐちゃぐちゃと、パスタを口に入れて言う。

ある意味で言えば、甘名のそれは、さかしまの美貌だ。

普遍的な美しさとは、まるで違う。

「でもまあ、ミスティ。彼にも対しても、能力を解除した方がいいんじゃないの？」

ミスティは戸惑う。

そうなのだ。

自分のドールにしたい。その欲望。

彼は人間なのだと、今更ながら理解する。

彼の顔、形。身体。

欲しいなあ、と思った。所有物にしたいなあ、と。きっと、誰かから受け継いだ感情なのだろう。感情というよりも、欲望。所有欲。支配欲。

ナルコレプシーを解除する。

甘名の全身が、少しだけ震える。

彼は流し目のような、視線を送る。

「このドレス。貰っていいかな？」

「ええ」

彼女はにっこりと笑った。

何だかんだで、彼は肩を露出させた、この黒いドレスをととても気に入っているみたいだった。ミスティのお気に入りのドレスだ。自分で着てみて似合わなかったドレス。けれども、彼が着けると、とても映えて見えた。ドールは、自分自身の理想を投影している部分もあるのだと思う。

「さてと」

否睡は言う。

「これから、やってくるであろう。システム、って奴を倒そうぜ」

功名心が光る。

彼女は何処からか、大鎌を取り出していた。それは、かなり曲がった三日月に似ている。銀の光を放っており。まるで、骨董品のようにも見えた。

それは、彼女の身の丈よりも大きな鎌だった。

ブレーカーは息を飲む。

刃物の部分が、特に美しいと感じた。蠱惑的に刻まれてみたいという感覚。

「さて、まだ聞いていなかったな、お前の能力ってのは何なんだよ？」

否睡は楽しそうに笑う。

本当に楽しそうだ。無邪気な好奇心。

「僕の能力か」

もったいぶって、言った。

「僕は、能力者じゃない」

彼は少し、自虐的に言う。

否睡はぼかんとしていた。

甘名は興味を示さず、紅茶を啜っている。茶葉が美味しいな、と告げた。

そして。

「嘘だろう」

そう告げた。

ブレーカーは困惑する。

「本当だ」

「なるほど、メビウスとやらがお前を狙うのは。おそらくはその部分にあるのだろうか」

彼は考察を続ける。そして、出した結論。

「お前は自覚無き能力者なんだよ、それは間違いない」

甘名は自分の持論を言っていく。想像力の翼を広げるように。

能力者という存在。それが何なのかを、自分なりに理解しようとしている。

「重力を操作する能力者がこの浮遊城の何処かにいるんだろう？」

ブレーカーは、首を横に振った。

「そんなものはいないよ。いるというか……」

夕食が終わったら、連れていく、と彼は告げた。

一時間後。

ブレーカーは、甘名をある場所へと案内する。

それは、コンピューター・ルームだった。

そこには、大きな大理石の顔があった。彫像だ。

誰かのデスマスクにも見える。

「彼が、重力を操る能力者だ。コンピューターなんだよ、彼は。僕はコンピューターを操作していた結果。彼が力を持つようになったんだ」

「なるほど」

甘名は合点がいく。

「それが、お前の能力だ。お前は無自覚かもしれないが、お前には。他人の能力を引きずり出す能力があるのだろうか。メビウスとやらが、お前を始末したがっている理由が何となく分かってきた。なるほど、お前は这个世界のシステムにとって有害なんじゃないのか？」

甘名は淡々と言った。

ブレーカーは合点が行く。

十

もうすぐ、夜が明ける。

甘名、否睡。それからミスティ。

それぞれ、お互いの能力に関して、話し合った。

「本当は、お前の能力を抜け出す事など簡単だったかもしれないぞ？」

甘名は悪辣な笑みを浮かべて、ミスティに言う。

彼は今や、ミスティから返して貰った白黒のドレスを身に纏っていた。

やはり、自分のカラーが、自分に一番、合う。

彼は壁に立て掛けられている鎧と。掛けられている二つの剣を眺めていた。

こいつは、使えるかもしれない、と思っていた。

「ツインからさー、実は能力、教えて貰ったんだよねー」

否睡は言う。

「あいつ、って二刀流の刀使いらしいぜ。なあ、甘名。どうせなら、お前らも二つ使えばいいんじゃないの？ その方が、効率が良さそうだが」

「なるほど」

確かに良い案だ。彼女は好きではないが、彼女のセンスは良いものかもしれない。

空が眩い。

朝焼けが輝いている。

既に、三名は戦闘態勢に入っていた。

メビウスの能力は、回転に基づいたものなのだと聞いている。

回転の攻撃。それがどれくらい強いのか分からない。

どう攻略していけばいいのか。

彼女は、ドーンのボスなのだ。

三人で唸る。

おそらく、回転を使うという事は。防御面がとてつもなく、強いのだろう。

そんな事が推測出来る。

可能な限り、何が出来るかを推測しなければならない、想像力を限界まで働かせて。

「いっそ、全力で逃走を考えてみるとか。どうだ？」

甘名は言った。

「説得してくれないかしら？」

ミスティは言う。

甘名は首を横に振った。

「面倒くせーんだよ、私が突っ込んで。私がぶっ倒してやるよ」

否睡は哄笑する。

こいつは、本当に単純だ。爽快なまでに。

「オレの能力、ミスティの『ナルコレプシー』。否睡の『インソムニア』、可能な限り、最大限に利用して。戦おう。勝機はそれしか無いだろうな」

十

ズンヴィーは地下病院へと戻った。

フォールスの帰りを待とうと思っている。

彼女からの連絡を待っている。ズンヴィーの方も、彼女へ連絡をする。ずっと不在着信だ。何だか、どっと疲れた。

フォールスと一緒に、また花鬱に挑もう。正攻法からは無理だろう。

しかし、花鬱の大切な者は死んだ。

花鬱の心は砕け散るかもしれない。

今は傷を癒す事が先決だ。

それ以上の事はしたくない。

身体中のダメージが酷い。

このまま、ずっと眠りに付いていたい。

何処までも、深く、深く、深い眠りに。

安らかになりたい。そう思った。

フォールスと合流したかった。彼女の顔が見たい。

何とか、彼女に連絡し続ける。

携帯が繋がる。……。フォールスの声が聞きたい。

しかし。……。

代わりに、別の人間が出た。

「お、お前は何だ？」

声に聞き覚えがある。最近、よく聞く事になった声。

「あたしは、花鬱よ。お前達が狙っていたね」

絶句する。何があったんだ？

ズンヴィーの頭は、完全に混乱していた。

「お前の相棒は死んだ。助っ人も。お前は今すぐ投降するべきだ」

それを聞いて。ズンヴィーは完全に放心したような顔になる。

呪詛。それから、強い倦怠感に襲われた。

「……………、そうかよ。てめえ、の大切な相棒。何だっけ？ 二本の刀使っていた、そいつなんだが」

可能な限り、言葉に呪詛を込めて言った。

「死んだぞ」

電話の音が黙る。

「お前の命……………」

震えている。

「あのなあ。最後まで聞け。殺したのは、俺じゃねえ。別の誰かだ。確かに俺はあの女と殺し合ったんだが。それから、心配するな。もう俺はお前の友人達に危害を加えるつもりはねえ。危害も加えてねえ。お前の仲間を殺した奴だが、そうだな。ライフの友人じゃないのか？ よく分からんが。もっとも、俺の推測だけだな」

ツイン・スラッシュの死体が転がっている場所まで教えてやる。

その後、彼女は電話を切った。

さて。どうしようか。

身体が痛い。

病院の中にいる者達は、ジャンキーだのカタギのものではない者達だの、不法入国者などだった。どいつもこいつも、同じろくでもなしばかり。

フォールス・メモリーは死んだ。

コシュマールも死んだ。

さて、どうするべきか。

.....

ズンヴィーは立ち上がる。

何もやる気が出ない。

ある程度、治療が済んだら、此処から逃走しようと思っている。

逃走先は、何処になるのかは分からない。少なくとも、花鬱も、ドーンも届かない処がいい。

アナトミアの外がいいだろう。

フォールスの復讐も考えていた。

しかし、同時に、復讐にどれだけ意味があるのだろうか、とも。.....

荷物と現金、可能な限り詰め込んで。

さて、どうするべきか。

何もやる事が思い付かない。

彼女は洗面台に向かう。鏡を見た。

紫のメッシュ。部分部分を刈り上げた髪、骨格は骨ばっている。

お世辞にも美人だとは言えない。

その醜さの価値を転倒させる為に、顔中に沢山のピアスを埋め込んだ。耳、眉、鼻、唇、舌など。

ひょっとすると。ズンヴィーは同性愛者ではないかもしれない。

美しい姿のフォールスに憧れていた。

何で、彼女は自分なんかを好きになったのだろう。

十

花鬱は虚脱感に襲われていた。

もうじき、夜が明ける。

ズンヴィーは丁寧にも、ツインの死に場所まで教えてくれた。

その場所まで向かおうと思っている。

全身の所々が、負傷していた。

コシュマールによって折れた肋骨と。

フォールスのキャンサーが送られた銅線を防御する際に、自分の皮膚スレスレに刀を突き刺したのが、結構なダメージになっている。

服はズタボロだった。着替えに向かわなければならない。

それから、やはり病院にも行く必要があるだろう。

ズンヴィーを今、殺しにいくべきか。いや。

逃げられてしまうだろう、このままでは。

いや、それよりも。

.....

彼女はツインの死んだとされる場所へと向かった。

しばらく、路上を歩いていく。

彼女の姿を見つける。

ツイン・スラッシュは、完全なまでに死んでいた。

花鬱を慕った、女。花鬱に憧れた女。

今や、無残な首無し死体として横たわっている。

殺したのは誰だろう。

ズンヴィーの言葉を信じるならば、他に能力者がいるという。何者なのか。

ライフと関係している者だろうと言っていたか。

携帯電話が振動している。

花鬱はそれを手にした。

「.....ライフ、さん.....？」

十

「『インプリンティング』っていうのかあ」

シーズズは、くつつつ、と笑った。

「彼女、私が引き取ろうかあ？ 何だか、可愛いし」

「そう。彼女の背後にはマフィアの息の掛かったアダルト業界があるんだけどね」

「潰せばいいんでないのお？ そんなもの」

くっくっ。この青髪の女は、本当に不気味だった。

信用出来ないが。

本当に、頼るべき相手がいない。

今や、マゼンダもライフも、彼女からバスルームを借りて血に塗れた身体を洗い、適当な服を借りてきていた。

ライフは、普通の服もあるのね。と皮肉を言った。コスプレ衣装とか着たい？ と彼女はゲラゲラと笑った。一応、商品だからねえと返す。

コスプレ衣装。この女はよからぬ事に使っているんだろうなあと思う。

「普通の警察とかじゃ。彼女が能力者って事は分からないから。でも、やっぱりドーンは目を付けていたらしいのよ。だから、今回の件で。おそらくは、ズンヴィー達のついでにマゼンダも標的にされたんだと思う。彼女の力は彼女自身でさえ、制御不能だから」

暴走する力。マゼンダは本当に、悪なのだろうか。悪とは何なのか。……。

「そおう」

くっくっ、とシーズンズは笑う。

この女は、ドーンのランキングに登録されているのだろうか、いないのだろうか。

まあ、いい。

「街から逃がすなんて、どうかなあーって思うんだよねえ」

青髪の女は、そんな事を提案した。

「いい、案ね」

ライフは素直に頷く。

そして、以前から気になっていた事を訊ねる事にした。

「処で」

ライフは言った。

「ねえ、制服屋さん、あなたの能力。教えてくれないかしら？」

「ふーん」

シーズンズは、少し考えている。

「全貌は言えない。でも、何となくあんたなら、感付いているんだらうけど。私の能力は、情報を受信、獲得する事が出来る。この力を『ドープ・ショー』と呼んでいる」

彼女はにたにたと笑う。

「処で、これ言っておくか。以前の頂いた情報量の一環として」

一瞬、間を置いて言う。

「ライフさん。あなたが依頼したマフィア組織。殆ど、壊滅しちゃったわよお。事務所を襲われて、彼らの資金は片っ端から燃やされてしまった。馬鹿だねえ、マフィアってのは。あいつらは銀行を使わないもんねえ。しかし、今頃、躍起になって生贄を探し求めているんじゃないかねえ。どうなんでしょうねえ？」

シーズンズは笑い続ける。下卑た笑いを続けていく。

「再び、花鬱に挑むか。それとも厄病神として、あんたを探し回っているのか。さー、あたしだったら、どうするかねえー、あなただったら、どうするー？」

「ズンヴィー達をやったみたいに、身内知人友人を殺して、虐待して回る、かな」

「そうだろうねえ、さて、花鬱とあんた、どっちになるんだらうねえー」

彼女の気持ちの悪い笑い声は続いていく。

ライフは、いい加減、この女には本当にウンザリしていた。

ライフは花鬱の携帯に電話を入れる。

何回かのコール音がして、繋がった。

花鬱は驚愕したような顔をしていた。

「マフィアの奴らが、あなたの友人達を狙っていますよ。だから、あなたは事務所に向かって下さい。彼らを説得しないと。私の今いる場所は、後で教えますから、早く！」

ライフは花鬱に、カサネが所属している組織の事務所の場所を教えた。

メビウス・リングは、浮遊城の庭園を見渡していた。

大理石の像。色取り取りに植えられた花。流れ出る噴水。

見事な造形美だと思う。

此処に住んでいる者は、趣味が良いのだろう。

彼女はなるべく、それらのものを破壊せずに敵の下へと向かっていく。

ねじれの空間。

それによって、大体、この浮遊城にいる者達の姿形を把握している。

彼らの策略も。

「なるほど。何か小細工したいのだろうか」

メビウスは少し、考えていた。

やはり、人間同士というものは、関係性を結びたがる。

それは、メビウスにはよく分からない感情でもある。

だからこそ、本来ならば、メビウスはシステムのみとして存在するべきであって。

人間同士が、可能性を模索していくべきなのだと考えている。

メビウスは、能力を辺りに広げていた。

ねじれによる、空間把握。

回転と回転とによって、空間の持つ形の構造を読み取っていく。

それによって、ツイン・スラッシュが死亡し。

花鬱がコシュマールとフォールス・メモリーを殺害した事も把握している。

さて。

これからやるべき事はある。

彼らは、メビウスに対して、どのような態度を起こすのだろうか。

少しだけ。興味がある。もしかしたら、その感覚は。

人間で言う処の、好感と呼ばれるものなのかもしれない。

……………。

庭園の中。

一人の女が、佇んでいた。

彼女の名前は、否睡。インソムニアの否睡だ。

大鎌を背負っている。

メビウスはすぐに、理解する。

彼女は困だろうか、と。

残りの二人が、メビウスをどうにかする戦略を練っているに違いない。メビウスは他人の心まで読む事などは出来ない。遠くにいる他人の会話を理解する事も出来ない。

始末すべき相手は、『システム・ブレイカー』一人。

彼は凍結の秘密、『リフリジレーター』と呼ばれる、メビウスが戦い続けているものに繋がっているからだ。彼こそが、一番の本命だった。

彼のみを倒す。

無駄な事はしたくない。

メビウスはシステム・ブレーカーの下へと向かった。

十

朝明けは綺麗だ。

花鬱はズタズタに引き裂かれた着物を着替えに、一度、家に戻った。

軽く、シャワーも浴びる。

全身が痛い。後で病院にも行った方がいいだろう。打撲が酷い。肋骨以外にも、何処か、折れているかもしれない。本来ならば、言われた通り、急がなくてはならないが。やはり、無理をすれば、意識が飛びそうだった。

タクシーを使って、ライフから教えられた事務所へと向かう。

一時間くらいして、着いた。

彼女は何よりも、誠意を持って。敵意が無い事を示すつもりで向かっていた。

事務所の方に辿り着く。

完全に焼け爛れていた。

廃墟のような家屋になっている。

花鬱は溜め息を吐く。何となく、状況が直感で分かった。

ツインがやったのだろう。もう、メチャクチャだった。

幹部達の車が近くに止まっている。

花鬱の姿を見つけて、駆け寄ってきた。

「お、お前、お前の仲間がやったんだろう？」

幹部の一人は明らかに動揺していた。

彼はかつて、花鬱が左腕を切断した者だった。

「あたしの仲間がやったんだと思う」

彼は落とし前はどうかしてくれるんだ、と言おうとして、言葉に詰まった。

もう、どうにもならない。

資金の殆どは焼け尽くされてしまった。

マフィアは銀行を利用しない。

なので、この事務所にある金庫に大量の金を詰め込んでいた。金庫は地下にもあり、その中に何億と詰められていた。それが、一斉に燃やされてしまったのだ。

もう、彼らに力など無かった。

花鬱を殺しても何の意味も無かった。

花鬱を殺せると思える人間など、誰もいなかった。

ついでに、資金源となる、ドラッグまで焼かれている。

一応、他のアジトなどや。組織の者の家などに予備として資金やドラッグなども一部、保管してはいるのだが。その程度では、どうにもならない事も知っていた。

何故ならば、彼らの組織もまた、投資の為に、他の組織から金を借りていたりなどをしていたからだ。

彼らの組織は、アナトミアのマフィア組織の中でも、孤立してしまったのだ。

「すまないねえ」

花鬱は悲しそうに言った。

「あたし、どうするべきか分からないけど。いいかな」

花鬱は決心するように、言った。

「あたし、あんたら守ろうと思うんだ。他の組織の奴らから」

沈黙。

幹部の男は目を丸くしていた。

まるで、信じられなかった。

「みんな集めなよ、これからどうするか考えよう」

十

カサネは屈辱に塗れていた。

ライフに舐められ、マゼンダに舐められ。

後はもう、このままでは、組織の者に何をされるか分からない。

更に、携帯電話を砕かれてしまった為。もうどうすればいいのか、分からない。

組織に連絡を取らなければならない。しかし、頭には怒りがいっぱいだった。

手土産に、マゼンダの首でも持っていかないと。どうなるか、分かったもんじゃない。

おそろおそろ、事務所に電話を入れてみる。……繋がらない。

繋がらないからこそ、事態がどうなっているか怖い。

ルーザーにも、電話を入れてみた。やはり、繋がらない。

……組織に見切られたか？ いや、制裁があるかもしれない。

カサネは考えていた。

暗い情念が、彼の中に芽生えてくる。

顔を洗う。

ボロボロにされた酷い顔だ。

部屋の中を、掻き回していく。ダンスを蹴り、洗面所の鏡を割った。

衝動だけが募っている。

大体、彼の人生ってのは、誰かに舐められっぱなしだ。いい加減、うんざりしている。

事務所には、もう戻れない。

制裁が怖いからだ。

それくらいならば。やはり。

あの女、マゼンダとライフのド頭を。打ち抜いて。

何とか、組織に詫びを入れなければならない。

奥歯がぐらぐらしていた。

まだ、あの変な女に蹴り付けられた顔の痛みが引かない。

ついに、奥歯が抜けた。彼は顔を顰める。

マゼンダの写真は持っている。彼女はこの界隈では有名な女優だから。

それから、ライフの写真も持っている。

問題は、彼女達に、どうやって攻撃の起点。的を付着させるかだ。

それから、奴らの居場所は何処にあるか、だ。

もし、彼女達が助けを求めるとすればどこなのだろうか。

考えろ。考えろ。考えろ。

このままでは、自分の立場は本当に拙い事になってしまう。

ふいに閃いた。ポケットの中をまさぐる、財布は取られていない。

その中から、カードの束を床に撒き散らす。

そして、束をまさぐっていく。確かにあった。

以前、貰った名刺。電話番号が記されている。

彼はそこに、家の電話から番号を掛ける。

「……そうか、協力してくれるか」

彼は少し、安堵の息を吐いた。そして。

カサネは走り出していた。

上着の中には、小型のハンドガンが収められている。

十

メビウスはブレーカーの部屋の中に侵入した。

彼はいない。

勿論、何処にいるかも知っている。

メビウスは置かれているパソコンに『ウロボロス』の攻撃を送る。

パソコンはぐしゃぐしゃにねじられ、廻り続けながら圧縮され、崩れ去っていく。

おそらくは、バックアップもあるのだろう。それも処分しなければ、ならない。

この世に存在してはならないのだ。

突然の事だ。

メビウスの首に、深々と、剣の刃がめり込んでいた。

メビウスは、振り返る。一体、何処から攻撃されたのだろうか。

もう一撃、剣の刃が現れて、メビウスの首に再びめり込んで。

メビウスの首を、両断していた。

ころころと、彼女の首は転げ落ちる。

突風が、部屋中を廻った。

「なるほど」

メビウスは胴体から、首を切り離されながらも。平然と周囲を伺っていた。

「何も無い空間から、現れた。お前の能力は確か『瞬間移動』だったかな？」

金色の魔王は平然としている。

「ご名答」

部屋の中に、何者かが現れた。

彼は大振りの剣で、メビウスの胴体に斬り掛かる。

回転の渦。剣が弾け飛び、壊れていく。

しかし。

斬り付けた剣は、また消し飛んで。

そのまま、メビウスの両足へとめり込んでいた。

メビウスは再び、ウロボロスによって、彼を振り払おうとする。

しかし、ウロボロスの攻撃は届かずに。彼はいずこへと消え去ってしまった。

「ふん」

メビウスは呆れた様な顔になる。

そして、足元から剣を抜き去ろうとする。しかし。

足首がまるで、動かなかった。

まるで、足首の時間が止められて、停止されているような。

落とされた首の方は、切断面に向かって廻りながら飛んでいき、付着する。

「修復しないといけなくなったな」

いや、それよりも。

何故か、両足が動かない、という事の方が問題だ。

何をされたのか。

すぐに、理解する。

おそらくは、情報不足であった、もう一人いるメイドの能力だろう。

メビウスは全身を回転させながら、飛ぶ。脚が動かなくなろうが、一切、関係が無い。

ドアをねじれによって、破壊する。

ぐしゃぐしゃにねじれていった木材の破片は、そのまま空中で丸まって、収縮されていく。

ドアの向こうは、回廊が続いていた。

勿論、誰が何処に配置されているかも理解している。

ブレーカーがいる場所は、地下のワインセラー。

一切の無駄がなく、メビウスはそこに向かっていく。

余計なトラップを張り巡らされても困るから。地面を捻って割り貫いていき、その場所へと向かった。

ブレーカーは、ワインセラーの中にいた。

そして、まるで覚悟を決めたような顔をしていた。

「僕を殺すんだらう。ミスティには手を出さないと誓ってくれないか？」

メビウスは嘆息する。

「誓うも何も。私の標的はお前だ。お前は『リフリジレイター』に辿り着こうとした。そえはとても困る事なんだ。能力者の歯止めが効かなくなる現象を呼び起こすからな。つまり、リフリジレイターとは混沌を齎す存在だ。殺人でもなく、虚無でもなく、意志の壊れ去ってしまった世界を撒き散らし続ける。その先には、システムの崩壊、世界の崩壊が巻き起こるだろう。しかし、私自身でさえ、私の事が分からないのだがな。もしかしたら、私を作成した何者かが。おそらくは人形作家だと思うのだが、かのものが憎悪した存在というものが、混沌を撒き散らす存在だったかもしれない。私は神を降ろす為に作られたものらしく、従って、私は便宜上、神と呼ばれる存在らしいのだが、まあ」

メビウスは語るべき言葉を選んでみているみたいだった。

「私がこう言っているのは、お前の死の必然を語る意味を感じているからだ。私は理念なんだろう。そこでだ。お前はリフリジレイターを降ろす現象を齎す情報の入った、ディスクを持っているんだらう？」

「ああ、ああ……」

彼は頷くばかりだ。

「渡して貰おう」

「売ったんだ……ある人物に」

メビウスは、やはり、といった顔をした。

「本当の事を言うとな。お前ではなかった、一番、始末しなければならぬ相手は。だから、花鬱達には告げていない。お前はやはり死ぬべきなんだが。その前に、そいつの名前を教えてくれないか？」

ブレーカーは、洗いざらい話した。

「なるほど、分かった。では、苦しむ事の無いように、始末させて貰う」

メビウスの周囲に、突風が巻き起こる。

処刑の攻撃。

突然。

天井を突き破って。

強大なエネルギーの波動が送られてきた。

それが、メビウスに襲い掛かる。

メビウスはその全てを、ねじれによって防御する。

「ふむ、お前は」

否睡は、右手を掲げていた。

「私の能力『フォリ・ア・ドウ』は、蓄積された暗黒のエネルギーを飛ばす事が出来るんだよお。アナトミアに充満している負の空気。それを動力源にさせて貰った。お前なんざ、空の屑にしてやるぜ」

否睡は、高々と言った。

「ふうむ」

メビウスは無感情で、否睡を見る。

「なるほど、私もまだまだ爪が甘いな」

ブレーカーの姿が無い。

おそらく、粉塵に紛れて。甘名が彼を連れ去ったのだろう。

十

「僕を殺したら終わるだろう」

ブレーカーは、甘名に言う。

「それだと、つまらないだろ？ オレはこの世界をコケにしたい。だから、その結果としてお前を守っているんだよ」

彼は悪意の眼差しを向けてくる。

こいつは、本当にヒネくれているのだろうなあ、と思った。

「いや、僕は死ぬべきなんだ。ミスティの件もある、僕は……」

ふん、と甘名は鼻で笑った。

別に、こいつの為に戦うわけじゃない。

甘名は、自分の為に戦っている。この世界を馬鹿にする為だ。

否睡は大鎌を振り上げて、メビウスを縦に裂こうとした。

メビウスは冷ややかに、彼女を見ていた。

旋風のようなものが、メビウスの辺りを舞う。

否睡は何度も、ねじられ、勢いよく、壁に叩き付けられる。

彼女の肉体は、四肢がまがり、ぐちゃぐちゃになっていた。

メビウスは彼女の肉体の構造を把握している。なので、これでも手加減していた。

「情が移るといふ奴なんだな？ 人間で言う処の」

彼女は彼女なりに出した答えを言う。

「オレは純粹に。何となく、お前が気に入らないだけなんだけどな」

甘名は剣を振るう。

そして、振った剣が、瞬間移動して。

そのまま、メビウスの肩に突き刺さった。

ワインセラーの瓶が次々と砕かれていく。そして、沢山の葡萄酒が漏れ出して、一面が紫色に染まっていく。

否睡はへし折れた、右手を掲げる。

そして閃光。

ワインセラー中が吹き飛んでいた。

メビウスの足元を狙っていた。ナルコレプシーによって眠らせた両足。

地面に大穴が開き、メビウスは空中に落下していく。

ワインセラーに誘ったのは。

丁度、この場所の床は薄く。床を抜けば、空中に繋がっていたからだ。

ミスティは、魔女のような真っ黒な服装をしていた。

さながら、死出の衣のような。

「ご主人様がいなくなれば、私は生きていけないんですよ！」

ミスティはブレーカーを抱き止めた。

そして。

甘名は、彼女のナルコレプシーが送り込まれた短剣を、次々と、落下していくメビウス目掛けて放り投げていく。

ウロボロスの回転を止めなければならない。それによって、こいつは空中に浮かんだり、他人をねじって、ぐしゃぐしゃに出来る。

余りにも、強過ぎる相手。しかし、弱点がある筈なのだ。

もし、こいつの回転を止める事が可能ならば。

こいつを、地面にまで突き落として、破壊する事が可能なんじゃないか？

勝機はある。

否睡は、朽ちた三つ首のドラゴンである『フォリ・ア・ドウ』を召喚していた。

ぼろぼろに、肉体が崩れたドラゴンが。落下していくメビウスへと向かっていく。

メビウスは回転により、落下を止めようとしている。しかし。

ドラゴンは、メビウスへと覆いかぶさる。

ドラゴンの肉体には、ナルコレプシーが仕掛けられていた。

甘名は、更にミスティに支持して、ワインセラーにある、残った酒の中に。ナルコレプシーの眠りの力を送り込んでいく。

甘名は地面へと飛び降りた。

そして、丁度、ドラゴン・ゾンビの姿をしている『フォリ・ア・ドウ』の肉体を、回転の攻撃によりバラバラにしているメビウスに向かって、アルコールを振り掛ける。

そして、全身を引き潰されたドラゴンの背中を蹴って。

メビウスに触れずに。自分だけは瞬間移動によって、上のワインセラーまで戻った。振り掛けたアルコールは、濃度の高いスピリタスだ。

甘名は、火の付いたジッポも投げ付ける。当然、そのジッポにも、ミスティの能力が送られている。

それを、落ちていくメビウスに向かって投げ付けた。

炎が燃え上がる。

メビウスの落下速度が、メビウスのウロボロスの防御によって遅かった為、三名の一連の連携プレーを可能にさせた。

メビウスの肉体が、浮遊城から、落ちていく。

ミスティは放心していた。

「まだだ」

甘名は、強く言った。

ペシリい、と壁に持たれている。ブレーカーの左腕が捻じ曲がる。

甘名は迷わず、彼の肩を掴む。

そして、ミスティの右手を掴んで、その場から移動した。

ウロボロスの攻撃は、まだ生きている。

ナルコレプシーで、全身の部位を眠らせようが、メビウスには関係が無い。

きっと、地面に激突して、肉体がバラバラになったとしても。こいつは、攻撃の手を止める事なんて無い。何故なら、痛みを感じない、人形なのだから。

そいつの持つ力以上に。

痛みを感じない存在が、これ程までに強いとは。

「考えろ、勝機を考えるんだ」

甘名は、強く言う。

殆ど、意地になっていた。

信念があるわけではない。ただ、何か腹が立つだけだ。

みなから、馬鹿にされているような気分。どう言えばいいのか分からない気分に対する抵抗によって、甘名は動いていた。

とにかく、腹立たしいものには、抵抗してやりたい。それだけだ。

「重力波を発生させる装置がある筈だろう？」

甘名は、ブレーカーに訊ねる。

「あ、ああ……」

“コア”と呼んでいる機械だ。

動力源は、大気をエネルギーとしている。

「ミスティのナルコレプシーで。肉体の部分部分が封じられている筈だ。だから、抵抗が鈍っている」

甘名は、ミスティから能力の全貌を訊ねている。

「オレを眠らせた時は。薔薇園中にお前は能力を仕掛けていた。部分部分にナルコレプシーを送り込んでも、ナルコレプシーはその部位にしか効かない。なら、全身に作用するならどうだろう？ 先ほどのアルコールや炎の散布も、奴の全身に撒く事が出来なかった、しかし、重力波にナルコレプシーを送り込むとすれば？」

ミスティは驚愕していた。

ブレーカーは唸る。

十

「確かに良い案だが」

メビウスは既に、辺りに纏わり付いた炎を消し飛ばしていた。

ナルコレプシーの攻撃。

実は、対して効いていない。

全て、瞬時に回転の渦によって、遮断出来るからだ。

しかし、彼女は甘名と否睡。彼らの意思を汲み取った。

人間が、自分を倒そうとする事。

それは、何故なのか。と考える。

メビウスは考える。

甘名。あれだけの決断力。意志の力。

もし、彼がドーンの為に戦ってくれるのならば。……。

暗黒のエネルギーが、落下するメビウスに向かって撃ち込まれてくる。

これは、否睡の『フォリ・ア・ドウ』が吸収していく、人間の負の感情を吸い、弾丸へと変える『キルリアン・ストリーム』だろう。

メビウスは、あえてその攻撃を受けてみた。

おそらく、全力の攻撃だろう。

辺り一面が崩壊していく。

その余波だけで、遠くに離れたビル群が震動していた。

彼女も捨てがたい。ドーンの未来の為に、生きてくれる事を強く願っている。

メビウスは落下寸前に、ウロボロスのねじれによって、自身の肉体を空中に固定する。

しかし。

全身に、奇妙な違和感。

全身の全てのコントロールが効かなくなっている。

……これは、浮遊城を取り巻く重力波か。

それが、更に強く作用されている。威力を限界まで引き出しているのだろう。

しかし、そんな攻撃、何も問題が無い。この攻撃自体はだ。

だが、問題は。眠らせる能力が付け足されている。

メビウスの顔は、複雑な表情になる。

無機質な顔に、浮かび上がった人間に近いような相貌。あるいは、それは光と影によって作られたコントラストでしかなかったかもしれないが。

甘名と否睡。それから、ミスティという女。

彼らは、メビウスの能力を過少評価している。その威力もだ。

確かに、このままだと、ナルコレプシーを送り込んだ重力波によって彼女の肉体は、凍結していくのだろう、だが。

メビウスは考える。

人間が人間を守りたい、と思う意志。

それは、決して合理的なものなのではないのだろう。

おそらく、彼らは何となく、気に入らないから、で動いている。

彼らの感情の揺れこそが、人間の可能性かもしれない。

それこそが、メビウスが守らなければならないものではないだろうか。

システム。ドーンというシステム。

そして、能力者という人間の限界を超えた可能性。

確かに、沢山の能力者が罪を犯す。

他人を傷付け、強奪し、欲望のまま生きる。ドーンは、何かしらの法となって、動き続ける必要があるのだと考えている。メビウスが、ドーンというものを作った時に、力に対しては法が必要なのだらうと思った。

メビウス自身は、自分を法の番人だとかは思ってはいない。

ただ、自分はシステムなのだという自覚があるだけだ。

メビウス自身には、善悪などない。

ただ、動かないといけないのだらう、と考えている。

ウロボロス、という能力。

円環と、回転、ねじれを生み出す能力。

既に、攻撃は終わっていた。

此処から、浮遊城の奥まで。十分に彼女の能力は届くのだ。

十

めきり、とブレーカーの首がねじれ、回転していく。

そして、彼の全身も廻っていく。

彼は、一瞬にしてぐしゃぐしゃになり、ミンチへと変わっていった。

それは、余りにも無情過ぎた。

ブレーカーの肉体が、収束されて、潰れていく。小さな塊へと。

それを、甘名と……最愛の恋人である、ミスティは眺めていた。

沈黙。

それから、時間が何分もの間、止まってしまった。

ミスティは甘名を強く、抱き締めた。

甘名、悔しさで胸が張り裂けそうだった。

怒りばかりが、増長していく。

しかし。甘名は動く事が出来なかった。

「さようなら、そしてありがとう」

ミスティは歩き出す。

「楽しかった。あなたと出会えて、それから、色々、ごめんなさい」

ミスティは、見晴らしのよい展望台へと向かっていた。

此処から、アナトミアが一面に見渡せる。

悔いはない、これまで生きてきた人生。

今の自分の決意。

大切な人。大切な友人。大切な友人にごめんね、と未だ思っている。

けれども。

どうしようもない。

ミスティは展望台から飛び降りた。

まるで、鳥が羽ばたくように。

地面へと吸い込まれるように、落下していく。

甘名は動けない、ナルコレプシーを全身に受けたから。

否睡もまた、肉体の損壊が激しく。更に、この事態を把握していなかった。

.....

ミスティの肉体が地面へと、落下していく。

まるで、川に飛び込むオフィーリアのような彼女。

あるいは、毒を飲むジュリエットのように。

最愛の人の事を思って、彼女は死へと跳躍する。

そこには、ある種の耽溺のようなものさえ、感じられた。

メビウスは落ち行くミスティの姿を見ていた。

メビウスは、ウロボロスの能力を使って、彼女の落下を止めようとした。

重力波によって、彼女の落下速度は速い。しかし、メビウスならば、止められる。

しかし。.....

メビウスは少し。何処か、陰鬱そうな顔になった。

彼女は、既に.....

彼女は、落下の途中で。自らの喉に、深々とナイフを突き立てていた。

鮮血が舞うように、広がっている。

爆ぜた身体。

ミスティの肉体は、深く地面に吸い込まれていく。

浮遊城からの距離と。重力波のエネルギーによって。

彼女の肉体は、まるで原型を留めない。滑らかなカーペットのようになっていた。

.....

十

シーズンズは、くっくっ、と笑いながら、二人を逃がす算段を教えていた。

ライフとマゼンダは、彼女を不気味に思いながら、裏口から外に出る。

「此処から数キロ先にある列車に乗ればいい。そこから、逃亡の飛行機まで行ける。ライフさん、あんた。報酬払って貰うからね。次の街では、あんた達を保護してくれるでしょうよ。そこで、ライフさん。あんたは賭けをするんだ」

「賭け？」

「そう、賭け。賭けで私への報酬を払って貰う。負けたら、あんたの身体を売って貰う」

ライフは苦笑した。

「私、もういい年なのよ。お風呂の仕事じゃ稼げない。付く客がいても、少数の変態だけ。私の身体じゃ無理よ」

「言い方が悪かったわねー」

シーズンズの下卑た声は、裏返る。

「身体を売る、ってのは。あんたの皮膚、網膜。肝臓、腎臓。その他、もろもろのパーツ。売れるんだよ、これが。まあ、大した事にはならない。あんたは一生、マゼンダに食わせて貰えばいい。生活出来る程度に身体のパーツは残るだろうからさあ」

ライフは大きく溜め息を吐いた。

こいつは、何処まで行っても、クズだと思った。

「じゃあ、そろそろ。外に出な」

シーズンズは、少し気だるそうに言った。

二人は、制服屋の裏口を出る。

まるで、待っていたように。

一人の顔面が変形した男が。

拳銃を向けて、発砲した。

マゼンダの身体が吹き飛ぶ。

そして、地面に倒れて。沢山の血を撒き散らしていた。

男は、カサネだった。

事前に、シーズンズに連絡を取っていたのだった。

完全な裏切りだった。

シーズンズは、げらげら笑っている。

「な、何で？」

ライフは理解出来ないといった顔をしていた。

「ええ、だって。彼も依頼を持ちかけていたから。彼も沢山、報酬を払うってさあ。だったら、いいじゃないか。どっちだって」

彼女は底無しに、卑猥な顔で。含み笑いを浮かべている。

「いやあ、いやあ、私は別にあんた達二人をちゃんと逃がす事も考えていたんだよお。手回しもちゃんと済ませていた。ただ、あの男がこちらに来る前に、あんた達が出発出来ればよかったんだ。その場合、あの男を私は裏切った、という事になっていたね。私はどっちでもよかったんだよお？ 金を引き出せる相手なら」

げらげら、青髪の女は笑い続ける。

その顔は、醜く歪んでいた。

カサネは震えていた。

ライフは彼を睨み付ける。

「マ、マフィアのボスに殺されるんだよ。このままだと」

ライフは、こいつをどうしてやろうか考える。

マゼンダの方を見る。

彼女は息をしていない。

頭の一部が消失している。

シーズンズは笑い続けている。

空では、大気が荒れ狂っていた。旋風が捻れながら、空気を切り裂いている。

十

「ふん。お前なんだろう？」

突風と共に。

そいつは舞い降りてきた。

黒いドレス。腰元まで伸びた、うねるような巻き毛。

そいつがそこにいるだけで、周囲の空間が変わっていた。

朝の雑踏が、遠くから聞こえてくる。

その異形は、そこに佇んでいた。

ライフもカサネも。事態が分からない。

そいつは、青髪の女を睨み付ける。

「システム・ブレーカーがお前に情報を送っていたな。ディスクがあるんだろう？ “凍結装置”を召喚する為のディスクが」

お前は何だ？ と誰かが言っていた。

ひょっとしたら、ライフだったかもしれない。

「ああ。私はメビウス・リング。ドーン、だ。そこにいるマゼンダ・ヴェルベットも死んだか。これで、花鬱達の討伐予定だった四人全員が死んだな」

彼女は淡々と言葉を紡いでいく。

「処で、始末する相手として、私は予め五人目がいる事を知っていた。ブレーカーが情報を渡した相手だ。それが、お前だ。シーズンズ・ヒュプノシス」

冷酷な。

死刑宣告を放つ。

「お前は私が始末しなければならない。何故ならば、お前はもうリフリジレーターを、凍結を。混沌をその能力と融合させているんだろう？ お前は死ぬべきだ」

黒衣の死神は、ゆっくりとシーズンズに近付いていく。

ライフもカサネもまるで、動けない。

空間が、混沌の渦を巻いている。

シーズンズは蒼ざめた顔をしながら、店の中へと逃げ込んだ。

メビウスも店の中へと入る。

店の中には、沢山のコスチュームがある。

シーズンズは笑っていた。

実は、この服達こそが、彼女の能力の媒体だった。

彼女の潤滑油のごとき力を浸透させた物達だった。

彼女が売り捌いている服。それは彼女の端末になっていた。

アナトミア中に、彼女の服を買った者達がいる。

別に、倒錯的なコスチュームでなくとも。小さなアクセサリなどの貴金属も売っている。それを、オークションで流していたりもした。高価なものも取り扱っている。

更に言えば、浮遊城のブレーカーも、彼女の品物を購入していた。

それらの服やアクセサリを通して、彼女は情報を掴んでいた。

ズンヴィー達も、買っている。ズンヴィーの鼻のピアスなどは、彼女から買ったものだ。

だから、ズンヴィー達の情報も手に取るように分かった。

彼女は。

自分自身を、どんどん広げていく。

そして、いつしかあらゆる人間が、彼女の支配化に置かれる筈だった。

しかし、それだけでは、彼女の能力の力だけでは無理だ。

だからこそ。

システム・ブレーカーが、ドーンのハッキングによって手に入れた情報。それを元にして、自分自身の肉体に、メビウスと対なる存在、リフリジレーターを降ろしたのだった。

彼女の能力『ドープ・ショー』。

それが、力の外側を超えた。超越したものへと変わっていく。

シーズンズは、並んでいるコスチュームの中から、あるものを見つけて身に纏った。

シーズンズの肉体は、変形していく。

彼女は、道化師の衣装を身に纏っていた。

リフリジレーターの力は、道化の力であると聞く。それを聞いて、彼女は自分自身をより、リフリジレーターに近付けようとしていた。

この世界には、『凍結』という概念がある。可能性を閉じ込めて、終わらせる状態。

シーズンズは、それに至ってしまった。

だから、彼女はこの世界では生きるべきではない。

メビウスはその様子を、眺めていた。

シーズンズは、くるくる、と踊り出し。回りだす。

全ての、調律が狂えばいい。自分の思考を終えるのだ。

全ては、マリオネットなのだ。この世界の外側にいる大いなる存在の操り人形。シーズンズはそれを受け入れる。そして、彼女の能力を浸透させた者達、全てを操ろうとした。

シーズンズの『ドープ・ショー』は、混沌、という力に至ってしまった。

力の解放。

それは、全ての意味の崩壊でもあった。

憎悪も、殺意も、悪意も、歓喜も、官能も、虚無も何もなく。

ただただ、回り続ける道化芝居として機能する。混沌。

メビウスが滅ぼすべき、概念。

メビウスは自分の事を正義だと思っていない。

何が正しい世界かも分からない。

善悪のどちらも、否定も肯定もしない。

ただし、だ。

彼女は。善悪でさえ意味を無くす、何が善悪かすら思考を止めようとする。

混沌という状態だけは否定するべきだと考えていたし。彼女はその為に創られたものだと思っている。

たとえ、世界中の人間を皆殺しにしようとする行動でさえ、メビウスは否定しない。そんなものを止めるのは、メビウスではなく、ドーンの者達の役割。人間達の役割なのだ。

メビウスは彼らに力を貸し、彼らを見守る。そんな立場を取り続けている。

やはり、ブレーカーを殺すのは。メビウスであるべきではなかった。

それは、少し後悔している。

だが。役割は果たす。

この世界に、混沌の種が撒かれぬ為に。言わば。

この世界を、守る為に。

シーズンズは、自身の能力を解放しようとしていた。

全てを自分の操り人形にしてしまおうとする、力。

その波動を送り続ける。

そのついでに、目の前の敵。メビウスも倒してしまおうと。……。

しかし。

勝負は、一瞬にして付いていた。

青髪の女が至った混沌の力。世界を混沌の渦へと向かわせる力。

ついに、その力は、この世界に発現する事は無かった。

その前に、彼女は終わっていた。

シーズンズの肉体は、ぐちゃぐちゃになる。回転に回転を重ね。何度も何度も、擦り切れていき、磨り潰されていき。原型を留めない。そして。

シーズンズの店。魔窟。

この人形芝居の館すらも、全て回り、回転し。磨り潰され、圧縮され。限り無く無へと向かっていく。

まるで、見世物舞台だ。何もかもが。劇は終わり、舞台のセットは仕舞われていく。

メビウスは外に出る。

後には、何も残っていない区画があった。

ライフとカサネは怯えている。

そして、マゼンダの死体が置かれている。

「すまなかった」

メビウスは、ライフに謝罪の言葉を述べる。

そして、メビウスはこの場から、去っていった。

十

花鬱はあるアパートへと向かう。

そこは、マゼンダのアパートだった。まだ、引き払われていない。

扉を開ける。

中には、ライフがいた。

露出度の高い服。

背中に彫られている、十字架を背にするマリア像の刺青が露になっている。

二人はお互いの顔を見合わせる。

何だか、お互いにどんな表情を返していいかわからない。

部屋の中の物は警察に押収されている。黄色いテープが貼られていた痕が見つかる。今は、警察の姿はない。押収された物は、ライフが引き取るのだと言う。

ズンヴィーがどうなったかは、知らない。

きっと、まだ何処かで生きているのだろう。

花鬱は、彼女を追うつもりはない。

実は、花鬱は彼女から、此処に来る前に電話を貰っていた。

「俺は、アナトミアを出て行く。アナトミアで、もう殺しはしない。それで、いいだろう？」

彼女の声は、何処か酷く、寂しそうだった。

大切な人間を失った悲しみ。

彼女の声は震えていた。花鬱に対する憎悪はあるだろう、しかし、復讐心はないみたいだった

。

メビウスも、もうズンヴィーには興味を持っていない。本命を始末出来たのだから。

これは、花鬱の問題なのだ。ドーンの処刑人としての。

しかし、花鬱はもう、ドーンで仕事をする資格が無いのだと思っている。

ライフはマゼンダの首の無い人形を見ていた。

確か、彼女はアオバといったっけ。

アオバとは、青葉なのだろうか。芽吹く緑。

花鬱とライフは、同じ空間。同じ時間。それから、同じような感情を共有していた。

マゼンダ・ヴェルベットの死。

ツイン・スラッシュの死。

大切な人を、失った二人。

何故、自分達は、こんな関係になってしまったのだろう。

「私、人形を創ろうかなあ」

ライフは言う。

花鬱は頷いた。

彼女の背中。

幾つもの、彫師を渡り歩いて、納得の行く図柄にしたという刺青。

それは、彼女が本当に大切だからこそ。まるで妥協出来なかった。

花鬱が着ている着物。百合は何だか、刀剣に似ていると思った。だから、好きな花だ。

二人とも、大切なものを持っていた。

マリア像と、曼荼羅。二人がそれぞれ、好きなもの。

二人共、背負いたかった。マリア像を、曼荼羅の絵を。それらを、聖なる象徴として。

それぞれ、ライフは刺青として。花鬱は自身の力の名前に入れて、背負おうとした。

大切なものを守りたい。ただ、それだけで行動した二人。

そこに、善だとか悪だとかあったのだろうか。分からない。

何も、分からない。正しい事など、無いのかもしれない。

ただ、人の痛みがあるだけだ。

カサネは。

刑務所に入れられた。

マゼンダとツインを殺したのは、彼だ。

マゼンダはドーンが指名手配犯にしていた為、その関係上、マゼンダの罪を問う事は出来なかったが。ツイン・スラッシュの場合は違った。それに、彼には沢山の余罪があった。

児童買春、薬物売買。もろもろ、警察は彼の自宅捜査を行って、彼の新たな罪を見付けていった。……彼はマフィアの命令で。自身の能力によって、様々な人間を殺していた。

ツイン・スラッシュはドーンというものに登録している為、その関係上、大きな罪には問えない。しかし、裁判の結果によって。カサネの罪は重くなった。

懲役、三十年。

これが、重いのか軽いのかは。分からない、能力者とは、能力者の罪とは一体、何なのだろうか。メビウスが、取り敢えずの基準を作ろうとした。それも中々、巧くいっていない。いや、まるで巧くいっていないのかもしれない。

カサネは、能力者専用の刑務所に送られる事となった。

『ブラック・シンジゲート』という場所だ。

それは冷たい牢獄なのだと聞く。夏は焼かれるように暑く、冬は心を砕かれるように寒い場所らしい。

彼はもしかしたら、一生、塙の外に出る事は叶わないのかもしれない。

どうすれば、結論を出せるのだろうか。罪とは、何なのだろうか。

花鬱はズンヴィーの言葉を思い出す。

俺は、フォールスの弔いに生きる。何だか、捕まるのも、お前と戦うのも馬鹿らしくなった。と。……………。

ズンヴィーはアノミアを出る為の、列車に乗っていた。
ドーンの奴らは、ずっと彼女を狙ってくるだろう。
しかし、ズンヴィーの中には空虚感しかない。
片割れを失った感覚。
どうでもいいな、と思っている。この先の事など。
能力者専用の刑務所に入れられようが、殺されようが。どうでもいいな、と。
ただ、喪失感ばかりが漂っている。
本当は、ツイン・スラッシュによって、殺されるべきだったのかもしれない。
殺され損なった、という処だろうか。間違えて、死ねなかったとでも。
何で、自分のような者が生き残ってしまったのか分からない。
今、彼女に目的など無い。
フォールスと一緒に暴れていた頃は、楽しかった。何もかも壊していく感覚が、本当に、楽しかった。しかし、もうその情熱が無い。
ジャケットのポケットと、鞆の中には。拳銃が入っている。
これから、列車を降りた先には。ボディー・チェックがある。
この拳銃。どうするべきか。途中で、何処かに投擲しなければならない。
ズンヴィーは、列車の洗面台に向かう。
そこには、ズタボロで。酷い顔の、不細工な女が映っていた。
とても整った顔をしていたフォールス。美人だった。
生涯、あのような伴侶には出会えないのかもしれない。
彼女はジャケットの中から、拳銃を取り出す。
それを、自らの額に押し当てる。
鏡の自分もまた、拳銃を自らに向けている。
数分後。……。
ズンヴィーは、拳銃を洗面台の床に落とした。
空ろな顔。
まだ、生きている。
そして、拳銃を、貯水タンクの中へと詰め込む。
鞆に残っていたものは、窓から投げ捨てようと思った。
何故、なのだろう。
窓の外の景色。ただ、流れていく。

十

花鬱は路地裏を歩いていた。
彼女は大きなリュックサックを背負っている。
着物姿なので、何だか不恰好だなあと思った。

そして、橋に差し掛かる。

土手だ。

橋の下へと向かう為の階段を、彼女は降りていく。

橋の下を見た。

沢山のダンボール。

バリケードのように、置かれている。

花鬱は彼らに歩み寄った。

彼らは、とても悲しそうで、怯えた眼をしていた。

強い体臭を放っている。生ゴミのような臭い。髪や髭はぼさぼさで、垢だらけの身体だった。焼けずに残っていた、僅かなシンナーを吸って。脳を溶かして現実からの逃避を言い続けている。

彼らの何名かは、片腕や片足が義手だった。

溜め込んでいた金が焼き払われて、資金源が尽きて、警察の手が回って。

彼らはもう、何の活動も出来なかった。

他の組織が勢力を付けて、彼らはもう他の組織に対抗するだけの力を何も持っていなかった。彼らは今や、ただ、路地裏のポリバケツを開いて、食べられそうなものを探す生活を続ける。

毛布に包まって、震えている男達。

花鬱は、彼らに差し入れをした。

果物と焼き魚、チキン。それから、バスタオル。冷えるだろうから、コート。布団。

それから、アルコール度の低いお酒。

彼らは涙を流して喜んでいて。

花鬱は、この場所を去る。

空は蒼い。澄んでいる。雲がたゆたうように流れている。

また、あの青年の処に行こう。

あの青年の存在もまた、花鬱を支えていた。

花鬱が生きる事を支えていた。彼女の信念を支えていた。

花鬱は思う。力とは何なのか、と。……。

十

否睡は、喫茶店に向かっていた。

やはり、いつものように、メビウスが紅茶を飲んでいる。

既に、甘名が彼女と同席していた。

否睡は、複雑な感情で二人を見ている。

「どうした、何か注文しないのか？」

甘名は言う。

彼は、どうやら。メビウスから、どのような紅茶が良いのかを訊ねているみたいだった。

甘名。

両肩の露出した、真っ黒なドレスを纏っていた。否睡はいぶかしむ、彼は白黒のワンピースやドレスばかりを好んでいたような気がするが。……。

二人共、黒尽くめのドレスを纏っている。喪服のような黒。

否睡は席に座る。

彼女は、ケーキを注文する事にした。

ふいに、ツイン・スラッシュの事を思い出す。

彼女と、もっと仲良くなれたんじゃないかと思っている。

気の合うであろう友人ってのは、短いやり取り、短い日にち、短い時間の中でも分かるものなのだ。彼女が、この席に共にいたらと思えば。……。

涙が溢れてきた。

メビウスは、紅茶を飲んでいる。そして、甘名に訊ねた。

「パスタというものは美味しいのか？」

「ああ、美味しい。オレはカルボナーラが今は好きかな」

「そうか。人間は羨ましいな。私は飲み物しか摂取出来ない」

この喫茶店には、他に客がいなかった。

もしかしたら、今はメビウスが貸し切っているのかもしれない。

ドーンとは何なのか、と否睡は思う。

他人の命の重さ。正義。善と悪。殺人の意味。

しかし、そのどれもきっと解答は見つからないのだろう。

ただ、今、やるべき事は。

今、運ばれてきた、モンブラン・ケーキを口にして。美味しいと感じられる事なのだろうと。

ツインはどんな食べ物が好きだったのだろう。それを聞いていない。彼女の部屋の汚さを思い出す。掃除してやりたいと思った。

メビウスは紅茶を飲む。

甘名はパスタを食べる。

否睡はケーキを口にする。

……………。

それぞれが、それぞれ、別々の理念の中、生きている。

だから、みんなが自らの正しさを選択するのだ。

否睡は思う。自分の選んだものが、正しいのだろうと。

E N D